
私は天使なわけじゃない

O k a レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は天使なわけじゃない

【Nコード】

N7095L

【作者名】

Oka レモン

【あらすじ】

Angel Beats!の二次小説

ちよつと……いや、大幅におかしくなってる“天使”こと立華奏ちゃんsideで綴るAngel Beats!!

性格も設定変わってるため、作者にもどうなるか解らないっ！

原作とは結構違うと思うっ！

いろんな意味でっ！

作者はとうとうやっちゃった！！

注意っ！ 奏ちゃん大好きな人と原作アニメを愛してる人は読まない方がいいですっ！

マジで！！いやホントに！！

第1話 初めて会ったこの人、どうやら自殺志願者のようです。(前書き)

これが初投稿になるっす!!

はっきり言って自己満足になります。

自分は文才ゼロ、国語は毎回2〜3を漂ってました。

駄文でもいいっす! って方だけ読んでください。

よろしく願いますっ!!

第1話 初めて会ったこの人、どうやら自殺志願者のようです。

ここは、死後の世界にある学園。

そこには悔いのある人生を生きた者達が毎日を過ごしている。

今は夜。誰もが寝静まった時間に、一人の少女が学園にいた。
銀色のロングストレートの髪に、金色の瞳。
そして天使のような美貌を持つ少女だった。

「今日も今日とて、見回り見回りっとなんて」

・・・あ、ども。たちはなかな立華 奏です。

今、校舎の周りをぐるぐると回っているの。

最近SSS（死んだ世界戦線）・・・だったっけ？ あれって
また名前変わったんだっけ？ えーと、その人達が夜に何かをして
いるようなので、見回りをしています。

私、生徒かいちよーだから。えっへん。

でも、夜だから暗い。

月がちよっぴり出ているから真っ暗じゃないけど・・・。

正直・・・怖いです。

暗いところ苦手なんです、私。

い、いま校庭に向かう途中なんだけど、校舎の角を曲がるんだけど、そこから何か出てきそうで怖い。

「怖くない、怖くない、怖くないよ私」

口に出しながら思い切って、角を曲がる。

・・・

何も出なくてよかった。

内心ほっとしながら校庭へと向かう。

目指すは校庭の真ん中です。

真ん中にいればSSSが何かしてきてもすぐに対処出来るからね。

・・・べ、別に、怖いからじゃないよ？ 遮蔽物がないから何か出

てきてもすぐに逃げられるからからとかじゃないよ？

とりあえず真ん中まで来ました。

「Guard-Skill distortion」

SSSの人達にいきなり銃で撃たれたくないので、先に“でいすーしょん”を使っておきます。

撃たれると痛いんだよ？　すぐ治るけど・・・。

私は目を閉じて、耳を澄ます。

私、耳良いんだ。

すると、何やら男女の言い合うような声が聞こえてきました。

多分、女の人の方はゆりっぺさんだ。

ゆりっぺさんはヘアバンドにセミショートの綺麗な人で、SSSのリーダーなんだよね。

私のことを“天使”と言って仲間と一緒に襲ってくるの。

正直言います。あの人は怖いです。ホントに……。

だって、この間戦闘になったとき、女の人あまり刺したくないから使っていた銃を“はんどそにつく”で斬ったの。

……そしたらあの人、いつも被ってるベレー帽の中からサバイバルナイフ取り出して斬りつけてきたんだ。

驚いて動けないときに、右腕切り落とされましたよ私。

……再生したけどさ。

他にもベレー帽から銃とかバズーカとかロケットランチャーとか出すんだよ？ あの人……。

きっとあのベレー帽は何処かのタヌキのポケットと繋がってると思うの……。

私は目を開けて声の方を見る。
目も良いんだよ？

そこにいたのはやっぱりゆりっぺさん。男の方の人は……。

見たことはありません。

新しいお仲間さんでしょうか？

というかまた私を襲ってくる人が増えるのね……。

辛いです。というか寂しい。

私は、いつも1人。

ゆりっぺさんは私が気付いたことに気付いたようで、すぐに生け垣に隠れました。

男の方の人は……あれ？

なんかこっちに向かってきますね。

……なんだろ？

男の人は茶色い短めの髪で同じ色の瞳。
結構背が高いかな？ 私から見るとだけど。

男の人の後ろからはゆりっぺさんの怒鳴り声が聞こえてくる。

仲間じゃないのかな？

男の人は私の目の前まで来た。
彼は何か迷っているようですが、

「あ、えっと・・・こんばんは」

・・・挨拶された。時間帯でいうと“おやすみ”の時間だけど・・・。

ちなみに私は見回りがなくときは10時に寝ます。

なので今はとても眠いの。

「あんだ、さっき銃で狙われてたぞ。あんだが天使だと言って」

やっぱり狙われてたんだ。“でいすーしょん”使っておいてよかった。

というか、天使って・・・まだそう言ってるんだね。

「私は天使じゃないわ」

どちらかという点小悪魔を目指してます。

「だよなあ・・・、じゃああなたは」

「生徒かいちよー」

「（・・・ん？　なんか変な・・・気のせいかな？）・・・てかアホだ俺は・・・。あの連中にからかわれたんだ。くそっ！　自分が誰かも解らないし・・・。はあ、病院にでも行くよ」

この人来たばかりなんだ。ちゃんと説明しとかなきゃ。

「病院なんてないわ」

「え？・・・どうして？」

「誰も病まないから」

ふふん、完璧な解答だね。

「病まないって・・・」

「みんな死んでるから」

そう答えてると男の人は表情を変えた。

あれ？ 怒ってる？

「ああ、判った！ お前もグルなんだな！ 俺を騙そうとしてるんだろ！ この記憶喪失もお前らの仕業かつ！？」

・・・何か勘違いしてるみたい。グルって言われても、私は襲われてる立場なんだけどな！。

というかこの人記憶喪失なんだ。じゃあそこも説明してあげないと・・・。

「記憶喪失はよくあることよ。ここに来た時は。事故死とかなら頭もやられてる時があるから」「じゃあ、証明してみせろよ！ 俺はもう死んでるから」

証明って言われても、私にどうしろと・・・。

「死なないってよっ!!」

んー。じゃあ一回死を体験してもらえば大丈夫かな？

「h a n d s o n i c」

私が呟くと、袖口から薄く、半透明な刃が現れる。

とりあえず、

「・・・・・・・・えい」

私は男の人の心臓目掛けて刃で胸を貫いた。
彼の胸からは血が吹き出てくる。

私は“でいすとしょん”を使っているので、血がかかることは
ないの。

便利だよねー、“でいすとしょん”。

私は刃を引き抜いて“はんどそにつく”を解除した。

男の人は膝から崩れるように地面に倒れた。
彼を中心にして、血の池が出来ていきます。

その光景を見ていたゆりっぺさんは急いで逃げていました。

今日は戦闘にはならないみたい。一安心ね。

さて、今日のお仕事はこれでおしまい。この男の人を保健室に
運んだら、寮に帰って寝よーっと。

「ふあ〜」

あくびが出ちゃった。やっぱり眠いの。

………そういえば、保健室開いてるかな？

t o b e c o n t i n u e d

第1話 初めて会ったこの人、どうやら自殺志願者のようです。(後書き)

「そうだ。Angelを書こう」

てきな感じで始まった本作。

読んでくれた人ありがとうっ!!

マジ感謝っす!!

自分今期のアニメで見てるのが、Angelとわーきんぐだけなんだけど、

さすがkoy! さすがだー〇え!

ってな感じの鍵っ子でして。

ちよつと奏を動かしてみたくなって書きました。

そして出来たこの作品。

……これは奏ですか？

と自分でも思いました。

後悔はしてない。反省はするけど・・・。

正直続くかも解りません。
どうなることやら・・・。

後書きってこんな感じでいいんだよね？多分。

それじゃこの辺で。

もう一度、読んでくれた人マジありがとっ！！！！

第2話 朝から放課後までの私の活動記録

く会話したのって直井君だけだ

な、なんと二話目を作ってしまった・・・っ!!

しかも、読んでくれる人がいるっ!!

マジ感謝っ!!

今回出る原作キャラはあの人!!

ってサブタイトル見るとすぐ分かってしまったぜっ!!

第2話 朝から放課後までの私の活動記録

く会話したのって直井君だけだ。

次の日の朝。

私はいつもと同じ時間に起きた。

・・・でもまだ眠いや。

私はお布団から出て洗面所に向かう。

目を擦りながら、鏡に映った私を見る。

・・・寝癖すごい。いろんなところが跳ねてる。

・・・朝ごはんの前にシャワー浴びなきゃ。

奏・シャワー中

シャワーを浴び終わった私は身体にタオルを巻いただけの状態で、濡れた髪をドライヤーで乾かしていく。

この前制服着てから髪を乾かしたら、制服びちょびちょになっちゃったんだよね。

失敗は繰り返さない。それが私・・・。

「へくちっ」

くしゃみが出ちゃった。この格好は身体が冷えるのが欠点かな？

新しく何か考えないと。

髪を乾かし終わったあと、冷蔵庫から牛乳を取り出す。

もちろんビンです。

私はそれを少しずつ飲んでいく。

一応毎日牛乳は飲んでるんだけど・・・。

視線を下に向ける。

．．．．．大きくなつてはくれません。

うう．．．ちよつとぐらい大きくなつてもいいと思う。

．．．．．とりあえず、飲み続けるの。

制服を着て、朝ごはん（マーボーじゃないよ？）を食べ終わつた私は、カバンを持って寮を出た。

向かう先は、生徒会室です。

生徒かいちよーは忙しいの。

生徒会室

「おはようございます、会長」

生徒会室に入ると、そこにいた男の人に挨拶された。

男の人の名前は直井^{なおい} 文人君^{あやと}。私は直井君と呼んでいる。

黒い髪のショートで黄色の瞳の男の人。

彼はいつも通り、学生帽を被って自分の席に座っていた。

室内のときぐらい取ればいいのに・・・。

「おはよう、直井副かいちよー」

「あ、あの。その“会長”の言い方どうにかなりませんか？」
「？」

なんのこと？

「・・・何でもありません」

直井君はそうつと自分のノートパソコンを開いて、キーボードを叩き始めた。

・・・変な直井君。

私は奥のかいちょー席に腰を下ろす。

机には私専用のパソコンが置いてあり、起動状態になっていた。

もちろんパスワードはあるけど・・・。

「えーと、パスワードは・・・・・・・・“身体は豆腐で出来ている”
っ」と

「・・・口に出したらパスワードの意味が無いじゃないか・・・。
てかなんだよ“身体は豆腐”って。意味がわからない・・・」

直井君は何かぶつぶつ言いながら力強くキーボードを叩いている。

どうしたんだろ？

私はパスワードを入力してエンターを押す。

通常画面になると一つのプログラムが自動で出てくる。

生徒リストだ。

これが勝手に始まるときは、この世界に新たに来た人がいるということ。

私は画面に映されたリストを見る。

その中に赤く点滅する名前がある。それが新たに来た人なの。

その名前は、音無。

私はその名前をクリックする。表示されたのはその人のプロフィールのようなもの。

そこに載っている写真を見ると昨日の男の人だった。

音無君、か・・・。

私は彼の名前を覚えて、そのプログラムを閉じた。

さて、お仕事お仕事っと。

「そういえば会長」

書類を整理していた私は、直井君の声に顔を上げる。

彼は未だにノートパソコンに目を向けたまま、

「会長が昨日生徒会室の前の廊下に置いた“かなでボックス”とかいうの。アレ撤去したんで」

衝撃の一言を告げた・・・っ！！

「な、なんで？」

「あんなの誰も使いませんよ」

「で、でも生徒が悩み事とか入れるかもしれないじゃない」

「あ、一つだけ入ってましたよ？」

やっぱり！ 使う人いるじゃない直井君。

「コレです」

直井君に渡された二つ折りにされた紙。

いったいどんな悩みかな？

匿名希望

・・・これ漫画のパクリじゃん。

ビリビリっと私はその紙を細かく破った。

・・・どうせ私はあんなかいちょーにはなれないよ。
うう。

「撤去してよかったですね？」
「・・・・・・うん」

・・・悲しい。構って欲しくてやったのに。

「・・・・・・・・コイツ、本当に天使なのか？　ただの天然ボケなだけなんじゃ・・・・・・・・」

私にはその直井君の眩きは聞こえていなかった。

教室

生徒会室から教室に戻った私は自分の席でノートを開いた。

普段の私は無口系生徒かいちよーで通っています。

その方がなんかカッコいいと思ったので。

まあ、そのせいで友達一人もないけどさ・・・。うう。

一応参考にしたのは、とあるアニメの宇宙人。

私にはあんな分厚い本は読めないけど。

私が読むのは主に漫画なの。

最近また魔法少年先生の本を読み返してる。

レベルのインフレが凄まじいよね。少年はほぼ最強になってるし……。

私も闇の魔法とか使ってみたいな！。

アレなら銃弾とか効かなそうだし。

今度作ってみようかな？

……でもゆりっぺさんが、“斬○剣・弐の太刀”とか使ってるきそつで怖いなあ。

あの人なんでも出来るし……。

「ほら、チャイム鳴ったぞっ！ 席につけー」

先生が来ました。今から授業ね。

ちなみに考えてる間、私はずっと無表情でした。

・・・というか、無表情がデフォルトだったよ私。

学園大食堂

午前の授業が終わり、私はお昼を食べるために食堂に来た。

この学園の食堂はとにかくデカい。

たまにここでライブもやってるの。

私はいちよーだから止めなきゃいけないんだけど、たまに変装してライブを観たりしてる。

結構みんなうまいんだよね。

ホントは止めたくないんだけど、止めないと私が怒られるから

な！。

私はサンドイッチと牛乳（だからマーボーじゃないよ？）を手に席に着く。

一人で黙々と食べていると一般生徒の会話が聞こえてきた。

どうやら、今日の夜にここでライブがあるらしい。

・・・この前のライブは変装して観てたから、今日は止めないと。

でも、ライブやってるのはSSSのメンバーだし・・・。

また戦闘になるよね・・・。

「痛い、やだなあ・・・」

はあ、と私はため息をつきながらサンドイッチを食べ終えた。

牛乳も一応飲みましたよ？

「かいちよーも、楽しやないよね．．．．．」

t o b e c o n t i n u e d

第2話 朝から放課後までの私の活動記録

く会話したのって直井君だけだ

どうも。Ok a レモンです。

実はコレ中学んときのニックネームでした。

まあ、こんな感じで続いたんですが。

・・・・・・ほんとにこんな感じですよ？

いいんですか？ そのアナタ。

俺はマジ感謝してますがっ！！

というかあとがきまで見てくれるそのアナタっ！！

あんたは勇者やー！！

ありがとうー！！（土下座）

では、これにて。次回があるのかどうか・・・。

第3話 私の思い、あなたたちには届かない。(前書き)

雲の切れ間の

月の光は

私とあなたを照らし出す。

月夜に舞うは

雪の花

私はそれを、ただ見続ける。

まだ、届かないことを知って

第3話 私の思い、あなたたちには届かない。

午後の授業中、二人ほど空を飛んで思わず笑いそうになっちやっただけど、なんとか堪えることが出来た。

今は放課後。

私は生徒会室に向かっていた。

・・・そういえば、会議以外で生徒会室にいるのって私と直井君だけだ。

他の人はどこでお仕事してるのかな？

生徒会室

生徒会室には誰もいなかった。

誰もいないと、やっぱり寂しいなあ・・・。

私は生徒かいちよー席に座り、パソコンの電源をつけた。

お仕事しなきゃ。

「……………」

私は今さら重要なことを思い出した。

……朝やったので、今日の分のお仕事終わったんだった。

急にすることがなくなっちゃった。

どうしよ…………。

パソコンはまだ通常画面にもなっていない。

……電源ボタン押しちゃえ。

私はパソコンを強制シャットダウンさせた。

本当は壊れちゃうからしちやダメなんだけど、ここのパソコンは壊れないからいいよね。

。さて、やることがないけど、寮に帰るわけにはいかないし・・・

確かライブが始まるのは18:30

そして、現時刻は16:30

二時間も何してよう・・・。

・・・そういえば、数学の宿題が出たっけ？

暇だし・・・。やろうかな。

・
・
・
・

結構量があったなあ。

というか難しいよね、ベクトルって。

ただの“やじるし”なのに。変な式がいっぱい。

時計を見ると、18:00

一時間半もかかるとは・・・。

あの先生は毎回宿題出しすぎだよね、あとで進言しとこ・・・。

私のおかげで宿題が減れば、みんな私に少しは構ってくれるかも・・・。

なんて、ね・・・。

「失礼します」

その声と同時に生徒会室のドアが開かれた。

声の主は直井君。

まだ帽子被ったままだ。
いつ帽子取るんだろう？

「取れません」
「!？」

心読まれた・・・っ!!!？

直井君の前ではあまり変なこと考えないようにしよ・・・。

直井君は自分の席には座らず、かいちょー席の前に立つ。

「会長。どうやら学園大食堂にて、ライブ活動が行われるようです」

直井君もどこからか情報を掴んだようだ。

「うん、知ってるわ」

「どう対処するか、お決めになりましたか？」

「私一人で行くわ」

「お一人で・・・ですか？」

「うん。あの人達が用があるのは、私だから」

「・・・判りました。失礼します」

直井君はそのまま生徒会室を出ていこうとした。

「直井君。また明日」

こういう挨拶は大切だね。

直井君は私の言葉に振り返らずに、足を止めた。

「・・・また明日です、会長」

彼はそう言って、寮へと帰った。

他の人に頼るわけにはいかない。

SSSの行動は、私が止めなくちゃいけないこと。

あの人達の目的は、多分、神に抗うこと。

そして、私は“天使”“敵”として認識された。

．．．．．私は敵でもいいから。

悔いのないように、この世界を生きて欲しい。

笑顔で、この世界から出られるように．．．。

現時刻．．．18：25

「
行こう」

第二連絡橋

SSSは私が学園大食堂に来れないように、連絡橋を塞ぐよう

に人を配置する。

これまで何回も同じことがあったけど、パターンのにここに誰かを配置することがあまりない。

それにSSSの人数を考えると、どこか一つの連絡橋には人を配置出来ない。

いや、出来ないはずだった。

「………音無君」

この第二連絡橋に、彼がいた。

SSSに入ったんだ……。

彼が入ったことにより、これで連絡橋が空くことがなくなった。

これから大変だなあ……。

彼は、まだ私に気付いていない。

私は思わず橋の前で立ち止まった。

また一人。敵対する人が増えてしまった。

悲しくないといえは嘘になる。

それでも私は

雲が千切れ、月が顔を出す。

音無君は、私に気付いた。

彼は驚いたように私に銃を向ける。

ライブはもう始まっている。

彼女達の歌が風に流れてここまで届く。

・・・行かなきゃ。

私は止めた足を前に出す。

一歩、一歩。確実に音無君に近づいていく。

彼は震えているようで、私に向ける銃口が定まっていな

彼はまだ銃を扱ったことはないはず。

このまま撃たないでくれると助かるんだけど。
・・・無理だね。

あと十歩程度で音無君の位置へと進める。

その一歩を踏み出そうとした刹那、

音無君が引き金を引くのが見えた。

発砲音とほぼ同時に、弾丸が私のお腹を貫いた。

その衝撃に、私の身体が大きく揺れる。

．．．．．痛い。

すごく痛いよ．．．。

痛い。痛いよお．．．。

私は“でいすとーしょん”を使い忘れていた。

ブレザーに私の血が染み込んでいく。

思わず弛みそうになる涙腺を必死で耐える。

私はお腹に空いた穴を手でそつと押さえる。

速く．．．。速く再生させないと．．．痛みで気絶しそう．．．

。

出血を止め、内臓に空いた穴を再生。
最後に皮膚を再生させた。

所要時間、約5秒。

・・・うう、痛かった。
治ったけど・・・。

ホントはもう帰りたい。
でも、それは出来ない。

相手はまだ音無君一人。
なら、

「Guard-Skill h a n d s o n i c」

これで、充分なはず・・・。

袖口から形成される白刃。
私はまた一歩ずつ歩き出す。

「どうして！？ どうして止まらないっ！？」

音無君は震えながらも、銃を構え直す。

・・・止まらないんじゃない。
止まらないんだよ、音無君。

彼はもう一度引き金を引いた。
瞬間、私の身体は自動で動く。
音速レベルで翔んでくる銃弾を、私は“はんどそにつく”で弾いた。

「な、なんだよそれ!？」

音無君は私に背を向け走り出す。

そのまま帰ってくれと嬉しいんだけど・・・。

私の願いは叶わず、彼は振り返るとまた一発撃ち込んでくる。

私はそれも叩き落とした。

それを見た彼は食堂へと向かう階段を転がるように駆け上がる。

私はゆっくりと彼を追い、階段を上がっていく。

激しい音楽と、生徒の歓声が響いてくる。

私が階段を上がり終わると、前方から何かが回転しながら飛んできた。

私はそれも弾くが、

「・・・お、おもい」

音無君には聞こえていなかったが思わず声が出た。

手がじんじんする。

私が弾いたのはハルバードだった。

「ちっ、
外したか」

声の方を見ると、そこには、日に焼けた浅黒い肌。
所々跳ねている短い髪。

投擲したポーズのまま、こちらを睨む男の人がいた。

名前は確か、野田君だったかな？

・・・というかすごいよね野田君。

普通ハルバードって人には持てないぐらいの重さなんだけど・・・。

だけど、野田君がここに来たということは、

「待たせたなあ!!」

「もしかして一番弱えトコ狙われたんじゃないかっ!？」

「まだ“handsonic”だけだよ!」

「後退しながら加重攻撃だっ!」

SSSの人達が来てしまった。

ま、まずい。“でいすーしゅん”使わないとっ!

「Guard-Skill distortion」

私が呟くと、一瞬幾何学模様が私の身体を覆う。

その瞬間、無数の弾丸が私を襲う。

弾丸は“でいすとーしょん”により軌道が反れ明後日の方向へと飛んでいく。

・・・凄く怖い。

“でいすとーしょん”を使ってるから弾丸はもう私には当たらないけど、やっぱり怖い。

目を瞑りそうになる。

それでも私は歩き出そうと、
「っ!?!」

何かが飛んできた。

思わず私は“はんどそにつく”で弾いてしまった。

まずいつ!!

「今だっ!!」

く。
SSSの誰かの声と同時に、銃とは比べ物にならない轟音が響

私は音でそれを判断する。

これは・・・バズーカッ！！

砲弾は私のすぐ脇の石畳に突き刺さり爆発した。

爆風と弾けた石畳のつぶてが私を襲う。

顔の前で両腕を交差して目を閉じる。

“でいすとりしょん”を使っているおかげで、大抵は弾けるが、
一部は“でいすとりしょん”をすり抜け、私の身体に掠っていく。

ブレザーが破け、皮膚を切り裂く。
ブレザーに血が滲む。

痛い。

けど、これぐらいならまだ我慢出来る。

そう思ったらまた弾丸の嵐。

今の私はこの場から動けない。

ライブはすでに佳境。

唐突に食堂の窓が全て開け放たれ、白い何かが吹き出てくる。

今回は、止められなかったようだ。

白い何かは月の光を受け、キラキラと輝く。

それはまるで雪のよう。

弾丸の嵐は止んだ。

SSSの人は白いそれを掴んで逃げていく。

白いそれは生徒達の食券。

私の所にまで飛んでくる。

・・・私は、思わず俯いた。

身体も、制服もぼろぼろになった。

また、私は駄目だった。

・・・心もぼろぼろになりそうだよ。

私は涙を堪えて、ぼつんとその場に佇む。

視線を感じて、俯いた顔をあげると、一人だけ・・・。

走りながら、私を見ていた。

音無君だ・・・。

彼になら、届くだろうか・・・。

いや、まだ・・・。
私の思いはまだ、

「届かない」

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第3話 私の思い、あなたたちには届かない。(後書き)

えーと、原作第1話が終わった訳ですが……。

誰だコイツ？ と思っただ方……。

正直俺も思っただっ！！

ほんとに誰だっただけになってますが、

この小説の奏ちゃんはこんな感じです。

こんな感じの話も入れていきます。

ここまで読んでくれた人、ありがとうございます！！

今度は原作第2話を始めていきます。

始まりはギャグパートから！

では、これにてー！！

第4話 新しいの作ってみたんだけど……どうかな？（前書き）

とうとうやっちゃったっ！！！！

設定ガン無視の新たな設定！！

この子に使って欲しかったんですっ！！

後悔はしていない！

反省はします。

ごめん！ 許して！

では、四話始まり！！

第4話 新しいの作ってみたんだけど……どうかな？

女子寮

女子寮のとある一室。

真っ暗な部屋に、静かに音をたてるパソコンの明かりが点く。

パソコンの前には一人の少女。

ピンクのパジャマは、彼女には大きすぎるのか、指先が覗く程度に折られ、下は何重にも折られ素足がちょこんと顔を出している。

頭には先に白いボンボンのついたナイトキャップがのっている。

彼女の瞳にはパソコンの明かりが映し出されていた。

少女の名は、立華 奏。

“天使”や“生徒かいちよー”の肩書きを持つ少女だった。

「・・・起動遅いなあ」

あ、ども。立華 奏です。

今日は学校がお休みなので、パソコンで何かしようと思っていた
ます。

お部屋が真っ暗なのは仕様です。
お気になさらずにー。

私はようやく起動したパソコンを目の前に、ずれたナイトキャ
ップを元に戻す。

本当はお着替えしようと思ったけど、よく考えたら私服がなかったなのでパジャマのまま。

・・・でも、なんでこんなに大きいんだろ？

それに私、パジャマ買ってなかった気がしたんだけど。

まあ、いいよね。

通常画面になったパソコン。

壁紙は剣が無数に刺さった丘なの。

カッコいいよね？ これ。

私のパソコンはインターネットに繋がってないのでやることは限られてくる。

ゲームするのもいいけど・・・。

私はそう思いながらも、通常画面の真ん中にある、“A n g e

l p l a y e r ” というプログラムを起動させた。

プログラムが展開させると、左上の方に英語の羅列。

そしてその下に表が出てくる。

その表に書かれているのは、今まで私がこのプログラムで作った能力だ。

G u a r d - S k i l l

“ d i s t o r t i o n ”

G u a r d - S k i l l

“ h a n d s o n i c ”

G u a r d - S k i l l

“ d e l a y ”

G u a r d - S k i l l

“ h a r m o n i c s ”

G u a r d - S k i l l

“ h o w l i n g ”

この五つの “ が ” どすきる
が今の私が持つて^{すべて}いる能力。

なんだけど・・・。

最近のあの人達どんどん過激になってきてるし・・・。

やっぱり新しいの考えないと対処出来なくなっちゃうかも。

・・・どうしょ？

私はパソコンの前から立って、脇にある本棚から一冊の本を取り出す。

ちなみに、本棚には漫画しか入ってません。

というか買ってもいないのに漫画がどんどん増えるの。

多分ゆりっぺさんの仕業です。

あの人たまに私の部屋に侵入してくるみたいだし・・・。

戦闘のときにここにある漫画の技とか使ってくるんだもん。

きつと読み終わった漫画をここに置いていくんだ。

・・・面白いからいいけどさ。

私^{まんが}が取り出した本は、念じればなんでも出来る狩人のやつ。

最新刊です。

おじいさん強いよね。相手もつと強いけど・・・。

私も正拳突きやれば、後ろから何か出てくるかな？

・・・実現は不可能だよね。

・・・現実逃避とか言わないで。

というか、この漫画で私が実現出来そうなのって、“電気”ぐらいだよね・・・。

作ってみようかな？

私はパソコンの横にある“Angel Playerまにゅある”を手に取った。

“まにゅある”をばらばらと目を通す。

“がーどすぎる”のページを見てみるけど、これを再現するこ

とは出来ないみたい。

んー、無理か。

“がーどすぎる”のページは全て見た。
が、最後の部分だけ
数ページ巻き込んで折れていた。

あれ？　なんだろ・・・。

私はそれを直して、ページをめくった。

書かれていたのは、

“あたつくすぎる”のつ・か・い・か・た

思わず“まにゅある”を燃えるゴミに出したくなったの。

そこには、自衛目的ではないプログラムの作り方が書かれていた。

「作り方は“がーどすぎる”とあんまり変わらないみたい」

少し方式が違っただけで、さほど難しくないみたい・・・。

「作ってみよっ」と

私は次のページに載っているはずの例を見る。

“あたつくすぎる とれーす”

・・・・・・・・あれ？

説明・・・「なんでさ」が口癖になつてゐる正義の味方の技法が使えます。

頭の中で想像すれば、だいたい創造出来んよ？（笑）

おすすめは、“弓”と“ねじれた剣”。

オプションとして“えでいしょん・すきる　ぶろーくん・ふあんたずむ”があります。

これであなたもLet's
“幻想破壊”!!!（笑）

いいのかな・・・これ。

一応作る。

これがあれば、少しは楽になるかもしれないしね。

でも、この説明なんかヤダな。（笑）とかいらないよ・・・。

「・・・出来た」

30分で完成出来たの。

30分で正義の味方のかんせーい。

……ごめんなさい。

と、とりあえず一回使ってみようかな？

えーと、

「Attack-Skill trace」

ぐ。

あ、お腹減った。

思わず、“あれ”を想像しちゃったよ。

創造したものが、私の手のひらに出来る。

“れんげ”

・・・麻婆豆腐作る。

あむ。あむあむ。

・・・ごっくん。

はふはふ、もぐ。

もぐ。もぐもぐ。

・・・ごっくん。

あむあむあむ。

はふ。じっくん。

「・・・ごちそうさまでした」

私はもう一度パソコンの前に座る。

“あたつくすきる”の作り方は例のおかげで理解出来た。

私はキーボードを叩いていく。

パソコンの画面は英語の羅列を次々に表示しては消えていく。

その所々をコピーしては違う場所に張り付ける。

・・・あ、間違えた。
デリート、デリート。

三時間後・・・。

で、できた。

やっぱり、一から作るのは大変だね。

ちょっと目が痛くなっちゃった。

疲れちゃったなー。

私はパソコンの電源を落とした。

カーテンを開けて外を見ればもう夕陽が沈む途中だった。

結構時間掛かったな・・・。

シャワー浴びてこようと。

「練習は後でしようかな・・・」

今回、私が作った能力。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

A
t
t
a
c
k
-
S
k
i
l
l

s
w
i
f
t

A
t
t
a
c
k
-
S
k
i
l
l

t
r
a
c
e

第4話 新しいの作ってみたんだけど……どうかな？（後書き）

どうも、O k a レモンです。

四話。作っちゃいました……。

読んでくれてる人。

呆れないでね？

もとからこんな感じだからね？

このままこの小説の奏ちゃんは爆走していきます。

ついでにゆりっぺさんもチート化するんで……。

え？ 聞いてない？

ごめんさい……。

まあ、続きも書いてみるんで、ドラ○もんのように“暖かい目”で見守ってください。

次なんです、結構原作とは違うことになります。

多分……。

では、これにて。

ちなみに、“Swift”は、疾風迅雷の意でつけました。

もしかしたら間違ってるかも？

自分、英語苦手なもので・・・。

第5話 学園の秘境探索。いつたい何があるんだろ・・・。(前書き)

五話目っ!!

ちっと書ききれなかったんで、先に投稿っ!!

頑張りますっ!

では、始まり!

第5話 学園の秘境探索。いつたい何があるんだろ・・・。

時間は30分ぐらいまで遡るの・・・。

体育館

なんだかんだで“あたつくすきる”を作ってから3日後。

生徒会のお仕事で、なかなか時間が作れなくて練習出来なかったの。

でも、今日はお仕事もなくて時間が出来た。

なので私は夕暮れに一人体育館に向いた。

この時間なら部活もやってないから誰もいないの。

練習するには持っていないのはず……。

だったの。

「……………あれ？」

私が体育館の鍵を開けようとしたら、すでに鍵が開いていた。

鍵は私が持っているから開いているはずがないのに……。

……まあ、いいや。

私は鍵をスカートのポケットにしまい直し扉を開けた。

中に入ると、なぜか台車に乗った大量の椅子が外に出ていた。

椅子はすべて壇上の下の用具入れの中に入っているはずなんだけど……。

……なんでかな？

用具入れの扉はすべて閉まっているのに、椅子だけが出ている。

ミステリーなの……。

私はちょっと気になり、用具入れを調べ始めた。

一番右から順に調べてこ……。

一番右の扉を私は開く。

中には同じ台車に乗った大量の椅子が鎮座していた。

・・・異常なしと。

二番目の扉を開く。

「・・・・・・・・ちゅう?」

・・・・・・・・ネズミさん発見。

せんせーに報告してもいいんだけど・・・。

報告したら、多分殺されちゃうよね・・・。

「ちゅう?」

・・・さて、次いこ次。

・・・ごめんなさい。

だってこの音、多分“あれ”だよ？

台所にたまに出てくる黒いのだよ？

わ、私苦手なの・・・。

私は三番目の扉を開けずに四番目に向かう。

四番目の扉は、壇上のちょうど真下だ。

私はそれをあけ、
あけ・・・・・・・・。

「お、おもい」

こ、この扉だけなんか異様に重い・・・っ！

開けてはいるけど、数cmずつしか開きません。

と、扉ごときに負ける“生徒かいちよー”じゃないもん！

ふぁいとー。いっぱいっ！

ガコン、という音で自分が扉を開けきつたのを知った。

人ってなんでもやれば出来るね。

・・・私、人間じゃなかったよ。

気を取り直して中を見ると、そこには何もなかった。

「ここだったんだ・・・」

私は奥を覗いて、椅子の入るスペースを確認する。

すると、奥の床の一部が跳ね上がっていることに気付いた。

・・・なんだろう？

私は好奇心にかられ、奥に入ってみることにした。

跳ね上がった床の中を覗いてみると、どうやら地下に繋がっているらしい。

梯子で下に降りられるようになっている。

・・・冒険の予感がするの。

私は梯子に掴まり、下へと降りていく。

いったい何があるのかな？

G u i l d 連絡通路 B 1

「
」？
「

“ぎるど”ってなんだろう？

私は梯子から手を放して通路に出た。

通路は一本道でかなり広い。

・・・こんな所、前からあつたのかな？

通路の先は真っ暗で何も見えない。

暗いのは怖いけど、ここがいたいなんなのか、少しは調べない。

私は奥を見るために、一步踏み出した。

瞬間、何かにつまずいた。

どてっ。
転ぶ音。

「ぶっ」
顔をぶつけた。

ドッ
ンッ！――！

「ぐほおおあああっ――！！」
「？？？？」

お、お鼻痛い・・・。

というか最後のなに？

今も頭の上から“ぶんぶん”風を切る音がするんだけど・・・。

私は赤くなってると思うお鼻を手でさすりながら、顔だけを上に向ける。

“はんまー”が左右に揺れていた。

・・・“ごしごし”と目を擦る。

・・・巨大な“はんまー”が揺れていた。

・・・もしかして対“天使”（わたし）用のトラップ？

ここってSSSの人達のアジトか何かかな？

とりあえず、私は未だに揺れている“はんまー”の下から出るために匍匐前進する。

えっほ、えっほ。

“はんまー”の下から出た私は何に足が引つ掛かったのかを見る。

・・・ハルバードだった。

どこかに野田君がいるのかな？

そう言えば、さっきの轟音は“はんまー”が壁にぶつかったからみたいで、壁が凹んで砂粒が舞っている。

当たってたら私、ペしゃんこだったかも・・・。

野田君に感謝なの。

私は“はんまー”が止まるのを待つて、凹んだ壁を覗いてみた。

……手足がひしゃげた野田君がめり込んでいた。

……私のせい？

が、よく見ると二回ぶつかった痕が見られる。

……そう言えば、さっき人の声みたいなのしてたよね。

一回目はどうして罫にかかったのか解らないけど、二回目は私

のせいだよね・・・。

「・・・ごめんね、野田君」

多分聞こえてないけど、私は漬れた野田君に頭を下げ、通路の奥を見た。

野田君がここにいることから、ここがSSSに関係しているのは解った。

・・・とりあえず、先に行って何かあるのかだけは把握しておこうかな？

ただSSSの人がいる可能性があるよね。

野田君がいるんだし・・・。

まあ、何かあったら逃げればいいかな・・・。

私は歩き出す。

この奥に何があるかを、しるために・・・。

「でも、トラップ怖いなあ・・・」

t o b e c o n t i n u e d

第5話 学園の秘境探索。 いったい何があるんだろ……。 （後書き）

B1 って中途半端になっちまってすいませんっ!!

読んでくれる人には申し訳ないっす！

なるべく今日中に次の話を投稿するつもりです。

これで二回も野田が出てきましたが、別に好きだからってわけじゃないっす。

ただそこに野田がいただけ……。

早くゆりっぺ出したいっす!!

次かその次に出すつもりです。

では、これにて。

第6話　なんか私謝ってばかり・・・・・・・・・・。なんでこんなに深くまで掘った

間違っ て消しちまつ たぜ・・・。

んで、もっかい投稿。
つ、つかれた。

とりあえず今回が一番長いです。

そしてまた新たな設定をでっち上げっ！！

まだまだ爆走していくぜっ！

では、始まり！

第6話　なんか私謝ってばかり・・・・・・・・・・。なんでこんなに深くまで掘った

G u i l d 連絡通路　B 2

降りたところは、また一本道。

私はトラップが無いかどうかを確認しながらゆっくりと進んでいく。

奥まで行くと行き止まり・・・・ではなく、丁字路になっていた。

・・・これじゃどう行けばいいか判んないよ。

右も、左も、奥は暗くて解らない。

片方は行き止まりかもしれない。
トラップがあるかもしれない。

右か、左か・・・。

どうしょ・・・。

判断できない私は、とりあえず運に頼ってみることにした。

「Guard-Skill handsonic」

私の右の袖口から白刃が形成される。

本来“はんどそにつく”はそのまま戦うことを目的としている。
なので用途は剣と同じように近距離戦闘のみで遠距離で戦うことが
出来ない。

私の“がーどすきる”には“はうりんぐ”以外に遠距離戦闘が
出来ない。

“あたつくすきる”を作成したおかげで今は遠距離戦闘も出
るだろうが、今までは苦勞することもあった。

だから私は、最も使用する頻度の高い“はんどそにつく”に
“遠距離型”を付加した。

mode - remove

私が呟くと、白刃に0と1の羅列が高速で流れ出す。

この状態、“モード・リむーぶ”は袖口から形成された白刃をそのまま“射出”、または“取り外す”ことが可能になる。

“射出”することで戦うなら、大きく腕を振って射出することで時速150kmまでの速度を出すことができる。

射出すると数十秒後に白刃は自然消滅する。

だが、“取り外す”ならば自然消滅することはなく、自分の意思で消すことが出来る。

ただし、取り外すと“はんどそにつく”を解除しないかぎり、ほかの“がーどすぎる”を使うことが出来ない。

“射出”ならば使い勝手もいいけど、今回は“取り外す”。

私は、左手で右の袖口から伸びる白刃を取り外す。

そして地面に突き刺さらないように切っ先をゆっくりと下ろす。

「……………どっちな？」

地面に垂直に立つ白刃から手を放す。

白刃は音をたてながら“右”に倒れた。

「……………右に行こつと」

私は運に任せるために“ほとんどそにつく”を取り外したのだつた。

実際に学園の近くにある森で迷子になったときは、毎回これを使っている。

結構大丈夫なんだよ？

・・・適当とか言わないでね？

私は両手で倒れた白刃を抱え、先に進んでいく。

その先も左右に道が別れていたが、私はこの方法で進んでいった。

今のところトラップはないの。

私はこの方法でどんどん進む。

ただ、

・・・もう出口わかんない。

G u i l d 連 絡 通 路 B 3

私はいつの間にか一階下に降りたみたい・・・。

今から出口を探しても、また迷う可能性の方が大きいので、先に進むことにした。

B 3 は B 1 と同じように一本道だけのようだ。

ただ、B 1 より天井が低く、道幅が狭い。

・・・どこまで進めばいいのかな？

未だ先の見えないこの冒険に、少し疲れてきた私がいる。

私は抱えていた“はんどそにつく”を解除して、一歩踏み出した。

かちつ。

「？」

踏み出した足がわずかに沈む。

それに何かのスイッチ音がした。

私は足元を見る。

床が数cm沈んでいた。

ど、どどどどどどどどど！

な、なんか背後から何かが迫ってくる音がするよ？

しかもどんどん大きくなってくる。

私は背中に冷たい汗が流れるのを感じながら、ゆっくり後ろを振り向いた。

刹那、轟音をたてて天井の一部が崩れた。

そして、この階に突如現れる、この通路を閉じるほどの巨大な鉄球。

て、鉄球っ!?

しかも、ゴロゴロとこちらに向かって転がってくる。

あ、あんなのに潰されちゃったら、し、死んじゃう………
っ。

死んじゃうほど痛い………っ!

「が、Guard-Skill delay……っ」

私は涙目になりながら、0と1を背後に散らしながら残像が残るほどのスピードで駆ける。

数百mほど駆けると前方の右側に通路が続いているようで、私は急ぎ、横っ跳びで飛び込んだ。

数秒後に鉄球が転がってきて、奥の壁にぶつかった。

「ぎゃはあああああ！」

壁にぶつかった瞬間に轟音とともに悲鳴が聞こえた。

・・・もしかして、誰かいた？

確認したいが鉄球が壁にぶつかって天井が崩れてしまったので、道が埋まってしまい、もう戻ることも出来ない。

「・・・ごめんね、見知らぬ誰か」

多分SSSの人だと思うけど、声だけじゃさすがに判らないの・

・
・
。

もう完全に戻れない。

先に進むしかないの。

私はさらに奥深くへと進んでいく。

G u i l d 連絡通路
B 6

B 4とB 5には何もトラップがなくて一安心。

B 6にたどり着くと、先には鈍く赤い光を放つ部屋があった。

・・・あきらかにトラップみたいだけど、行かないと先に進めないしなあ。

トラップと判っていて、自ら入らなくてはいけないことにため息をつきながら部屋へと入った。

部屋の床には水のようなものがまかれているのか、一歩進むたびに足元からぴちゃぴちゃと音がする。

未だ中は赤く光っていて部屋の全貌が判らない。

ただ、判るのは・・・。

血の臭い・・・。。

五歩進んだときに入口が自動で閉まる。

ああ、やっぱりトラップですか……………。

一瞬部屋が真っ暗になり、すぐさま明かりがついた。

その光は通常の光で部屋の全貌が見えた。

……………目の前に上半身が半壊して倒れている松下君がいた。

うわー、これは酷い。

私じゃなかったら発狂してると思うの……………。

私が水だと思っていたのは松下君の血だった。

入口は閉じられ、出口は松下君を越えた先にある。

入口は完全に閉じていて生半可なことでは開かないだろう。出口も多分同じ。

だが、トラップが閉じ込めるだけなはずがない。

それを私に知らせるかのように“ピーッ！”と警告音が鳴り響く。

すると、松下君の後ろの方から赤いレーザーが壁から壁へ伸びる。

・・・松下君はこれに当たってこうなったんだ。

。　　ということは、私もこれに当たったらこんな感じに……………。

．．．．．絶対に当たるわけにはいかないのっ！

レーザーは三本。私の足元を狙って向かってくる。

しゃがむと松下君の血が付着してしまうので、選択肢は飛び越えるの一本。

．．．．．つてあれ？

1、レーザーは松下君の後ろから来る。

2、レーザーは私の足元を狙ってくる。

3、松下君は死んでいるから動けない。

結果．．．．．。

う、うわー、松下君が目の前でミンチになってくー。

私はミンチになっていく松下君を見ながらその場でジャンプする。

さすがにグロテスク過ぎるよ……。

と、思っていたら第二者が来た。今度は五本。

私はやはり飛び越えるが、松下君はどんどんミンチになっていく。

とうとうか、早くここから出ないとマズい……。血の臭いが充満してきて空気を削っていく。

やるしかない……。

どうせ出口は閉じているのだから、突撃しながら斬って吹き飛ばす……っ。

「Guard-Skill double-handsonic」

両腕の袖口から白刃が形成される。

するとレーザーもそれに反応するように第三者が現れる。

だぶるえっくす
XX型。

しかも、さっきより速い。

私は両腕を顔の前で交差し、そのまま跳ぶ。

そして、跳んだ状態のまま、呟く。

「Guard-Skill delay」

私は残像を残しながら松下君だったものを飛び越え、出口に駆ける。

私は駆けながら両腕を斜め左右に振り下ろす。

“はんどそにつく”で出口の扉を斬り裂き、突き破って外に出た。

トラップは、私が部屋から出たからなのか、停止した。

私は“でいいい”と“はんどそにつく”を解除して部屋を覗く。

「ま、まつしたくーん？」

呼んでも返事がないのはわかっているが、“生徒かいちよー”としては生徒がどうなっているかを見ておく必要がある。

・・・・・・・・松下君は、もう原型がなかった。

まさに人間ひき肉・・・。

・・・・・・・・ごめんなさいなの

っ！！！！

G u i l d 連絡通路 B 8

罪悪感がいつぱいで、B7を無我夢中で駆け抜けたせいで何が
あったか覚えていない。

今度肉うどんでもおごろう・・・。

B 8 は一本の通路の先に、あきらかに違う作りの部屋があり、その先に続いている。

そして、その部屋には何かがあった。

何かな・・・あれ？

私は部屋に入らないように部屋の中を見る。

赤いバンダナに金髪。近くには手錠が落ちていて・・・・・・・・
それらはすべて血の池に浸かっている。

．．．．．TK君が潰れていた。

．．．．．縦に。

グロテスクだよ、これも．．．。

だけどTK君が縦に潰れているということは、ここは天井が落ちてくるトラップだということが判る。

なら、

「Guard-Skill handsonic」

右袖から白刃を形成する。

私は二歩下がると、一気に部屋へと駆け抜ける。

部屋に入った瞬間猛スピードで天井が落ちてきた。

私は“はんどそにつく”を部屋の真ん中に突き立てる。

「mode-remove」

私は“はんどそにつく”を“取り外して”部屋を走り抜ける。

天井は突き刺さった白刃のせいで、私が走り抜けるときに途中で止まった。

それでも私が部屋から出た後もどんどん釘のように白刃が打たれ、その隙間はもうほとんどなくなってしまっている。

「・・・・・・・・ふう」

思わず息をはく。結構危ない賭けだったんだけどなんとかあったね。

「・・・・・・・・お」

ん？ 何かうめき声のようなのが聞こえた。

私は身体を伏せて部屋を覗き込む。そして、TK君の身体がわずかに動いていることに気づく。

「Oh Little angel……………」

TK君が私のことに気付いたようだ。

「へ、Help me……………」

助けを求めているの……。

でも、まずそこまで行くことすら出来ない。

それにこのまま“はんどそにつく”を置いていくと“がーどすきる”が使えなくなってしまう。

もちろん“あたつくすきる”も……………。

「What?」
「・・・TK君」

「……ごめんなさい。」
“解除”

Second- Impact !!!!!!!!!!!!!!!

ぶちっ。

・
・
・
・
・
・
尊い犠牲になったの。

うううううう、泣きなくなってくる……。

G u i l d 連 絡 通 路 B 1 3

B 9 ～ 1 2 までは、すでにトラップが発動してあってそのまま放置してあった。

階段を降りて B 1 3 に来ると部屋に水が溜まっていた。

それに、誰かが浮いている。

黒い髪の男の人で、長ドスが近くに浮いているから、名前は確か・
・・。

“ 卷 ” がついていた気がする。

卷、
・ ・ ・ 卷。

「
・ ・ ・ ・ 卷^{まきが}貝君？」

多分こんな感じだよね。

ただの溺死なので、浮いているだけで大丈夫だろう。

見たところ通路はないので、多分水の下だろう。

「Guard-Skill distortion」

呟くと、私の身体を幾何学模様の膜が覆う。

これで濡れることはなくなったの。

私は水の中にストンと入る。

水は膜に弾かれ、私は濡れない。

膜のなかには酸素もあるので息を止める必要もない。

通路を見つけた私は水の中を歩いていく。

いつまで続くんだろう？

G u i l d 連絡通路 B 1 5

水の中から出てきた私が見たのは、まるで洞窟のような場所だった。

それに川も流れていて、下に向かう滝まである。

・・・もうこれ通路じゃないよ。

私は滝の方を見ようと視線を向けたら、

・・・犬のぬいぐるみが飛んでいた。

いや、違う。誰かが犬のぬいぐるみを天高く持ち上げながら、川を逆に泳いでいる。

・・・え？ だれ？

川を泳ぎきった誰かはぬいぐるみを持ち上げたまま、向こう岸にあがった。

SSSのセーラー服を身にまとい、首には襟巻きをしている。そして彼女の長い黒髪は、濡れて水が滴っていた。

椎名さんだ・・・。

椎名さんも何かトラップに引っ掛かったのかな？

椎名さんを見ながら考えていると、彼女は私の気配に気付いたのか、すぐさま振り向いた。

「むっ！ 天使かつ!!」

彼女はそういうと犬のぬいぐるみを頭に乗っけると、どこからか短刀を取り出す。

しゅ、しゅーるだ。

うーん、でも………戦闘になるんだ。

椎名さんはゆりっぺさんの次ぐらいに強いから、出来れば戦いたくないんだけど……。

私は“はんどそにつく”を使おうとしたが、

にゃーん。にゃーん、にゃーん。

「こ、今度は何だあああああ!？」

猫っぽい声がしたと思ったら、椎名さんが叫びながら川の先に

顔を向けた。

私も彼女と同じように視線を向けると、川の先から何かが流れてきた。

・・・だんぼーる？

いや、段ボールの中に何か入っている。

にゃーん。にゃーん。

猫だ。猫のぬいぐるみだ。

・・・・・・なんで？

そう思いながら段ボール（in猫のぬいぐるみ）が流れていくのを見てみると、向こう岸から何かが聞こえてきた。

[illegible]

椎名さんの目が血走っていて、段ボール（いぬいぐるみ）を穴が開きそうなくらい凝視していた。

・
・
・
正直怖いのだ。

そして段ボール（いぬいぐるみ）が滝に落ちそうになったとき、彼女が動いた。

「くそおおおおお！！」

私の“でいい”レベルのスピードでためらいなく川に飛び込むと、頭に乗つけたぬいぐるみを濡らさないまま超スピードで泳ぐ

と、落ちそうになった段ボールを空中に放り投げ、中に入っていた猫のぬいぐるみを両手でキャッチした。

ちなみに、椎名さんは今空中にいる。

「ぬいぐるみだと判っているのにいいいいいいいい！！！」

そう言って滝壺に落ちていく。

「浅はかなりいいいいいいいいいい！！！！！」

これが彼女の最期の言葉だった……。

ぬいぐるみのために滝に落ちるとは……。

椎名さん、逆にすごい……。

今度椎名さんと戦うときはぬいぐるみ持ってこ……。

でも、椎名さんまでいるってことは、間違いなくゆりっぺさんがいるよね。

しかも、絶対戦闘になるよ・・・。

またあの人と戦うんだあゝ。

「・・・・・・・・やだなあ」

t o b e c o n t i n u e d

第6話　なんか私謝ってばかり・・・・・・・・。なんでこんなに深くまで掘った

ケータイで投稿してると手がくちゃくちゃ痛いっす。

皆なんであんなにページ数稼げるんだろ？

やっぱ“会話”かつ！？

うちの奏ちゃんは今までまともに会話したのって音無だけだし。

今回でようやく二人目。

なぜかTKだけど……。。

ちなみに松下五段がミンチをしちまいましたが嫌いだからじゃねえですよ？

てなわけで、第6話でしたっ！！

そういえば皆さんは、キャラの中で誰が好きですか？

俺は女キャラならもちろん奏っ。

男キャラなら日向が一番好きですっ！

原作4話で日向が消えていたらもしかしたらこの小説は書いてないかもしれないっ！

そういう意味でユイにゃんはぐっじょぶっ！！

次回はようやく奏vsゆりっぺを書けるっ！！

ちなみにチートになりますよ？

この小説を読んでくれていて、ゆりっぺが大好きな人はここで切ったほうがいいかもっ！！
奏ちゃんみたく誰だこりゃ？ってなるようにするつもりなんで！

ちよつと予告

「あなたに
「アンタに
」
」

「私は

」

「あたしは

」

「「殺せない」」

てな感じになるんじゃないかなあ！！

とりあえずバトルってことで。

次回は投稿が遅れるかも。

てか、後書きみてくれる人はいるのかな？

では、これにて。

第7話 この人ホントに人間？ あきらかに戦闘力がチートレベルだよ。（前書

書き終わって自分で読んでみた感想。

なんだこのカオス・・・。

予告通りゆりっぺがいろんな意味でチート。

ゆりっぺ好きはホントに読まないほうがいい。

そして様々な技の数々。

しかもバトルで一番長くなった。

それでもイイ人だけ読んでちょ。

では、七話始まり！

第7話 この人ホントに人間？ あきらかに戦闘力がチートレベルだよ。

G u i l d 連 絡 通 路 B 1 8

B 1 8 は今までで一番広い。まるで洞窟をそのまま通路として使用しているようだ。

私は目を細め、その奥を眺める。

その奥には、まるで立ち塞がるように一人の女の人が仁王立ちし腕を組んでいる。その後ろには銃を右手に周りをきよろきよろと見回している男の人がいた。

ゆりっぺさんと音無君だ・・・。

あちらはまだ私には気づいていない。今なら逃げることも出来るが、ゆりっぺさんが動くほどのものがここにはあるということになる。

それを見過ごすことは、出来ない。

「Guard-Skill distortion」

聞こえないように小さく私は呟く。それと同時に幾何学模様の膜が一瞬にして私を覆う。そしてすぐさま消えた。

これで私が“でいすーしょん”を使っているかは判らない。

「Guard-Skill handsonic」

右袖から白刃が伸びる。

これで戦闘の準備は出来た。

足が震える。これは武者震いではなく、恐怖によるものなのは私がよく判っている。

・・・うう、すごく怖い。

仁王立ちして私の方を睨むように見ているゆりっぺさんは、そこに立つただけで威圧感がある。

彼女は今は何も持っていないが、真っ白なベレー帽は頭の上に乘っかっている。あれは青い狸のポケットに繋がっているから要注意。

・・・地球破壊爆弾とか出されちゃったらシャレにならないもんね。さすがに出ないだろうけどさ・・・。

ただ、私と戦うときの“あれ”を持っていないから今日はまだ大丈夫かもしれない。

あれを持ったときのゆりっぺさんは、今の私と同等のレベルになっ
てしまっ

私が震える足を必死に止めようとしていると、あちらの会話が聞こえてきた。

「おい、ゆり。本当にそのままでもいいのか？　銃も何もなしで戦うなんて自殺行為なんじゃないのか？」

「あたしにはあたしの戦い方があるのよ。それに音無君も“あの子”に銃なんかほとんど効かないの判ってるでしょ？」

「そりゃそうだけどさ。何も無手で挑まなくてもいいだろ。徒手空拳なんかじゃ一瞬で殺されるんじゃないか？」

「別に徒手空拳で挑む気なんかまったくないわよ」

「はあ？」

「あたしにはあたしの“武器”がある」

「・・・まあ、いいけどさ」

「それに話してる場合でも無いわ。集中して。もう来るわよ、“あの子”」

「・・・おっ」

「・・・完璧に戦う気満々ですね、ゆりっぺさん。」

しょうがないや………行こう。

私は二人の前に現れるように歩いた。

ゆりっぺさんは私が視界に入った瞬間、目が鋭くなった。

………怖い。

「音無君、撃って」

彼女が冷静にそういうと、音無君は慌てて銃を構えて、引き金を引いた。

通路に響く轟音の発生源は、うなりをあげて私に向かってくる。

私はそれを無視して歩く。弾丸は“でいすとしょん”に軌道を曲げられ通路の天井に突き刺さった。

「んなつ!？」

「対応が早いわね。もう“distorsion”が発動してる」

・・・撃たれたくないので。

「どうすんだゆりっ！」

お願いだからどうもしないで・・・・・・・・。

私は右手を振り上げる。距離は2〜3m。

確実に、届く・・・っ！

「まずい・・・・・・・・来るわよ音無君っ！伏せてっ！」

「more・remove」

” 呟いた私は右腕を振り抜いた。瞬間白刃が音もたてずに“ 射出された。”

私が狙ったのは音無君。ゆりっぺさん戦うというのに他に相手がいたら対応しきれない。

「ぬおおおお！！！」

音無君は白刃に当たる寸前にしゃがんでかわした。むう、結構運動神経いいなあ。

「し、死ぬかと思った……………っ」

死ななくてもいいから、お願いだから邪魔しないでね……………。

「やるじゃない音無君。日向君は最初かわせなくて顔面に突き刺さってたわよ?」

「お、おえええ、想像しちまった……………」

……………なんだろ。戦ってるはずなのに、なんかあっち楽しそう……………。

……………虚しい。

音無君に当たらずに壁に刺さった白刃は0と1になり消えていく。

「音無君、もうあの子に銃は効かないわ。後ろでおとなしくしてて」
「で、でもどうすんだよ？　銃も効かないのにどうやって戦うんだっ？」

しーん

「……あれ？　突っ込みなし？　“音無君”と“おとなしく”をかけたんだけど」

「えええええ！？　この状況で何言ってるのっ！？　ギャグなんか言ってる場合かよ！？」

「緊張をほぐしてあげようと思ったのよ」

「そんなんでほぐれるかあああああ！！」

楽しそうだなあ、いいなあ………。

「でも、あの子は物欲しそうな顔してるわね」

「はあ！？　そんなわけっ・・・・・・・・あつたな」

・・・・・・・・はっ、顔に出てたっ。マズい、無表情無表情。

「あなたたち、いつまで遊んでるの？」

「物欲しそうにしてた子が言うセリフじゃないわね・・・」

ううう、私だって遊びたいんだもん・・・・・・・・。というか戦う気がないならもう帰っていいかな？

「まあ、いいわ。とりあえず戦いましょうか。“時間稼ぎ”になるけどね」

ゆりっぺさんはそういうとベレー帽から何かを取り出した。

あれは・・・・・・・・果物ナイフ？

「お、おい、ゆり！　そんなでどうするつもりだよっ！」

「どっつするって・・・・・・・・どうするのよっ！ー！」

ゆりっぺさんは右手で果物ナイフを持つと、右足を前に出して重心を落とす。そして振り上げるような独特の構えで果物ナイフを投擲した。

時速140kmは出ている果物ナイフは風を切りながら私に向かってくる。

でも、私には“でいすーしょん”がある。そんな果物ナイフが当たるわけがない。

私は果物ナイフを無視して歩き出す。ただ、あの構え……どこかで見たことあるような。

どうやら見たことあるものだったらしい。私の判断は間違っていた。

果物ナイフが“でいすーしょん”に触れた瞬間、トラックに突っ込まれたぐらいのものすごい衝撃で私は後方に吹っ飛んだ。

「がっ……」

口から空気が漏れる。

な、なにこれ……………？

私は地面をバウンドしながら転がってしまった。

い、痛い……………“でいすーしょん”使ってるのに……………なんで？

私は痛みと戦いながら、ふらふらと立ち上がる。今の私の頭は疑問でいっぱいだった。

「よっしゃああ！ “distorsion”の壁を越えたわよっ
っ！」

歪む視界でゆりっぺさんを見ると、投擲したポーズのまま不敵に笑っていた。

「あなた今、何したの？」

「アンタも知ってるはずよ。あたしがアンタの部屋に置いていったんだから」

「・・・“鉄甲作用”」

「せーかいつ!」

彼女は満面の笑みでこちらを見る。

「いったいどの“代行者”ですか、あなた・・・。」

「・・・再現出来るものなの？ あれ」

「漫画読みまくって、あとはひたすら努力のみっ！ この世界はやるうと思えば何でも出来るからね。アンタも判ってるでしょ？」

「・・・まあ、私も“とれーす”とか使えるようになったけどさ。でも普通の人間に出来るものなの？ あれ・・・。」

「て、“鉄甲作用”ってのが何なのかわかんねえけど、ゆりすげえ・
」

音無君は驚いた表情でゆりっぺさんを見ていた。

多分それがどんなものか知ったら、「お前有り得ねえよっ!」と
か言っよね。

「……もちろんすごいけどさ。」

ただ、私もやらねえしになりたくない。

使うときが来ました「……」。「あたつくすぎる」。

「……あなたが“神の代行者”なら……私は“正義の味
方”になるわ」

わ、私……なんかカッコイイかも。

「・・・・・・・・・・なんですって?」

ゆりっぺさんの表情が変わる。さすが私の部屋に漫画とか置いていくだけあるね、もう判ったのかも・・・。

いくよ? ゆりっぺさん・・・・・・・・。

「A t t a c k - S k i l l t r a c e
」

「アタック・スキルだと!? なんだよそれ!？」

「・・・新しく作った? “G u a r d - S k i l l” だけじゃなかったか・・・っ! でも“t r a c e”で正義の味方って・・・」

ふふ、驚いてる驚いてる。

私が想像するのは学校でもよく見かけるもの・・・。不良生徒に対しては強力な武器となる。

私の両手の指の間には白みがかった短めの四本の棒。

ゆりっぺさんの豹変ぶりを見て、音無君は驚いたように声をかける。

すると彼女は音無君に振り返ると、興奮したように私を指差す。

「どうしたもこうしたもないわ音無君っ！ あの子があたしが見たかったものを再現してくれたのよっ！」

「はあ、あの“とれーす”ってやつか？」

「そうよっ。あたしじゃどうやっても出来ない技術だったからね。
……あの子の部屋にゲーム置いてきてよかったわ」

むっ！？ やっぱりあのゲーム置いてったのゆりっぺさんだったんだっ。あれパソコンのだったからえっちなシーンとかあつて困ったんだよ……？

「はあ？ じゃあ何か？ お前が持ってたマンガやらゲームやらで“天使”が強くなっちゃったってことか？」

「あ、………確かに」

しーん

「馬鹿だろお前」

「しょ、しょうがないじゃないっ！　だって日向君は少年漫画とか持ってくるし、遊佐ちゃんや関根さんがゲームとか持ってくるんだからっ！　置く場所に困ってたのよ・・・」

・・・私の部屋は物置じゃないよ。

なんだろ・・・ちょっとムカついてきたよ？

私は両腕を胸の前で交差し、未だに私をほっという言い合いをしている二人に向かって左右に斬り払うように創造した物を投擲した。

くらえー！。

それにすぐ気付いたゆりっぺさんは、音無君を突き飛ばすと自分もかわすためにしゃがんだ。

がんっ、と創造した物が壁に突き刺さる。

「はぁ！？　なんだよ今のっ！」

音無君は壁に突き刺さった物を見て驚いたように言う。

その問いに私は自信満々で答えた。

「
チョーク」

「チョークが岩の壁を突き破るわけが
」

「
ダイヤモンド製」

「もうそれチョークじゃねええええええ！！」

そんなこと言われても・・・。

「だあもう！　うつさいわよ音無君っ！　戦闘中に一タツツコまなののっ！ー！」

「お前ら二人してツツコまするようなことをするからだろうがっ！」

「・・・・・・・・・・」

まあ、確かに・・・。

私とゆりっぺさんが沈黙していると、二人の後ろから誰かがやつきた。

それは作業服を着た男の人だった。

第一印象は・・・・・・・・うん。なんていうか・・・・・・・・。

ひげ。

ほんとに高校生ですか？ あの人……。

しかも、ものすごくやつかいなものを持ってきたよ……。

「チャーさんっ！」

音無君が男の人を呼ぶ。チャーさんは手を挙げて答えると、持っていたものをゆりっぺさんに渡す。

「ゆりっぺ、まだ爆薬は仕掛け終わってない。もう少し時間を稼いでくれ。預かっていた“もの”は仕上がっている」

「ありがと。これがあればまだ足止めは出来るわ」

ゆりっぺさんが受け取ったのは細長い袋に入ったもの。

「なんなんだ？ それ」

「これ？ これは……あたしの“相棒”かしら」

音無君の問いに答え、ゆりっぺさんは袋の紐を解く。

現れたのは、漆黒の鞘に納められた一本の日本刀だった。

彼女は共に袋の中に入っていた黒いベルトを腰に巻くと、日本刀をベルトに差した。

「音無君……これ、持ってた」

「お、おう」

ゆりっぺさんは私にとってはトレードマークのベレー帽を取ると、音無君に渡す。そして私を見た。

その眼は、鋭い。

「待たせたわね」

「・・・・・・・・別に」

彼女はゆつくりと歩いてくる。日本刀の柄に右手を乗せ、左手を鞘に添えている。

「にしても・・・・・・・・訊いてなかったけど、よくこの場所が判ったわね」

・・・・・・・・え？

「ここにあたしたちが使っていた銃器などの製作所があると判ったなんて・・・・・・・・さすがは“天使”と、言っただころかしら」

・・・・・・・・初めて知りました。

今ここで、冒険しにきたらここに来ちゃったって言うたら・・・・・・・・
・すぐに斬られるよね。

「まあ、ばれちゃったから今爆破の準備してるんだけどね」

「そう……なら爆破される前にあなたを叩き伏せて皆に反省文でも書いてもらっわ」

強がってみるけど……叩き伏せる自信なんてないよ。

「アンタにそれが出来るかしら？」

多分無理です。……はい。

「……」

私は口をつぐみ、状況を考える。

彼女が日本刀を持った時点で、“でいすーしょん”はもう意味をなさない。彼女は“でいすーしょん”すら斬り裂くのだ。

この状態の彼女と戦うには私には選択肢が極端に少なくなる。

まず“がーどすぎる”だが、“でいすーしょん”はもう意味がない。“はーもにくす”は増えるだけで意味がないし、“はうりんぐ”では構えた瞬間首が飛ぶだろう。“とれーす”もしかりだ。

やはり、“でいいい”と“はんどそにつく”か……………。

もう一つの“あたつくすぎる”の“すうえふと”は全く練習して
ないので心配だ。へたすれば“感電死”して自滅のパターンがある。
さすがにそれは避けたい。

だが、“がーどすぎる”が通用しないならば……………。

「さてと、始めましょうか」

ゆりっぺさんは目を閉じる。

そして、目を開けた彼女は、

「我が相棒“虎徹・新”（こてつ・あらた）と共に……………推

して参る」

刹那、私の視界から消える。

私は予測と感のみでその場にしゃがむ。

「Guard-Skill delay」

眩きと共に頭の上を刃が駆け、豪風が巻き起こる。

見上げると刀を振り斬った状態でこちらを鋭く睨むゆりっぺさんがいた。

やっぱり“このモード”の時のゆりっぺさんは滅茶苦茶怖い。躊躇いもなく私の首を刈りに来る。

私は“でいいい”を使ってゆりっぺさんとの間合いを出来るだけ開くが、それでも彼女は音も無く追ってくる。

彼女の歩行は人間のソレではない。気が付いたら目の前にいる。これでは“はんどそにつく”を発動する暇もない。

かといって“でいれい”だけでは戦闘にならない。逃げることも出来ないのだ。それでは結局時間稼ぎになってしまう。

と、考えが深すぎた。意識を浮上させると、納刀した状態で柄を握り、半身になっているゆりっぺさんが目の前にいた。

「戦闘中に考え事？ 余裕ね」

正直せいっぱいですっ！ ほわぁ！？

彼女の右手がぶれた瞬間に顔面に刃が飛翔する。私はそれを身体を反らせることで何とか回避する。

“でいれい”を使っただけでもかわすのが限界って……。どれだけ速いのさ……。

いつこうに彼女との間合いが開かない。空気を斬り裂き刃が何度も私を襲う。

うう・・・マズい。どんどん速くなる・・・。

ゆりっぺさんの剣速が上がる。私の頬や制服に刃が掠り、血が流れ出す。出血を止めるのも皮膚を再生させるのにも気を回す余裕がない。

どうする？ どうすれば・・・。。。。。。どうしょ。

もう、選択肢が一つしか、ない・・・。

彼女の煌めく刃が袈裟懸けに振り下ろされる。それはまるでスローモーションのように感じ、

「Attack-Skill Swift」

気が付けば、私は発動していた。

刹那、私の視界が弾ける。

バチリ、とスイッチが切り替わる感覚がした。

「な・・・っ」

ゆりっぺさんの驚きが伝わる。彼女の視界には私はいなかった。

振り下ろされた刃を“電速”でかわし、彼女の後ろに私は回り込んでいた。

実際私も驚いている。気が付いたら彼女の背中が見えていたのだ。

これが“すっえふと”の能力^{ちから}。

電気を身体の末梢神経に直に流し込み、“電速”並みの反射行動を可能にする・・・。

私が再現した、二つ目の能力。

今の私は髪の毛先がバチバチと蒼白い電気を放っている。身体からもバチバチと静電気がおこっている。

「くっ・・・」

ゆりっぺさんは気配で身体を反転させながら刃を振るう。

迫ってくる刃を見る前に私の身体が自動で動く。

刀の腹を人差し指と中指でノックするように跳ね上げる。

すると軌道が逸れた刃に身体を動かされた彼女の懐ががら空きになり、私は滑り込むように懐に入ると、固めた拳を腹部に叩き込んだ。

ジッ、ドンッ！

「ぎっ・・・！？」

ゆりっぺさんの身体がくの字に折れ、彼女の瞳が三重にぶれる。

私の拳から衝撃と共に電撃が流され、感電しているのが判る。
彼女の身体が硬直しているのを見て、私は反撃に移る。

鳩尾に掌底、腹部に拳打。曲がった身体に手の甲で顎を跳ね上げるように打つ。

三連撃。これを反射で起こした。

「うっ……」

彼女の身体は後方に飛ぶ。感電しているので受け身も取れずに地面を転がる。

それでも刀を手放さない。それは称賛に値する。

・・・私、すごいかも。

私は追撃もせず、頭の中でカッコイイ自分を褒めていた。

身体はバチバチといっているのに感電はしない。これがすごい。

「・・・・・・・・私、カッコいい」

お、思わず口にしちゃった……。聞こえてないみたいだけど。

「くっ……。よりもよって“そっち”を使ってくるなんて……」

ゆりっぺさんは地面に刀を突き刺すと、それを杖に立ち上がる。

「アンタの行動見ると使うなら“魔法”のほうで来ると思って“斬 剣”必死で覚えたのに……。“神速”じゃ対抗策考えてないわよ」

「・・・・・・・・“闇の魔法”作らなくてよかった。使ってたら今頃ザックリいつてたかも……」

「でも……それなら攻撃はなんであろうと当たれば届く。アンタの“電速”とあたしの“剣速”……どっちが速いかしら？」

彼女は口から血痰を吐き出すと、刀を鞘に納め、構えて不敵に微笑んだ。

……ってあれ？ これも怖がらないの？

「……………斬空閃・参牙」

ゆりっぺさんの右手がぶれる……………というか三つに見える。

すると三つの斬撃が地面を削りながら私に向かってくる。

……………この人ホントに人間なの？

私は自動で動く身体に任せてかわす。彼女の方を見ると、ってあれ？
いない……………。

「龍槌閃……………爆ッ」

声が聞こえたのは頭上。反射で一步下がると、彼女の刀が私のいたところを粉碎する。そのままゆりっぺさんは地面を抉るように刃を返し、石礫を私に飛ばす。

「土龍戟・・・礫」

「くっ・・・」

飛来する石を私は手で防ぐ。うう、手が痛い……。自動で防いでくれるけど生身のままだからすごく痛い。

「桜花・・・雷爆斬ッ」

刺突、振り下ろしからの跳ね上げ、袈裟懸け、逆袈裟斬りからの振り下ろし。合計六連撃。これらはすべて秒速の域。

私はそれを後退しながら、一撃ずつ回避しながら考える。

・・・だから有り得ないの。

戦闘から多分10分ぐらい経過しているが、私は彼女の攻撃をかわすか防ぐことしか出来ないでいる。

未だにゆりっぺさんの刀は止まらない。反撃しても刃で防がれる。

打撃と共に電流を流しているのに、それをものともせず刀を振り続ける。

い、いい加減疲れてきたの。

私はもともと体力がある方ではない。戦闘も長引かせると戦いにくくなる。

も、もう・・・やめない？

その願いが届いたのか、音無君がゆりっぺさんを止めるように叫ぶ。

「ゆり！ 爆薬の準備が出来たっ！ それと“大砲”ぶっ放すから合図したら離れろっ！」

・・・へ？ 大砲？

「む？ りょーかいっ！！」

私に笑顔を向けながら刀を振るうゆりっぺさん。その後ろにはいつから出てきたのか解らない真っ赤な砲台。

・・・マジですか。

「・・・あんなのズルい」

思わずゆりっぺさんに向かって言ってしまった。すると彼女は口角を吊り上げて、

「アンタの存在の方がズルいわよっ」

そついうと懷からナイフを取り出して、投擲してきた。しかも“鉄甲作用”付きで。

自動で動いてしまった身体はそのナイフを防いでしまい、衝撃で身体が後ろに飛ぶ。

「今だゆり！ 戻れっ！」

音無君の合図を聞くと同時にゆりっぺさんは私に背を向け駆けていく。

すると、砲身が私の方を向く。さすがにこのままじゃ砲弾を自動で受け止めて“爆死”なんてことになってしまうので“すっえふと”を解除する。

・・・・・・あ、ちょっとビリビリする。

私はそう思いながらも思考を巡らす。あの砲撃をどうすればいいのか・・・・・・。

まず回避は論外。爆破されるといってもその前に岩に埋もれてしま

つたら脱出すら出来ない。

すると、もう防ぐしか選択肢がない。だが“でいすーしょん”ではあんな砲弾防げない。間違いなく爆死だ。

“はんどそにつく”でも爆死。

“でいれい”、“はーもにくす”、“はうりんぐ”では意味がない。

……あれ？ もう私の爆死ルートしかない？

い、いや、他に何かあるはず……。

と、そこで唐突に“まにゅある”を思い出した。

……ほんにゃらほにゃほにゃほにゃ、ほんにゃらほにゃほにゃほにゃ。

・・・BGMが三分　キングだ。

“あたつくすきる”の“とれーす”の使い方参考

“がーどすきる”のくせにガードが少ない人向けにシールドの作り方を教えます。

名前はみんなも知ってる、“熾天覆う七つの円環”（ろー・あいあす）

これ使えればだいたい防げるんじゃない？　覚えてみれば。

使い方は簡単。“とれーす”を発動させた後「I am the bone of my sword」と言ったあとにシールドを想像すればおっけ。

ちなみにこれはキーみたいなものだからその言葉の意味は自分で考えてください。

これであなたも真つ赤な槍すら防御できるさっ！！

……これだっ！

「Attack-Skill trace」

「撃て っ！」

ゆりっぺさんの合図で轟音と共に砲弾が飛び出す。……っ
いでに砲台も爆発したが。

「I am the bone of my sword（私を護
るは花の楯）」

寸前まで迫った砲弾を前に、私は右手を前に出す。

想像するのは巨大な花弁を持つ花のような楯。

「熾天覆う七つの円環」（low-aias）」

私の創造した物は砲弾が触れた瞬間、爆音と爆風が巻き起こる。

私は楯に護られ、爆風には触れない。

爆風がはれると、私の楯が皆の目に映る。私の出したシールドは、

．．．．．巨大なひまわり。

ぶちっ！ と何かが切れる音がした。

「おいこらーっ！！ “熾天覆う七つの円環”（ロー・アイアス）
がひまわりのはずあるか っ！！！！ 馬鹿にしてんのか
っ！！！！！！」

ゆりっぺさんが目を吊り上げ、両腕を振り回しながら叫ぶ。

「どこが七つだ っ！！！！ どんだけ花卉あると思ってんの
よ っ！！！！！！」

「お、落ち着けゆり！」

音無君がゆりっぺさんを後ろから羽交い締めにするが、それでも彼女は私の方に向かおうとする。

「っておいこらどこ行く気だ!？」

音無君がゆりっぺさんを引きずって私から離れるように後退する。

「あの子に投影のなんたるかを叩き込んでやらないと気が済まないわっ!！」

「だあああ! そんなのあとにしろっ!! いまから爆破するんだよ!！」

「ええい放しなさい! はーなーしーなーさーい っ!!!！」

「チャーさん、爆破頼むっ!！」

「お、おう! 爆破ッ!！」

・・・はっ! 自分が出した花を見てたら話が進んじやった。

爆発音とともに通路が揺れて、天井から砂粒が降ってくる。

音無君は騒ぐゆりっぺさんを羽交い締めにしなからどこかに行ってしまった。チャーさんという人もいない。

・・・どうやって脱出しよう？

早く出ないと天井も崩れてくる。

・・・そういえば、ここって地下だし・・・上にそのまま突っ込んでいけば外に出られるんじゃない？

今の私は戦闘の疲れのせいで正しく頭が回っていなかった。

「Attack-Skill trace」

私が創造したのは真っ白な洋弓となんか螺旋状になっている剣っぱいもの。アクセントとして“天使の羽根”が付いている。

私オリジナルだ。

……たしかコレもキーが必要だったっけ？

「I am the bone of my sword（私の骨子は多分捻れ狂ってるんじゃないかな？）」

私は剣をつがえながらキーを言う。それを天井に向かって放った。

ズドンっ！

と、どんどん天井を突き破っていくのが判る。

穴は私が通れるほどの大きさなので、私は膝を曲げ、

「Attack-Skill Swift」

電気を流して身体能力を強化し、跳んだ。

私は天井をどんと昇っていく。昇った先からどンドン崩れていく。

……ようやく体育館に戻ってきた。そして私は上を見上げる。

「……あ」

……体育館の天井が消えていた。

多分剣に吹き飛ばされてしまったんだろう……。

「・・・・・・・・見なかったことにしよう」

やっぱりちょっとおかしくなってるのかもしれない。

もう朝日が昇り始めていた。

・・・・・・・・早く帰って寝よ。

・・・・・・・・その日、私は初めて遅刻した。

・・・・・・・・寝坊で。

三日後

私にゆりっぺさんから手紙が来た。

内容は投影がなんたるかについて、

・・・百枚ほど。

それを読んだ次の日も遅刻した・・・。

t o b e c o n t i n u e d

第7話 この人ホントに人間？ あきらかに戦闘力がチートレベルだよ。（後書

これ書くのに三日かった。

腕が痛いホント。

そして読んでくれた人、あんたスゲエよ。

神様ですか？

いろんな意味でチートになったゆりっぺ。

ゆりっぺは別にオタクなわけじゃないよ？

天使ちゃんと戦うために読んでりしてるだけだから。

皆原作見た？

ゆいにゃん消えちったよ……。全俺が泣いた。そしてキレた。

別に消す必要なかったよあれ。もつと日向と絡んで欲しかったよ。

でも最後の日向はマジかつこよかったっ！！

先に宣言しますか。

俺があそこまで書くことになったら、

ゆいには、ぜってえええ消さねええええ！！！！

日向といちゃいちゃさせたるわあああああ！！！！

次はちょっと外伝書きます。ただのアホ話になると思うけど。

原作三話にいきたいけど消える前に岩沢とどうにかして奏ちゃんを絡ませたいっ！！

でもどうすればいいかまだ解らないっ！！

ので、外伝です。

更新頑張るんでよろしく。あとオリジナルの方も更新できるときにするんで、出来れば読んでやってください。

では、これにて。

外伝 1 今日のゆりっぺさん 〱彼女は結構傍若無人〱（前書き）

外伝・・・今までで一番短いっす。

奏ちゃんはまったく出ません。

ちょっと後書きでちょっとした補足があります。

読んでくれる人は見てくれると助かります。

別におもしろくないですが、

外伝 1 はじまり！

外伝1 今日のゆりっぺさん ー彼女は結構傍若無人ー

対天使用対策本部

放課後になりかけの時間帯。

この校長室には、二人の男女がいた。

少女は右側にリボンの付いているカチューシャをつけている。

彼女は校長の座る席だった場所に座り、両足を組んで机の上に投げたしている。

腰のベルトには日本刀が差してある。

もう一人は短めの青い髪の少年で、ソファーに寝転んでマンガを読んで、たまに笑っている。

少女は“死んだ世界戦線”（SSS）のリーダーのゆり。

少年は戦線最古参の日向だ。

“Guild降下作戦”から一週間経ったけど、今これといっ
てすることがないわねー。

ん？ あー、あたしはゆり。

一応この“死んだ世界戦線”のリーダーをやってるわ。

戦線の中で一番強いのもあたし。まあこれは別に覚えなくていいわ。

・・・ん？ 別に面白いことじゃないわよ？ まあ、それでもいい
なら見てきなさい。

“ Guild 降下作戦 ” からする作戦が何も無い。

食券はまだあるから “ トルネード ” はする必要もない。

………すっごく暇だわ。

ソファーにいる日向君はマンガを読んでも、あたしが好きなジヤルじゃないし。

あたしが好きなのはバトルとか心理戦があるのだし。

ラブコメとかどうでもいいわ。

読んでも天使との戦いに役にたつことないだろうしねー。

．．．．．ひまー。

あたしはベルトに差した“相棒”の鐳を親指でパチンと弾く。

何か面白いことないかしら．．．。

あたしはソファーに寝っ転がっている日向君を見る。

．．．．．あ、そうだ。

ないなら作ればいいんだわっ！！

「日向君」

あたしが呼ぶと彼はマンガから目を離してあたしを見る。

「なんだあ？ ゆりっぺ」

アンタにはあたしのオモチャになってもらうわ・・・。

「今からちよつと行って、音無君に“俺はお前が好きなんだっ！！”
”って抱きつきながら言って来て”」

「ああ、お安いご　　　　つてはああああ！？　え、ちよ
はああ！？　何言ってるのアンタッ！？　何一つ意味が判らねえよ
！！」

日向君はソファーから転がり落ちるとあたしに詰め寄る。

・・・ち、ちよつとつば飛んでるわよっ！

「実際意味なんてないわ。あたしが暇なだけ」

「ちょー！！ アンタの暇つぶしのためだけに、また俺に“ホモ疑惑”浮上させる気がっ！？」

「いいじゃない別に……元からだし」

「おおい！ 俺はノーマルだぞ！？ ノーマル！ ノーマルだからっ……！」

何言ってるのよ、いつもアブノーマルなこと言ってるくせに

「言ってるええよ！？」

「心読むな！！」

というか、

「いいから行つてきなさいっ！ リーダー命令よっ！」

「しょ、職権濫用にもほどがある！？」

「いいから行けっ！ じゃないと新技の実験台にするわよ・・・」

あたしは高速で抜刀すると、日向君の首筋に刃を当てる。

日向君は目だけを動かしてそれを見ると汗をだらだらと流し始める。

「く、くそお！ 行けばいいんだろ行けばっ！！」

日向君は踵を返すと、扉の方へ向かう。

「昔みたいに屋上から落ちるぐらいの感覚で行けば大丈夫よ」

「何が大丈夫なのか判らねえけど、自分から屋上から落ちる方が何百倍もましだったの……。下手すりゃ男の友情が一瞬で崩壊するぞ……」

「そこは気合いと根性でカバー」

「出来ねえって!!」

振り返ってそういうと、彼は校長室から出ていった。

「……ん？ あれ？ これじゃあたしはその光景がわからないんじゃないんじや……」

ところが、どこかの“天然天使”に願いが通じたのか、

「よう、日向。どうした血相変えて？」

来たああああ！

どうやら校長室の前の廊下で日向君と音無君が会ったようだ。

あたしは扉に耳を付けて会話が聞こえるように息を殺す。

緊張の一瞬ね。“あの子”と戦うのとは違う緊張感だわ・・・。

「お、音無・・・・・・・・・・」

「ん？ どうした？」

いけ、いけ！ 言っのよ日向君。さあ！！

「音無いいいい！！！！」

「うおお！　なんだ日向！？」

抱きついたっぽいわ！

さあ！　さあ！！

「お、　俺はお前が好きなんだっ！！！」

「は？　・・・・・・・・・・はあああああああああ
あ！！？」

言ったああああ！

さあ、どうする？　どう返答する音無君！

「お、お前やつぱりホモだったのかあああああああああああああああ
あああ！！！！！」

どうやら音無君は日向君を突き飛ばして逃げたようだ。

「違うんだよおおおおおおおお！！ 音無いいいい！！！」

「来んなああああああ！！！」

「説明ぐらい聞いてくれええええええええええ！！！！！」

日向君は音無君を追っていったみたい。

にしても、

「あはははははははっ！！！」

やつばい、すっごく面白かったわ・・・。

今日も戦線は平和でしたと。

ちなみに、三日ぐらい日向君は音無君に避けられてたみたいだわ。

t o b e c o n t i n u e d ?

外伝1 今日のゆりっぺさん ー彼女は結構傍若無人ー（後書き）

前書きでいった通りちよい補足。

奏ちゃんの立場は生徒かいちよーで天使で戦線メンバーと戦ってますが、

実はこの小説の奏ちゃんは原作ほど嫌われていません。

レベル的に言うと、奏ちゃんから戦線メンバーに話しかければ普通に日常会話に入るレベル。

なのでゆりっぺにはいつも“あの子”と言わせるように心掛けてます。

戦ってるのは、神への反逆への手がかりを知るためだけなので、それほど嫌われていません。

奏ちゃん自身が気付いていないだけで・・・。

あと戦線メンバーで戦闘する人の戦闘力の順番でも・・・

ゆりっぺ>>>>>越えられない壁>>椎名 野田>松下>藤巻
>TK 高松>日向 音無>>大山

ぐらいのつもりです。

ゆりっぺー。

ちなみに、

奏 ゆりになります。 戦闘力は。

まあ、もうほとんど戦闘はないと思うけど・・・。

更新遅れるかもしれませんが、頑張ります。

感想とかもらえると嬉しいっす。

では、いつに。

第8話 ユイちゃん、ガルデモが好きなのは充分判りました・・・。（前書き）

待っていてくれた神様。

ものすごく遅くなってしまつてすいません!!

そして、遅くなつたくせに駄文っ！

ごめんなさい！

今回から原作を変えていきます。それでもよければ、ぜひ読んでください!!

それでは第8話、始まりっ！

第8話 ユイちゃん、ガルデモが好きなのは充分判りました・・・。

「ですから、ガールズデッドモンスター略してガルデモは最高というわけですよっ！」

「・・・・・・・・」

「なので」

どうしてこうなったんだろ・・・。

私の目の前では、アクセサリーの小悪魔っぽい尻尾をゆらゆら揺らしながらマシンガントークをし続けるピンクの髪の子がいる。

この子の名前はユイ。

さっき自己紹介されたんだよね・・・。

SSSの一員みたいで、ブレザーではなくセーラー服を着ている。
他にもどう見ても校則を完全にぶっち切っちゃってるアクセサリーの数々。

ここまで堂々と付けられてると注意する気も起きないの・・・。

まあ、似合ってるし・・・・・・・・可愛いもん。

私には到底真似出来ない格好だ。

「　　　　って聞いてますか!？」　　　生徒力イチョーさん!」

「・・・・・・・・うん」

「じゃあ続けますね!　ですから　　　　」

・・・いつまで続くんだろ。

あ、なんか同じ話も始まつてる・・・。

とういかどうしてこうなっただっけ？

私、立華 奏は、一時間以上ガルデモについて語り続けるユイちゃんをぼんやりと眺めながら出会いを思い出した・・・。

Keyコーヒー（砂糖入り甘々version）が飲みたくなったので自動販売機に向かった私は、お財布を忘れたことに自動販売機の前で気づき、肩を落とした。

私の、
ばか
・
・
・
。

することが無くなった私は見回りでもしようと思い、掲示板の方へと足を進めた。

$$\int$$

-
-
-
-
-
-
- h?

7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530

足を進めるごとに何かか聞こえてくる。

人の声みただけど・・・。

「でも」

「・・・デモ？」

何か暴動でも起こったのかな・・・？

そんなわけないか・・・。

掲示板の前には女の子が一人だけいた。

その女の子は掲示板にぺたぺた、というよりベタベタと何かのポスターを無数に貼っていく。

他のポスターが貼ってあってもお構い無しにベタベタと・・・。

・・・貼りすぎだよ。

女の子は私と同じぐらいの背丈で、SSSのセーラー服を来ていた。

小悪魔を模した尻尾や鎖の付いたブレスレットをしていて校則をぶつち切っちゃっているが、まずセーラー服を着ているところから校則違反なので注意はしない。

女の子は後ろにいる私に未だ気付かず、メロディーを口ずさみながらポスターをどんどん貼っていく。

「がるでも、がるでも、がるでも、がるかも」

・・・がるかも？

ダメだ。・・・意味わかんない。

私は女の子の後ろからそのポスターを眺める。

そのポスターは黒とピンクで少し見辛かったが、何が書いてあるのかは判った。

「Girls Dead Monster・・・・・・告知ライブ？」

「によわああああ!？」

女の子は身体をビクビクツとしたと思ったら、手に持っていたポスターをぶちまけてこちらに勢いよく振り向いた。

・・・び、びっくり。

振り向いた女の子は、私の姿を見て一瞬放心したような表情になって、数秒後、

「にやわあああ!？」

奇声を上げながらしりもちを付いた。

え？ 私そんなに怖いかな・・・。。

内心ちょっと傷付きながらも、私は女の子に手を差し出した。

「あり？ あ、ども」

女の子は驚いた表情のまま、私の手に引かれて立ち上がった。

だが立ち上がったって、ぼーっと私を見たまま動かない。

・・・私の顔に何か付いてるのかな？

「なんか・・・・・・・・言われてたのと違いますね？」

「言われてた？」

「なんかこう、斧みたいなのいつも持つてる先輩が、『天使は変なヤツだ、なに考えてるか解らんから気を付ける』って」

女の子は空中に斧っぽいや何かを指でなぞる。

・・・・・・・・野田君だよね、それ。

・・・・・・・・今度会ったら問答無用で“はんどそにつく”でぶった斬ってやるの。

「い、一応自己紹介しますね？ 私ユイって言います。陽動斑の下
っ端でして、まだ演奏とかはしてないんですけど」

ユイちゃん（私の中ではこれで確定）は頭をかきながら小さく笑う。

「だからポスター貼ってたの？」

「はいっ！ ってあー！？」

ユイちゃんは元気よく返事したと思ったら、頭を抱えて叫ぶ。

「これ生徒カイチョーさんに言っちゃダメだろ私iiiiiiiiいと小さく叫びながら私に背を向けてしゃがむ。

うん、まあ、私は止める立場だしね。言いたいことは判るよ……
。。。

それにしても告知ライブだなんて……初めてじゃないかな？

いつもは私やせんせーの目に付かないようにゲリラライブで行うことしかしてこなかった。

だというのに告知。

……ゆりっぺさんが絡んでるよね、多分。

告知してまで何かをしたいということ……。

……時間稼ぎとか？

でも、なんの？

しかも今回は学生大食堂ではなく体育館。ということはトルネードじゃないみたいだけど……。。

ってあれ？ 体育館？

・・・屋根直ったんだっけ？

私は体育館の屋根をこの前吹っ飛ばしたのを思い出す。

まあ、いつか。

「告知ライブなんて初めてよね・・・」

「そ、そうなんですよ！ 理由は判りませんが初めての告知ライブなんです！」

ユイちゃんは勢いよく立ち上がると、嬉しそうにぴょんぴょん跳ね

る。

にしても、理由は判らないか………どうしょ。

「今まではゲリラライブでしたが今回は告知！ きつといっぱい観客が集まるはずです！」

「うん……」

「やっぱりガルデモの良さをみんなに知ってもらいたいですからね！ いいですか生徒カイチョーさん！ ガルデモってというのはですね」

そこからユイちゃんのマシンガントークが始まってしまったのだった………。

回想終わり……。

そこからまた30分後

あゝ、も、もうダメ。頭の中がガルデモでぐるぐる。

ユイちゃんは未だ止まってくれない。

瞳の中では星がきらきらと輝き、身体全体でガルデモの良さを語っている。

ど、どうすれば……。。

どうすれば止まってくれるのかばかり考えていたら、いつのまにかユイちゃんの語りが終わっていた。

ユイちゃんはさっきとは違って変わって真剣な表情で私を見ていた。

なんだろ・・・・・・・・？

「生徒カイチヨーさん」

「・・・・・・・・なに？」

「やっぱり今回もライブを止めにきますか？」

私は生徒かいちよーだから止める立場にある。

今回は告知。きっとせんせい達も気付くことになるだろう。

私が駆り出されるのも間違いない…………。

「うん……」

私は肯定した。その時だった…………。

ユイちゃんは急に大きく頭を下げた。

まるで、私に許しを請うように。

「お願いします生徒カイチョーさん！ 今回のライブは止めないでください！ お願いしますー！」

ユイちゃんは私に何度も頭を下げる。

敵対しているはずの私に、どうしてここまで……………。

彼女がどうして頭を下げるのか、私にはよく判らない。

まさか、これも作戦のうちなのだろうか……………。

そう心の中で思ってしまった自分が少し嫌になる。

私には彼女に訊くことしか出来ない。

「どうして……………」

「え？」

ユイちゃんが頭を上げる。

「どうして、私に頭を下げてまで頼むの？」

「それは・・・」

ユイちゃんは照れながら頭をかく。

「私バカだから、リーダーの意図とか全然判んないんですけど・・・」

リーダーってゆりっぺさんのことだね。

「初めての、初めての告知ライブ、成功したところが見てみたいんです！」

ユイちゃんはまっすぐ私の目を見て話す。

「これが私の我が儘なのは判ってます。それでも……………お願いします!!」

そして、また頭を下げた…………。

ど、どうしよう…………。ユイちゃんんだか必死だ。

私は黙ったまま、ユイちゃんは頭を下げたまま…………。

……………はあ、しょうがないや。ユイちゃんのために今回はやめよ…………。

「・・・わかったわ」

「え・・・？」

ユイちゃんはようやく頭を上げる。

「今回・・・私は止めないわ」

「ほ、ほんとですか!？」

「・・・うん」

「や、やったああああ!!」

ユイちゃんは拳を天高く振り上げジャンプする。

とっっても嬉しそうだ。

まあ、この笑顔が見れたからよしとするの・・・。

あ、でもこれは一応言っておかないと・・・。

「私は止めないけど、せんせーが動く可能性はあるわ」

「あ、そういえば・・・」

「せんせーまでは、さすがに私でも止められない」

「だ、大丈夫ですっ!!」

しおれたと思ったらすぐさまガッツポーズを作る。

「生徒カイチヨーさんが止めないでくれるなら、先生なんか屁でもないです!!」

「けちゃんけちゃんですよ!」と言いながらシャドーボクシングを始めるユイちゃん。

さすがにそれはマズイの・・・。

「あ、そっだ! 生徒カイチョーさんもライブ聴きに来てくださいよ!」

ライブか。最近では止めるために動いてばかりだから、それもいいかも・・・。

「・・・・・・・・うん」

「じゃあその時は一緒に聴きましょう! それじゃ私はまたポスタ―貼りに行きますからっ!!」

ユイちゃんには散らばったポスターを一瞬で拾い集めると、私に手を振って走っていく・・・。

と思ったら振り返って、

「生徒カイチヨーさんって、名前なんて言うんですか!？」

名前を訊かれたの……久しぶりかも。

「奏・立華奏」

「じゃあ、奏さん！一人で先に行かないで下さいねっ！」

そう言ってユイちゃんは校舎の方へ走って行った。

奏さん、か……。名前で呼ばれたの、久しぶりだなあ。

思わず頬が緩みそうになってしまう。ライブも一緒に行くことになったし。

え、えへへ。

あ、緩んじやった……。

私は緩んだ頬を引き締め、一枚だけ落ちたままのポスターを手にする。

「Girls Dead Monster、か……………」

私はポスターを折りたたみ、スカートのポケットに仕舞う。

さて、変装用に白いニット帽でも持っておようかな・・・。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第8話 ユイちゃん、ガルデモが好きなのは充分判りました・・・。(後書き)

どうも、テストの点がまいちだったOk a レモンです。

ほんと、遅れて申し訳ない。

それでも読んでくれてるあなた・・・。

きっと神様を超えているっ!!

てなわけでユイと絡ませました。

多分ユイと絡むのが結構出てくると思います。

自分ユイ好きなもんで・・・。

次回はようやく岩沢と絡む。

シリアス目指して頑張るよ！

シリアルになるかもしれないけど（笑）

呆れないで読んでくれると嬉しいです。

更新頑張りますっ！

では、これにて。

第9話 思い、想い、歌にして

(前書き)

その生きざまを詩^{ウタ}にして、

燃える想いを歌^{ウタ}にする。

不器用すぎて伝えられないこの気持ち、

音とともにぶつけてゆこう。

きっと、あなたに届くと信じて

第9話 思い、想い、歌にして

学習棟 A棟

一度寮に戻って、変装用の白いニット帽を取ってきた私はまた見回りを始めた。

最近なんだか見回りが日課になってきたような気がするなあ・・・。

これと言って異常ないし。

逆に何もないと暇ね・・・。

ライブまではまだ時間がある。

それまでいったい何してよ・・・。

ようやく買えたKeyコーヒーを両手で持って飲みながら、これからどうするか考える。

身体が多少ぼかぼかするのを感じながら、廊下の窓に近付き空を見上げる。

今は放課後。夕日が目に染みるの……。

夕日をぼーっと眺め続ける。

あー、これといって思い付かない！。なんかどうでもよくなってきたなあ……。

コーヒーもいつのまにか飲み終わってしまったので、ゴミ箱へと空き缶を投げる。

空き缶はカランと音をたててゴミ箱に入る。

私、ないしゅー。

・・・虚しい。

思わず瞳が潤みそうになった私の耳に音が入ってきた。

ゆっくりと流れるメロディー！。これは、きっとアコースティックギターだ。

ここに来てからは Girls Dead Monster のロック
ミュージックしか聴いてなかったので新鮮だ。

足が音楽につられて歩き出す。

それは、身体に響くロックではなく、心に響くバラード。

これに歌詞がついたら・・・いいかも。

私は耳を頼りにその音楽が流れる場所へと向かった。

学習棟 A棟 空き教室

その音楽は一つの空き教室から流れてきた。

私は扉をゆつくりと開けて、中を窺う。

見ると一人の女性が瞳を閉じたままギターを弾いていた。

赤いショートヘアーの女性、Girls Dead Monster
rのバンドリーダーである岩沢さんだった。

彼女が弾いているギターは、いつもライブで弾いているエレキギターではなく、アコースティックギター。

傷が少し目立つが、大切にされているのが判るギターだった。

・・・こういうのもいいなあ。

私はその音に心が惹かれる。

岩沢さんにはどちらかといえばこちらの方が似合っているのではないだろうか・・・。

こう、弾き語りとか・・・・・・・・・・。

と、想像していたら扉が完全に開いてしまい岩沢さんがこちらに気付いた。

あ、音楽も止まっちゃった・・・。

「・・・天使か。なにか用？」

岩沢さんは肩にかけたタオルで汗を拭きながら私に目を向ける。

さすがに、「音楽につられてふらふらと」「なんて言うわけにはい
かないし……………」。

「もう夕方よ。生徒は帰る時間」

こういうこと言うから嫌われるんだろっなあ、うう……………」。

「あんたには関係ないさ」

やっぱり返ってくる言葉にはどこかトゲがある。

どうしよ……………会話が続かない。

私は思い切ってライブについて訊くことにした。

「今日、体育館でライブやるらしいけど」

「ああ。．．．．．止める？」

岩沢さんは余裕そうな表情で私に目を向ける。

まるで、私には止められないと言っているような．．．。

ちょっと、ムッてなるけど．．．．．実際成功率低いし。

そもそも今回は止めないって決めたもん。

「私は 止めないわ」

「へえ、止めな え？ あんた止めないの？」

岩沢さんが驚いたように私を見る。

「あんた生徒会長じゃないか。止める立場だろ？」

「そうだけど……今回は“止めない理由”があるから」

「理由？ あんたがあたし達を止めないほどの理由でもあるの？」

岩沢さんは怪訝そうに私を見つめ、ギターを触る。

私は不意に、ユイちゃんが必死で頭を下げる光景が、脳裏に映った。

確かに他の人にとってはどうでもいい理由かもしれないけど、私にとっては、久しぶりに“私と同じ人”に頼まれたことだったのだ。

せめて、小さな願いは叶えてあげたい。

“ほんの小さな願い”ですら、ここに留まる理由になるのだから・・・。

「頼まれたの。止めないでって」

「頼まれたって………いったい誰に？」

「あとな達の後輩みたいな子に」

「後輩………ユイか」

少し考えるような仕草をして、岩沢さんは答えを弾き出す。

「にしても、あの子も一応SSSに入ってるんだけど？」

「うん。知ってる」

「なのにその頼みを聞き入れるなんて

変わってるよ」

岩沢さんはようやく表情を緩め、少し苦笑していた。

彼女はギターを肩にかけ直すを弦を指で小さく弾く。

「
少し聴いてく？」

その言葉に私は少し驚いたが、表情には出さなかった。

「
・・・いいの？」

代わりに声に少し期待がこもる。

「
ああ。どうやら今のあたしは気分がいいらしい」

彼女はそういつてギターを弾き始めた。

弦を弾く細い指先が奏でるメロディー。

そのメロディーは、繊細でありながら力強く、心に響いてくるような……。

思わず聴き惚れてしまう……。

岩沢さんが奏でるメロディーを聴いていたら時間がかなり経っていた。

「どうだった？ あんたからみて」

彼女は少し頬を緩ませながら私を見る。

どういえばいいかな・・・・・・・・。

「言葉に出来ないー」とか、「すごくよかったー」とか？

なんかしっくりこない・・・・・・・・。

やはり自分の気持ちをそのまま伝えた方がよさそう・・・・・・・・。

「・・・あなたの紡ぐメロディーは、心に響いてくる」

「心に響く、か・・・。うまいとかならよく言われるけど、そう言われたのは初めてかな」

岩沢さんは少しだけ頬を朱色に染めて、照れ隠しなのか、ギターの弦を弾く。

「あなたはロックより、バラードとかの方が似合いそう・・・。」

「そう？ でもあたし達がやってるのは陽動だから・・・・・・。バラードじゃダメなんだってさ」

「・・・・・・・・あなたはバラードの方がいいの？」

「まあ、元はそっちだったから・・・・・・・・」

“元”

きっと生前のことだろう。

生前から彼女は音楽に人生を懸けていたみたいだ。

自分の曲に、あれだけ想いを込めることが出来るのは、生前から歌い続けたからなのだろう。

岩沢さんを見れば、寂しげにギターを抱いていた。

私の発言のせいで生前のことを思い出してしまったみたいだ。

・・・ごめんなさい、岩沢さん。

私は罪悪感からこのまま帰ろうと思ったが、

「あたしは、ただ

歌いたかったただけなんだ」

彼女の独白に、足を止める。

彼女は俯いたまま、私に顔を向ける。

「あんたって

他の奴の生前の記憶って知ってる？」

「
ううん」

私には他の人の生前の記憶など知るすべはない。

知るにはその人から訊くしか方法はない。

「
・・・そう」

「
でも」

こんな私にも判ることがある。

「あなたが、歌に人生を懸けてきたことは判る」

「・・・・・・・・」

「あなたの歌にはそれだけの想いが込められてる・・・」

「・・・歌に想いを込めることでしか、他の人に伝えられないだけよ」

「私には、想いを伝えることさえ、出来ないから」

その言葉にようやく岩沢さんは顔を上げた。

寂しさはもう感じず、私の言葉に同調したように苦笑する。

「あんたもあたしと一緒に、不器用だね」

「・・・・・・・・自分で思いつ

・・・・・・・・ほんとに、もう“伝える相手”だって見つかったのに。

どうすれば、伝えられるのか判らない。

まだ、時間がかかりそうだ。

岩沢さんは窓の外の夕日を眺めていた。

アコースティックギターを大切そうに抱き締めながら……。

きっと、岩沢さんの一番大事なものだ。

私はそのギターをじっと見ていた。

それに気付いた岩沢さんは、私によく見えるようにしてギターを抱き締める。

「これは、あたしの命そのものなんだ……。」

命。

そこまで大切なものなんだ……。

「きっと、この子に出逢ってなかったら、もっと早く死んでただろうし」

そう言って、ギターをいとおしそうに撫でる。

「とても大切なものなのね」

「ああ……。本当に」

その時、無情にもチャイムが鳴り響いた。

もうすぐ、ライブだ。

岩沢さんは素早くギターをケースに入れて、私の前に立つ。

その表情はとても穏やかで、それが私に向けられたものだと思い付いたとき、私はいつもの無表情ではなかった。

「ホントはあんたにも生前の記憶を教えたかったけど、時間だから」

「うん。…………ライブ、頑張っ
て」

「ふふ、ああ。頑張るよ」

岩沢さんは私の横を通りすぎて、少し歩いて立ち止まった。

彼女は振り返らずに、

「ねえ、あんた名前なんていうんだっけ？」

そう私に尋ねた。

「奏。．．．．立華 奏」

「奏、か．．．。奏、あんた、そうやって笑ってる方が綺麗だよ」

岩沢さんはそういうと、私に背を向けながら手を振り、去っていった。

私は自分の頬を指でなぞる。

どうやら本当に笑っていたらしい。

綺麗か．．．．。

ちょっと嬉しいかな・・・。

さて、私もユイちゃんと合流しないと・・・。

私は岩沢さんの奏でたメロディーを口ずさみながら学習棟をあとにした。

体育館

ユイちゃんと共に来た体育館には、学生大食堂の時よりも人が少なかった。

人は増え続けているが、いつもと比べてしまつとどうにも劣る・・・。

隣で幕の開かない壇上を見つめ続けるユイちゃんもどこか不安げだ。

そんなユイちゃんを横目に、私は天井を見上げる。

・・・いつ、直したんだろ。

天井は前と同じように元通りになっていた。

まあ、いつか。するーするー。

体育館全体が暗くなり、壇上を何個ものライトが照らし出す。

ライブが 始まった。

エレキギター、ベース、ドラム。

そして、岩沢さんの歌声が体育館に響き渡る。

ユイちゃんもさっきの不安げな様子はなく、ぴょんぴょん跳ねながら壇上を見ている。

笑顔が輝いているとはこういうことを言っただろう。

私はずれたニット帽を深くかぶり直し、歌声に聞き入った。

Crow Songに始まり、いつもは終盤近くにもってくるはずのAlchemyに移る。

思ったよりも人が集まらなかったことが原因かな・・・観客を盛り上げることを第一に考えたみたい。

カッコいいなあ・・・。

ギターをかき鳴らし、まるで私たちに想いをぶつけるように歌う岩沢さん。

みんなが夢中になるのも判る。

大勢の観客の歓声にも負けることのないたった一人の歌声。

周りの歓声すら煩いと感じずに私ですら夢中になる。いつのまにか身体でリズムを取っていた。

・・・楽しいなあ。

時が経つのも忘れ、

そして、ライブも終盤に差し掛かる・・・。

「何事だアあああこれはっ！！」

歓声にかき消されながらも私の耳には届いた。

やっぱり来ちゃった・・・。

振り向くと、大勢のせんせーが体育館の入口に押し入ってきた。

「奏さん・・・」

ユイちゃんもせんせー達に気づく。

「奏さんは見つかるとマズインじゃないですか？」

「うん・・・でも、ここにいるから」

岩沢さんと話が出来たおかげで、今も彼女の後ろに安置されているアコースティックギターがどれだけ大切なのかは判っている。

後ろのせんせー達、その一番前にいる体育教師は観客である生徒たちを張り倒して壇上にまっすぐ向かってくる。

もしかしたら・・・制裁のつもりで楽器を壊す可能性もある。

・・・それは、させちゃいけない。

「・・・私は少し離れた場所にいるわ。ユイちゃんも気を付けて」

「はい、奏さんも気を付けてくださいっ！」

なぜか敬礼するユイちゃんを背に、観客とは離れた場所に向かう。壁際に来れば観客は少ない。

もう一度ニット帽を深くかぶり直し、現状を鑑みる。

今のところ観客の生徒が壁のようになり、せんせー達を押し留めている。が、時間の問題だ。

壇上では岩沢さんの音量が跳ね上がる。

観客を余計に盛り上げてせんせー達を壇上に近付けさせないつもりなんだろう。

だが、それは余計にせんせーの怒りを助長させてしまう。

・・・壁が崩れ始めた。

生徒の壁を突き破りせんせー達が壇上に近付いていく。

私はユイちゃんの姿を探した。

どうやら彼女は巻き込まれてはいないようだ。せんせーを気にしながら不安げに壇上を見上げている。

可哀想だな・・・これじゃ成功とはいえないだろうし。

「あ・・・」

せんせー達が壇上に入り始めた。

歌声と楽器の音が消えてしまう。

楽器を取り上げられ、ガルデモの人達がせんせーに捕まっていく。

生徒の怒号とせんせー達の怒号が入り交じり、今やライブの面影すらない。

・・・この状況はマズイの。

私は壁際から壇上近くへと移動していく。

そして、体育教師がとうとう楽器の一つであるベースを床にぶつけて叩き折った。

一番嫌なパターンだよ・・・。

生徒の怒号が余計に大きくなる。せんせーはそのせいで顔を赤くし近くのドラムを蹴り倒す。

・・・あれじゃ、ただの暴君だよ。生徒もせんせーも止まれなくなってきた。

絶対バレるけど、やらなくちゃダメだよね・・・。

私は生徒をかき分け、横部屋に入り階段を駆け上がる。

幕の近くでは遊佐ちゃんがうつぶせに倒されていた。

遊佐ちゃんを組伏せているせんせーは後ろにいる私には気付いていない。

好都合だね。

幕の内から見ると、体育教師は最後に岩沢さんのアコースティックギターに目を付ける。

せんせーの一人に腕を取られ押さえ付けられている岩沢さんの顔が青くなる。

「学生の本分は勉強だっ！ こんなもの必要ない！！」

どこからどう見ても学生時代勉強なんかしてないような風貌の体育教師に言われても説得力ないよね・・・と、違う違う。

「それに触るな．．．。触るなよ．．．」

うわ言のように同じ言葉を紡ぐ岩沢さんの瞳は酷く揺れている。

それを見て、岩沢さんの言葉を思い出す。

『これは、あたしの命そのものなんだ．．．』

思い出せてよかった．．．。

私の行動は、決まった・・・。

床を弾き壇上へと駆ける。

「触るな！！　あたしのギターに
」

「さわらないでください」

「「「「「」

っ！？」「」「」「」

周りの音が完全に消える。

私はギターと体育教師の間に滑り込み、帽子を外した。

「・・・奏？」

「お、お前立華ッ！！ 何をしている！？」

一瞬で生徒の間でざわめきが起こる。

まあ、いきなり出てくれば・・・ね。

「何を、と言われましても・・・見てのとおりですが」

「お、お前は生徒会長だろうが！！　それが不良生徒の支援をして
どうする！？」

「別に支援していません」

「ならばそこをどけっ！！」

「ごきません」

せんせー達の動きが止まる。

当たり前のこと言ってるだけなのに・・・。

「せんせー方。あなたは生徒を止める権利はありますが、生徒の大切なものを壊す権利はありません」

「なっ

！？」

「この場合は私が仕切ります。あとで報告しますので」

私は呆けたまま見ている岩沢さんを一瞥し、もう一度せんせーを見る。

もう覚悟は、とうに出来ている。

「どうぞ、お引き取りください」

一瞬時が止まったようにほとんどの人が止まる。

体育教師はいち早く意識を戻すと、顔を赤くして吠える。

「立華貴様ッ！！ 教師をバカにするな！！」

拳を振り上げ、私を殴ろうと降り下ろす。

・・・問答無用で殴ろうとする時点で、教師の自覚が足りてないと思うの。しかも女の子相手に顔面なんて・・・

私は顔面に向かってくる拳を首を反らすだけで回避し、そのまま伸びた腕を引く。

そして体勢を崩した体育教師の顎を掌底で跳ね上げた。

きれいに決まったあ・・・。はあ、やつちゃった。

体育教師はそのまま気絶して仰向けに倒れた。

・・・沈黙が痛い。

どうにかして状況を変えないと・・・。

「奏・・・」

岩沢さんの小さい声が耳に届く。

・・・そうだった。

岩沢さんの、人生は・・・。

「岩沢さん」

「？」

「あなたは何をしているの？ あなたはなんのためにここにいるの？
なんのために、歌い続けてきたの・・・？」

「っ！」

目を見開いた彼女は、一度目を閉じ、また開く。

その瞳には、力が宿っていた・・・。

彼女は取られていた腕を振り放し、私の後ろへと駆ける。

「ひさ子！ ライトと音響！！」

アコースティックギターのストラップを肩にかけながら岩沢さんは正面を向いたまま叫ぶ。

「ッ！？ お、おう！」

ひさ子さんは組み敷かれていたせんせーの顎に頭突きをして離れ、上にある音響施設のある教室へと走る。

顎を押さえたせんせーはひさ子さんを追いかけようとして、遊佐ちゃんに足を取られて転んだ。

そして、音響が切り替わると同時にすべてのライトが岩沢さんを照らし出す。

「奏・・・ありがとう」

・・・どういたしまして。

その言葉と同時に、彼女はギターの弦を弾く。

私の後ろで、岩沢さんは自らの歌を歌い出した。

初めて人前で演奏するバラード。

人生の理不尽さ、そしてそれをかき消すような歌声に秘められた想
い……。。

すべての人が、その歌に引きこまれていく。

流れていくギターの、儚く紡がれる音。

彼女自身の……。歌を。

一番彼女に似合う歌が、

思いを、想いを綴った歌が、

今、

「奏。．．．．．やっと、やっと
」

見つけたよ．．．．．

彼女のすべてを、終局へ．．．。

ガタン。

私は、物音に、ゆっくりと振り向く。

そこに彼女の姿はなく、横たわったこの世界にたった一つの彼女の
想い……。。

一本のアコースティックギター。

それが、光の中で輝いていた。

もしも次があるならば、また、会えることを・・・願います。

岩沢 まさみさん

体育館 壇上

私の前にはSSSのメンバー、ゆりっぺさんと日向君、そして音無君。その後ろにはガルデモのメンバーとユイちゃんがいた。

私は一人、岩沢さんが残したギターを胸の前で抱えている。

「アンタが、消したの？」

ゆりっぺさんは無表情のまま、腕を組んでいる。

「私じゃない」

「
そう。信じるわよ」

私のたった一言を信じると言った彼女は、他には何も言わずに体育館の壇上から飛び降りる。

「行くわよ。音無君、日向君」

「あ、ああ」

「りょーかい」

ゆりっぺさんはそのまま振り返らずに体育館から去っていた。

日向君はそのまま彼女についていき、音無君は何度か振り返りながらも二人のあとを追う。

私の目の前に残ったのはガルデモのメンバーとユイちゃん。

このギターを、返さないと・・・。

「あの、これ」

「岩沢はさ」

私の言葉を遮り、ひさ子さんが私を真っ直ぐ見る。

「最後　　嬉しそう、だったか？」

彼女は上にいて、直接岩沢さんを見てはいなかったことを思い出す。

よく見れば彼女は泣いていた。表情には出さずに、ただひたすら涙が零れだしていた。

それでも彼女は瞳を閉じない。

私の答えを、待ち続ける。

岩沢さんは、ようやく見つけることが出来た。

最後は涙を流していたが、彼女は幸せそうだった……。

「
うん」

「……そうか。なら、良かった」

ひさ子さんは瞳を閉じる。

そして、開けた彼女の瞳からもう涙はなかった。

「そのギターだけど、あんた 持ってたよ」

「え・・・？」

これは岩沢さんがこの世界にたった一つだけ残したものなのに・・・。

どうして？

ひさ子さんは少しだけ頬を緩める。

「あいつのギターは、あいつだけが弾くためのものだ。それに岩沢はあんたのこと認めたみたいだし……。持っていてよ、あいつの想い（ギター）を」

私は思わず、ギターを抱える手に力がこもる。

傷だらけのギターを見ると、岩沢さんの生きてきた道筋がこの目に映りゆく。

もう答えは一つだけ、

「うん

」

女子寮 とある一室

そこには、大切そうに飾られた一本のアコースティックギターがある。

まるで、その場だけが輝いているように・・・。

彼女の姿が脳裏に映る。

幸せそうに、好きな歌を歌い続ける一人の少女。

きつと、そんな光景がある・・・。

生きる意味を、生きてきた意味を、ここに来た意味を、彼女は知ることが出来たんだ

「私も

早く」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第9話 思い、想い、歌にして

(後書き)

遅くなったアあああああああ

ッ！

待っててくれた人ありがとうおおおおお！

今回でようやく二桁にいったぜ！

原作終わったね？

俺思わずぼかーんってなったよ…………。

いつの間にかゆりがサブキャラ扱い…………。

そして音無

お前いつ奏のこと好きになったん？

直井と日向はよかったけど…………。

まあ、終わっただけで続けますよ？ けっこう変えて・・・。

とりあえず、日向とユイはもっとイチャつけ。

音無が奏のこと好きなように見せられるように頑張るよ。

この小説の感想貰えると嬉しいです。

駄文だけどね？

あとは原作の感想でもいいです。どんな感想でも返信しますんで・・・。

さて、次はSSSサイドから始める野球物語
ではな
く、事後処理を。

更新出来るように頑張るよおおおおお！

では、いかにして。

第10話 代償はその身に

言い渡された結末・・・。

(前書き)

今回は極端に短いです。

題名がなんかカッコいいけど、内容はそれほどではありません。

ホントに短いです。

では、第11話始まりっ！

第10話 代償はその身に

言い渡された結末・・・。

ライブから3日後

私は職員室に呼ばれた。

「立華。なぜ呼ばれたか判っているな」

目の前にはライブを止めに来たせんせー達。

「・・・・・・・・」

「どうにか言ったらどうだッ！」

うー、耳痛い。

私の真横で体育教師が怒鳴りちらす。

何を言えがいいの？ 言っただってあなたたちに判るわけがないし・・。
。。

「・・・弁解はあるか？ 立華」

「・・・弁解？」

「ライブを止めようとしていた私達教師の邪魔をし、そのうえ一人を殴り倒した。反省しているなら何か罰則で許すが？」

何を言ってるんだろ？

「反省する必要がありませんし、反省する気もありません」

「 なっ!?!? 」

「私は間違ったことはしていません。止め方を間違えたのはあなた方せんせーです」

「・・・間違ってないよね、私は。」

「そうか。ならお前を処分しなくてはならない」

「 そうですか 」

「反論はないな」

「する必要ありません」

「……決定だッ！」

報告文

立華 奏。

教師に反乱し、あまつさえ教師を殴り倒す。

反省はみられず・・・。

よってここに処分を下す。

生徒の混乱を防ぐために、定期考査一週間後に実行する。

立華 奏 この生徒の生徒会長権限を剥奪する。

・・・もう生徒がいちよーじやなくなるってこと？

うう、唯一のアイデンティティーが・・・。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第10話 代償はその身に

言い渡された結末・・・。（後書き）

はい、どうも。このままだと期末テストがやべー気がしなくもない
Ok a レモンです。

奏ちゃんが、生徒かいちょーじゃなくなるのが早い段階で決まりました。

教師殴つたにしては、処分が甘いですが、停学にはなりません。この世界は学校しかないっばいんで・・・。

でも、日向は飛びます。これはガチ。

今日で投稿してから一ヶ月が経ちました。頑張った俺っ！！

もつと頑張る！！

テストなんか知るかつ！！

書くぜえ、超書くぜえええええええええ！！！！

では、これにて。

「めんっ！ 本編じゃないです。現状報告みたいなものっ！！

「どうも、作者のOk a レモンですっ！」

「あなたの心の中の天使
した。立華 奏です」

「ごめんなさい、調子乗りま

以下は レモンと天使で統一。

レモン「いやー、すみません。本編だと思った人」

天使「ごめんなさい」

レモン「原作四話のデーゲームですが、こっちゃんと書けないんですよ」

天使「ちゃんとして?」

レモン「次の回は日向視点で物語を進めんだけど、ぶっちゃけ原作よりユイとイチヤイチヤっぽいのしたい」

天使「それは別にいいけど ってあれ? 日向君視点?
私は?」

レモン「出ないっす」

天使「……………これって私が主人公なんじゃ」

レモン「いや、だってあつちの視点も書かないとさあ、からめらんねえのよ」

天使「……………へたっぴ」

レモン「ぐはっ！！ でもあっちゃんないと原作入れないっす！
四話ってアンタほとんど話さないじゃないですか！」

天使「まあ、会話なんて最後以外音無君だけだけど・・・」

レモン「でしょ！？ ユイと絡めたんだからもつと絡めたいんだよ
！」

天使「でも次、出ないんでしょ？」

レモン「出ないっす」

天使「・・・・・・陰でゆりっぺさんとラジオ収録してよ」

レモン「現実とごっちゃにしないっ！！ あっ、みんなはラジオ聴
いてる？」

天使「聴けばもれなく“はんどそにつく”」

レモン「いったい何のうらみが!？」

天使「話それてるよ?」

レモン「おっと、やべーやべー」

天使「こんなの書いてる暇あるなら、本編書けばいいのに」

レモン「書けないからこんなの書いてんのさ」

天使「……………エツチなゲームやってる暇あるのに?」

レモン「まだエッチまでいってないっす。みんな光〇の町、ラベ〇ダーの少女やつてる？ 続編言うから買ったけど、まだどこら辺が続編か判んない。面白いけどね？」

天使「これ読んでる人が、みんな18歳とは限らない」

レモン「俺は中学んときからやってたよ？ 俺的にゲームは萌えより燃えだけど」

天使「わぁお、変態さん」

レモン「それ他の考えてるやつの口癖だからやめんさい」

天使「考えてるのって、真っ白さいきょーに憑依だか、転生するやつ？」

レモン「……………」

天使「そんなの考えてないで私を活躍させて」

レモン「この小説で活躍してた？」

天使「私、主人公、キタコレ」

レモン「いや、キャラ変わってますよ？」

天使「元から性格変化だから気にしちゃダメ」

レモン「あー、多分次の日曜日ぐらいに更新になるかも」

天使「脳ミソ使って早く書いて」

レモン「だってテスト近いんだよ？ 単位がさあ」

天使「この前後書きでテストなんかどうでもいい発言してたじゃない」

レモン「

(。 。 ; ;)」

天使「書くの、けってー」

レモン「・・・頑張るっす」

天使「そっいえば、私の分裂のときとかどうするの？」

レモン「どうするって？」

天使「このゆりはほばさいきょーじゃない」

レモン「多分ゆりっぺ無双になると思う」

天使「原作崩壊もいいレベル」

レモン「だってさいきょーだもん。てか頭メルヘンな天使な時点で崩壊してるでしょ？」

天使「メルヘン言わない」

レモン「いいじゃん。最後の方羽出すし」

天使「とあるは面白い」

レモン「実は天使の部屋にあります」

天使「私の幻想ぶっころし」

レモン「あなたのキャラすらぶっころし」

天使「いい加減に話を戻さないと」

レモン「てか、なんの話してたっけ？」

天使「……さあ？」

レモン「とりあえず天使とゆりっぺのステータスでも載せますか」

天使「へー」

ステータス

立華 奏
(天使)

CLASS

エンジェル風味

性別 女の子

属性 ぽやぽや

筋力：D 魔力：E
-

耐久：D（“でいすーしょん”発動状態でB+）

幸運：G（無表情すぎて、敵と間違われる）

敏捷：C（“でいれい”発動状態でA）

宝具：EX

詳細

いつの間にか天使と間違われ、ゆりっぺ達に攻撃し始められた可哀想すぎる普通の女の子。

否定しようにも、無表情すぎて伝わらず断念。

部屋の中に何か対抗出来るものはないかと探していたら、なぜかあった“えんじえるプレイヤー”で能力を作る。

そのせいで攻撃が激化したことには気付いていない。

なぜ生徒会長になっていたかは自分でもわかっていない。

基本的に頭はメルヘン。

妖精さんはきつといると、信じている。

生前に恋愛は経験したことがないので、そういうことには耐性皆無。

麻婆豆腐は生前から好き。ようするに辛いのと豆腐が大好き。

胸が小さいのが少しコンプレックス、だが自分の容姿には気付いていない。

生前はネタバレ（皆知ってるだろうけど）だからスルー。

技能

『するー』

自分でしたことすらなかったことにする

しかも周囲に感染するため、みんな「ま、いつか」状態になる

『えんじえる』

とりあえず、みんながほんわかする

宝具

「（なんとか）　すぎる」

えんじえるプレイヤーで開発した能力

今のところ、ガードとアタックを作成

アートの作ろうとしているが上手くいかない

主に自衛目的なので、積極的には使用しない

ランク：EX

種別：対人・対軍宝具

レンジ：1～10

最大補足：不明

天使「……何この似非“運命”系ステータス」

レモン「みんなこっちの方が分かりやすいと思ったんだけど」

天使「なんか凄くバカにされてる気がする」

レモン「気のせい気のせい」

天使「……………」

レモン「じゃあ次ゆりっぺね」

ステータス

ゆりっぺ（仲村 ゆり）

CLASS

SSSリーダー

性別 女の子

属性 いろいろとチート

筋力：S

魔力：B -（魔力の代わりに気が使えそうだから）

耐久：B

幸運：E（この世界に来てしまった時点で幸運は皆無に等しい）

敏捷：A +（たまに人の動きを越える）

宝具：C（ゆりっぺが扱うことによつてB +に跳ね上がる）

詳細

初めて神に逆らおうとした人物。

奏を天使と決めつけてからは強くなるために死ぬ気で修練（実際何
度も死んでいる）して、した結果いろいろとチートになってしまっ
た。

実質この世界さいきよーの人。

負けん気が強いが、小さいことはあまり気にしないタイプ。

人と接するのは得意だが、最終的に立場が上になるのがこの人。

強くなる過程で、何度も日向を実験台にしては殺しまくっている。

日向と一番付き合いが長いが恋愛感情は皆無。

生前は皆知ってるだろうからスルー。

技能

『心眼（偽）』

鍛えてたらなんか軌道が見えるようになった

あくまで（偽）

『リーダーシップ』

「あ、これついていかないとヤベーな」と感じさせる

『いろんな技』

とりあえず、漫画やらゲームやらで覚えた技を使うことができる

宝具

「虎徹・新」

ゆりっぺの実質2本目の刀

とある小説でみた、ありえないほどの切れ味を持つ刀をモデルにし

た刀である

ゆりっぺでは光速まではいけないが、音速レベルで抜刀が可能

一本目は奏の“はんどそにつく”に負け、折られたのを改良し新として復活したもの

まずゆりっぺ以外には抜けない

抜いても自分を斬ってしまい扱うことができない

ゆりっぺ曰く「これ、全てを斬り伏せる一刀よ」

今のところ斬れないのではない

まず、ない

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1～2

最大補足：一個

天使「……………ワロス」

レモン「君のキャラでそれ言っちゃダメ」

天使「だって私が勝てる要素が何もないよ」

レモン「宝具は勝ってるってっ！！」

天使「その他全部負けてる」

レモン「・・・・・・・・」

天使「あはー、わるすわるすー」

レモン「やつべ、壊れた」

天使「勝てるわけない。もうやだーっ！！！」

レモン「本格的にヤバくなったな」

天使「やだー！ やだー！ もう戦うのやーっ！」

レモン「・・・・・・・・でも予定してるオリジナルでもう一回戦うんだけど」

天使「……………ころす」

レモン「ぎゃーっ!! それは幻のエクスカ○バーっ!! 逃げるっ!!」

天使「しかしまわりこまれた」

レモン「や、ヤベーぜ。コマンドはっ!?!」

逃げる（しかしまわりこまれる）

あやまる（しかしエ○スカリバー）

ちょうはつ（確実にエクス○リバー）

もむ（間違いなく○クスカリバー）

レモン「全部無理じゃんっ!? しかも何さ“もむ”ってっ!」

天使「えくす（約束された）」

レモン「あ、マジ死ぬ」

天使「かりばー（滅殺の剣）」

レモン「不幸だアあああああッ!!! あべしッ!!!」

天使「悪は去ったの………」

天使「では、これで。これからも読んでいただけると幸いです」

天使「駄文ですが、これからも宜しくお願いします」

天使「私も頑張っていきます」

天使「それでは」

レモン「さいならー」

天使「はんどそにつく」

レモン「ひでぶっ！！！！」

天使「・・・おわれ」

第11話 俺って仲間集める才能ねえのかな・・・。(前書き)

本文を読む前に、もう一度キーワードを見てください。

“キャラ崩壊”です。

いや、マジで。

しかも、今回が一番長い。

駄文がダラダラ続きます。

それでも読んでくださるならお願いします。

それでは、11話始まり。

第11話 俺って仲間集める才能ねえのかな・・・。

あの夏の日

頭上には燃える太陽・・・。

足下から巻き上がる土埃。

息をするたびに喉が、肺が焼けていくような感覚。

それでも息は荒くなっていく一方・・・、死にそうになってくる。

滝のように流れる汗は、いつこつに止まりそうにない。

あと・・・・・・・・一球。

あと一球で終わる

そして、耳を突き刺す打球音。

打たれた白球は、遥か高く・・・・・・・・。

俺の頭上に向かって落ちてくる。

見上げた太陽に照らされ輝く白球を、頭上に掲げたグローブで取る。

そう．．．．．取る、だけだ。

取れば、終わるんだ。

俺は、それを

「
日向ッ！」

「 ツ!？」

ハッとなって俺は隣を見た。

隣にいた茶髪で切れ目の男
いた。

音無

が俺を心配そうに見て

「おい、大丈夫か？」

「お、おう。わりいわりい」

俺はそれを笑って誤魔化する。

何考えてんだよ、俺は……………。

対天使用対策本部

そこには戦線の主要メンバーが集まっており、俺もその中にいた。

どうも Girls Dead Monster のリードボーカルを決めるらしく集められたが、そこにいたのは元リーダーの岩沢とは程遠いチミっ娘だった。

悪魔の尻尾やら鎖付きブレスレットやらを身に付けたパンクファッションな格好をしている少女。

名前は、

「ユイって言います。よろしくお願いしまっす!」

と、目の横でVサインを決めるチミっ娘がボーカル候補だった。

まあ、可愛いっちゃ可愛いけど……。周りは結構否定的だな。

そりゃ前が岩沢みたいなクール系だったから、ユイだとガルデモには合わないような気もするが、俺的には歌を聴いてかなだな……。・。・。

ユイは周りの否定的な言動を覆すために、どこから持ってきたか判らないラジカセやらマイクスタンドを出した。

「どうか、聴いてから判断してください!」

そういうと、ラジカセのスタートボタンを押して歌い始めた。

歌だが、上手いと言えば上手い。

だが、やはり岩沢には劣ってしまう。

岩沢は想いをそのまま歌に乗せることが出来るから、聴いていて心に響いてくるが、ユイの歌は心あまり響いてこない。

岩沢のように人生を歌に懸けているわけじゃないだろうから、これでも上手い方なのだが……。

周りのメンバーも岩沢の歌を聴き慣れてしまっているので、感想は俺と似たり寄ったりだった。

そして、そのまま歌い終わったユイは調子に乗ってマイクスタンドを振り回し始めた……、

と思ったら天井をぶっ壊しながらマイクのケーブルが首に引っ掛かり、そのまま宙吊りになった。

……こ、こいつアホだ。

「……何かのパフォーマンスですか？」

「な、なんだ？ デスメタルだったのか……」

「Crazy baby」

周りの奴らは本気だか呆れてるんだか判らない意見を言っている。

宙吊りになったユイを見てみると、苦しそうにケーブルを外そうともがきながら顔を青くしている。

「……し、死ぬ」

「どうやら事故だったみたいだな」

俺の隣にいる音無はユイを指差しながら、呆れたように眺めていた。

……見てりや事故だって判るって音無。

「たく、しょうがねえな」

俺は呆れながらもユイに近づき、首に絡まったケーブルを外してやった。

宙吊り状態だったユイは床に足を付けると、そのまま俺の方に倒れてきた。

さすがにそのままぶっ倒れるのをほっとくのは可哀想過ぎるので、俺はユイを抱き止める。

「た、助かりましたぁ……………ありがとうございますう」

ユイは何故か俺の背中に手をまわすと、足をプルプルさせながらホッと息を吐く。

な、なんで余計に抱き着いてくるんだ？ は、早く離れろって・・・

生前女に抱きつかれることなんてなかった俺は顔が熱くなるのを必死で耐えながら、俺より頭二個分ぐらい小さいユイを見下ろす。

「わ、判ったから、離れろって」

「お？ お、おお。すいませんっ」

ユイは頬を朱に染めながら、急いで離れるが依然として足をプルプルさせたままだ。

・・・照れてんのか？

「盛り上がってるとこ悪いけど、いいかしら？」

その声に導かれて振り向くと、ニヤニヤと口角を吊り上げたゆりっぺがいた。

くくそっ！ コイツ面白がってやがる！

恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じた俺は、急いで彼女に道を開けて後ろに下がった。

俺は他のヤツより後ろに下がっていた音無の隣に戻った。

「にしても、岩沢さんとは正反対のボーカルになりそうね」

ゆりっぺは急に真面目な顔になると、腕を組んでユイを眺める。

「いいんですか？　これが新しいボーカルで」

「他の探すかあ？」

高松や藤巻が否定を示す。それに同調するように周りの仲間も頷く。

「こらアあああッ！！　ちゃんと歌えてただろ！？　これでも岩沢さん直々に指導してもらってたんだからなああ！！」

ユイは腰に手を当てると、もう一方で俺達を指差す。

てか、岩沢に指導してもらってたのかよ……………。

にしては

「心に訴えるもんがなかったな」

「ありませんね」

「ねえな」

「正直言つと、あたしの方が歌上手いわね」

上から俺、高松、藤巻、………ってか、何真顔で言ってるだよゆりっぺ。

……ほら、ユイがぽかーんってなっちゃったよ。

「………はつ。そ、そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるなあああ！！　というかりーダーの意見は酷すぎるッ！！」

意識を取り戻すと、涙目になりながら俺達に突っかかってくるユイ。

さすがにゆりっぺのは酷いわな……。バンドのボーカルやろうと
しているヤツにその言葉は酷すぎる。

「それで？ どうするんだ？」

「どうするの？ ボーカルにする？」

「Girls Dead Monsterに合うとは思いませんが」

「合う確率は60% さすがにこれは低いですね」

「人格に難有りだな」

「浅はかなり・・・」

「Crazy Little Girl」

「新しいの探すか？」

「まあ、やる気はあるみたいだけど」

上から、音無、大山、藤巻、竹山、高松、野田、椎名、TK、松下、
ゆりっぺ。

・・・な、なんか可哀想になってきたな。俺はもうユイがボ
ーカルでいいや。

「お、おお、お前らそれでも先輩かあああああ！！　うえええええええん！！！」

げっ！　マジ泣き！？

床にそのままペタンと座り込んで泣き始めたユイは、見ているだけで可哀想過ぎた。

どうすんだよ……………コレ。

俺は周りを見渡すと、

「……………」

何故か皆無言で俺を見ていたアあああああッ！！　なんで！？

ゆりっぺは俺の隣に來ると、肘で俺の脇を突く。

目が明らかに「お前がどうにかしろ」と物語っている。

「なんで俺ッ！？　泣かした大部分お前のせいだろ！」と視線に込める。

すると、「行かなきゃホモと言いつらす」とゆりっぺの鋭い目が俺を射抜く。

り、理不尽すぎる　　ッ！

俺は周りに助けを求めるが、ほぼ全員が一斉に俺から目を反らす。

くそっ！ 味方がいねええええ！！

と、思ったら音無だけが俺から目を反らさずに真剣な表情で俺を見ていた。

さすが音無！ 親友は俺を見捨てなかったッ！！

俺は思わず目から汗を流しそうになった、

が、

キラーン、という擬音が付きそうな笑顔で俺にサムズアップする音無。

うおおお！　音無ええええ
ええええ！！

一瞬で親友に裏切られた俺は放心しそうになったが、ゆりつぺに背中を蹴っ飛ばされて放心すらさせてもらえずユイの前に出された。

な、なんで俺が……。泣いてる女の子泣き止ませるなんてしたことねえのに。

俺はとりあえず片膝についてユイの近くに寄る。

「え、えーと。だ、大丈夫か？」

まともなこと言えねえ……。

そう思ったらいきなりユイが抱きついてきた。

「うええええええん！ ぜんぱい、あ、あいつら鬼ですつっつっつ
ううう！！！」

ユイは鼻声のまま俺に抱きついて泣き続ける。

って冷たッ！？ な、涙と鼻水が制服に染み込むッ！！

女の子に抱きつかれてドキドキしそうなのに、状況が状況のせいで出来ない。てか俺の制服がヤバイことに……………。

「あ、ああ、よしよし。そうだなあ、あいつら鬼だなあ」

とりあえず頭を撫でて気を落ち着かせる……………と本に書いてあった気がするから実行。

俺が同意すると後ろの奴ら（とくにどっかのチート女）の殺気が凄いが、なんとかユイの気分を少しずつ落ち着かせることに成功した。

「ぜんぱい、ありがとうございますう」

ずずーっと俺の渡したハンカチで鼻をかんでいるユイ。

「とりあえず、落ち着いたか？」

「はい……………」

「なあ、もうコイツがボーカルでよくね？」

俺は振り返り、後ろで俺達を無視して話していたゆりっぺに訊く。

「いいわよ。実際その子しかボーカル候補いないし」

・・・・・・は？

ゆりっぺは視線だけ一瞥すると、すぐに話に戻った。

「・・・・・・ハアあああああああッ！？ ええええええええええ！？ 何！？ 今までのくだりなんだったん！？ 今までの俺の苦労は！？」

「どんまい」

「一言で済ますなアあああああああッ！！！！」

俺の時間を返しやがれっ！

「おい、お前から何か言っ

て

「やたーっ！ 私がボーカルだっ！！ さっそくひささんに報告してこよー！！」

ユイはすぐさま笑顔になり、そのまま校長室からダッシュで出ていった。

えー。

「さ、さっきまで泣いてたのに……」

さっきまでの俺は何だったんだろうか……。

心がさみい……。

荒んだ心の中からどうにか戻ってきた俺は、何やら話をしている仲間に近寄った。

なんか俺がユイを慰めている間に話が進んでいた。

これから始まる球技大会にゲリラ参加することになった。

それぞれでチームを作り、

「豪華商品とやらを手に入れるわよっ！」

・・・らしい。

ゆりっぺが腕を振り上げて宣言する。

その豪華商品がいったい何なのかは判っていないらしいが、ゆりっぺは手に入れることを前提に話を進めていく。

．．．．．やっぺ。

目が本気だよゆりっぺ．．．。

えーと、この前の罰ゲームなんだっただけ？ ギルド降下作戦の時は、

．．．．．そういや、実験台だったっけ。

本気でやらねえとやべええええええええええ！！

誰かと組んだほうがいいな・・・。

やっぱりこっちは、

「音無。俺と組もうぜっ！」

「ん？ 別にいいけど」

おっしゃー人目ゲットおおおおおッ！！！！

「でも、本気でやる必要があるのか？」

音無は周りの様子を見て首を傾げていた。

周りは罰ゲームと言われてからほぼ殺気だっている。

・・・音無はまだ入ったばかりだから知らないんだな。

「音無、ゆりっぺは本気だ。本気で負けたヤツには罰ゲームをするつもりなんだよ」

「罰ゲームって・・・そんなに酷いのか？」

「この前の俺の罰ゲームは

“技”の実験台だ」

「・・・・・・」

俺の言葉で音無が一瞬で青くなった。

以前のギルド降下作戦で、音無はゆりつぺの戦いを見たと言っていた。

多分その光景を思い出したのだろう、身体も震え始めた。

「わ、判った。俺も本気でやる」

音無は拳を握り締めて呟いた。

「ああ、期待してるぜ音無」

「だけどいいのか？ 俺あんまり球技得意じゃないぞ？」

音無が不安げに俺を見ていた。こりゃ、安心させてやんねえとダメだな・・・。

「構わねえさ。俺は、お前がいればそれでいい」

フッ、決まったな。

「・・・・・・・・コレなのか？」

すげードン引きされたよ……。

「そんなわけあるかつ！」

「でも、お前この前も似たようなことしてきたし……」

「ありゃゆりっぺがしろって言ったんだ」

「って言えって言われたのよねーあたし」

ってこらあ あああ！！ 横から会話に入ってくるんじゃないや
ねえ ゆりっぺ！！

「悪い日向……。俺は、ノーマルなんだ」

「俺がホモみたいに言うんじゃないやねえええええええ！」

「え？ 違うの？」

「ゆりっぺ！ 何不思議そうな顔してんだよっ！ お前一番俺と付き合い長いだろっ！！」

「それじゃみんな頑張つて！はい解散ッ！」

「流すなァあああああッ！！」

「それで、他に誰を誘うんだ？」

音無がようやく俺の近くに寄ってきた。

誰を誘ったもんか……。なるべく運動神経のいいヤツじゃないとな。

ここは、俺の腕の見せどころだな。

「まあ、安心しろよ音無」

俺は音無の肩に手を置く。

「“人望”で生きてきた男だぜ俺は。最高のチームを作ってやるさ」

「それただの“願望”じゃないか？」

ひゅっ……

「俺そこまで嫌われてないぜっ!？」

音無は未だに疑心に満ちた目で俺を射抜く。

俺、お前の親友じゃなかったっけ……。

「まあ、いいか。人選は任せる」

いつもの音無に戻った。

さっきまでのはなんだっただ……。

「・・・・・・・・行くか」

俺と音無は新たな仲間を捜すべく校長室をあとにした。

学生大食堂

「た、高松のチームに入っちったの？」

「うん」

ギターケースを背負ったひさは表情を変えことなく、頷いた。

初っぱなからつまづくことになっちまったよ……。

「早く他のヤツ探した方がいいよ。高松とか竹山が動くの結構早いみたいだから」

ひさは俺達に背を向け手を振り、階段を下りて食堂から出ていった。

「あー、あいつ運動神経いいから欲しかったのに……」

「“人望”はどこいった？」

音無が俺を呆れた目で見ていた。

そ、そんな目で俺を見るなッ！

「しょうがねえ、ちつと卑怯な気がするが、ここは松下五段を誘おう」

「もう他のチーム入ってると思うぞ？」

「大丈夫だ。あいつは待っていてくれる。……なんていうか、マブダチなんだ。て、照れるな」

「ほんとかよ………」

音無がじとーっとした目で見てくるが、俺はそれを無視して松下五段を探しに行った。

体育館 裏

「ああ、それなら竹山のチームに入ってたぞ」

「ハアあああああッ!？」

いろんなヤツから訊いて、ようやく探し当てた松下五段から出た言葉は否定だった。

俺達に答えた松下は、もう用はないだろう的な感じで木に巻いた帯を使って一本背負いの練習を始めた。

・・・って違う！

「な、なんで入っちゃったの！？」

「これから先、“肉うどん”が当たったらすべて俺にまわしてくれるっていうから」

「に、肉うどん・・・」

お、俺の友情は肉うどん以下・・・。

「こいつさっき、『マブダチなんだ、ははっ』的なこと言ってたぞ」

「ばらすなオオオオオオッ!」

俺の真似をしながらニヤニヤしている音無の胸ぐらを掴むが、その場で音無がニヤつくのを止めることが出来なかった。

とほほ・・・。。

学習棟A棟 一階

「今度は誰に振られるんだ？」

「振られるの前提で動いてるわけじゃねえよ!？」

最近音無がなんか冷たい気がする・・・。。

「とりあえず、TKだ、TK」

俺達はTKを探して、学習棟の方にまでやってきた。

「そつえばなんでTKっていうんだ？」

「本人がそう名乗ったんだよ。それ以外何も判らない男だ」

「いつも英語だけど、ホントに外人なのか？」

「いや、あいつ英語喋れないぞ」

「は？」

「喋れないんだよ、英語。あいつがいつも言ってるって、なんかの歌の歌詞だし」

「い、意味不明だな……………」

音無は呆れた表情で俺のあとをついてくる。

そんな意味不明の男だが運動神経はいいから十分に戦力になるはずだからな…………。

TKがこの近くでブレイクダンスをしているという情報があったので俺達は廊下の角を曲がる。

すると、廊下のだ真ん中で高松と握手しているTKを見つけた。

マ、マジかよ…………。

「すごいな日向。振られる前に振られたぞ」

「くっそおおおおおッ!!」

教員棟 裏

「そつえば種目はなんだ？ 聞いてないが・・・」

「野球だよ、野球」

そつ・・・よりにもよってな。

「てことはあと七人か。……………終わっ たな」

「ぐう！！」

音無の言葉が俺の胸に突き刺さる。

他に誘ってないヤツに目星はあるが、あくまでもう一人ぐらいは探しておかないとチームが出来ずに終わってしまう。

「ど、どっにかして探さないと……………」

「お困りのようですね!」

ん? 誰だ?

声の方を向くと、壁を背にして腕を組んだままこちらを見て不敵な笑みを浮かべているユイがいた。

……何してんだ? こんなところで。

「どーした?」

「ひなっち先輩と音無先輩がメンバーを探しているみたいですから、私が入りますよ！　メンバー足りてないんでしょ？」

ひ、ひなっちって……。何故俺だけあだ名に……………。

それにユイがメンバー？　明らかに運動神経よくない気がするんだが……。

「お前野球出来んのか？」

「やったことすらありませんっ！」

「やいならー」

俺達はユイをこの場に残して去ろうと、

「っ
て待てやこらアあああッ！！」

「ぐほオおおおおッ！？」

俺はユイに後頭部を蹴っ飛ばされ、顔面を地面にぶつけた。

痛てえええええええ！！

「な、なにしゃがんだ…………ッ！」

「私をほっというて行くんじゃない！　メンバーになるって言っただけじゃないですか！」

「だってお前野球したことないって」

「“根性”でなんとかあります！！」

「ならねえよ！？　なったら男の半分は野球選手になっとるわ！」

「むう！！」

ユイは頬を膨らませて俺を睨む。

別に睨まれても怖くねえし……。どっちかっていうと可愛い……。って何考えてんだ俺？

俺は変な考えを頭を振って掻き消す。

「でも、このままだとチーム出来なくて罰ゲームだぞ？」

音無はポケットに手を入れたまま、俺の隣にやってくる。

さっきまで傍観してたくせに何言ってる……。まあ罰ゲームは嫌だけだよ。

「でもよつ音無。一般生徒に負けたら結局罰ゲームなんだぜ？」

「いや、さっきの蹴りは凄まじい威力だったぞ。運動神経はいい方じゃないか？」

マジか！？ だからこんなに痛てえのか……………。

「そうそう。私結構運動神経いいですよ？ それに、後ろからずっと見てましたよ？ どうせ全然メンバー足りてないんですから、この“ユイにゃん”が加勢しにきたわけですよっ！」

一転して満面の笑みでこちらを見るユイ。どうやって動かしているか判らないが、アホ毛と悪魔の尻尾が連動して動いている。

あ？ “ずっと”？ それじゃストーカーじゃねえか……………。

それになんて言った今・・・。

「・・・・・・・・もう一边言ってみろ」

「ユイ・にゃん」

「そついうの嫌いなんだよおおおおッ!」

「ぎゃああああ! 割れる割れる割れるつつつうう!」

くそっ! 可愛いと思っちまったのが余計にムカつく

ッ!!

俺はユイにアイアンクローをかけながら、さっきのユイを忘れるように頭を何度も振る。

音無はそれを呆れたように見ている。

「遊んでないで次いくぞ」

「「遊んでいるように見えるかアあああああッ!!」」

俺とユイの言葉がハモった。

「仲いいお前ら」

体育館 倉庫

俺と音無。 + ユイは、ある人物を探して倉庫の中に入った。

「ほんとにこんな所にいるんですか？」

ユイは手をかざしながら辺りを見回す。

あたりには跳び箱やらカラーコーンやらが乱雑に置かれており、やはり埃っぽかった。

俺も中に入ると、何かを蹴っ飛ばしてしまった。

それは、犬の人形。

いるな………。

「おい、椎名っち。いるんだろー」

「………なんだ？」

声がした方を見ると、半身だけ覗かせた椎名がこちらを見ていた。

「ほんとにいたよ・・・」

呆れたようにユイが椎名を見る。

「椎名っち！ お前運動神経凄いだろ？ 野球しようぜ！」

「・・・・・・・・」

俺の言葉に無言で通すと、椎名は目を瞑って何かを思い出すような表情になった。

「あの日、その新入りに遅れを取ってしまったことを、ここでずっと考えていた」

新入り………音無のことだな。てことはGuild降下作戦のことか……。

「なんでここで、んなこと考えてるんですか………ああ、アホですか」

ユイは余計に呆れたように呟く。

「あれは運がよかったただけだ」

音無は訂正するが、だがそれを無視して椎名は続ける。

「すべてにおいて、私はお前をはるかに凌いでいたはずだ」

「だろうな」

「唯一つ劣っていたとすれば……それは集中力」

「いやいや、それもお前の方が上だろ」

「だから私は、あの日から……指先の一点で竹箒を支え続けていますッ!」

全身を現した椎名は、本当に指一本で竹箒を支えていた。傾いたりなどせずまっすぐに・・・。

・・・やっぱりコイツもアホだッ！！

「・・・・・・・・・・やっぱりアホですね」

俺の耳許でユイが囁く。

そんなの前から判ってんよ・・・。

「・・・アホだが戦力になんだよ」

「このままだと、アホばかりになりますよ?」

「お前もそのアホの一人だって判ってんのか?」

「なんだとゴラアあああッ!」

「いつてえええええええ!!」

ユイが俺の背中を殴りつける。

超痛てえ! あざになっちまうよ・・・。。

俺は背中痛みを堪えながら、次々と拳を繰り出してくるユイの頭を抑えつける。

やっぱ、髪柔らかいな。

頭を抑えながら、頭を撫でてみる。

「（あ、頭撫でられてる……）ひ、卑怯ですよひなっち先輩！ これじゃ攻撃出来ません！」

「するなつての！」

何故か判らないが赤くなっているユイの頭を抑えながら、どうやって椎名を仲間にいれるか考える。

「おい、いつまでやってるんだ？ 次行こうぜ」

あ．．．．．？

隣を見ると、いつのまにか竹箒を支えたままの椎名がいた。

どうやら音無が仲間にしたようだ。いったい何言って仲間にしたんだろうか……。

まあ、とりあえず、椎名ゲットだぜ

ッ!!

第二連絡橋下 河原

「ひえ
いいいいいいいい!!」

そこでは奇声が響いていた。

河原でハルバートを振り回す、上半身裸の男。

言わずとも判ると思うが、野田だ。

「またアホをメンバーに入れるんですか？」

ユイは野田を害虫を見るように嫌悪感をあらわにして俺に言う。

「しょうがねえだろ。アホのが利用しやすいんだよ」

俺はユイに答えると、野田の前に姿を現した。それに続いてユイ達も俺のあとに続く。

「ついに来たか……。決着の時が！」

野田がハルバートを音無へと向ける。

その切っ先を見つめる音無はどこかめんどくさそうだった。

だが、ここで戦わせるわけにはいかない。こいつを仲間にいれなくては……。。

「まあ待て。まずはお前と音無。どちらの運動神経がいいか試させ

てもらおう!」

引き合いにだされた音無は俺を睨むが、今はそんなこと気にしていられない。

「何故そんなことをしなくてはいけない?」

ハルバートを音無から俺へと向ける野田。

汗が頬を伝う。

だが、俺には切り札があるぜ……。

「強いだけじゃ、ゆりっぺは振り向かないぜ？」

「・・・・・・・・フッ」

野田は口角を吊り上げると、ハルバートを下ろした。

「やってやるっ！」

そういつて握手を求める野田の手を俺は力強く握った。

おし、野田ゲットッ！！

「アホだ。自分が利用されていることに気づいてすらいない」

ユイが呆れてため息をつく。

ため息つくと幸せが逃げてくんだぜ。

学習棟A棟 屋上

あれから何人か戦線メンバーを誘ったが、皆他のチームに入ってい

た。

「ほとんどのやつが他のチームに取られてるが、どうするんだ？五人でやるのか？」

音無が眩しそうに手をかざしている。

だが、五人で野球が出来るかッ！！

「なあ、音無。俺達に足りないものはなんだ？」

「・・・・・・・・さあ？」

「判らないみたいだな．．．．．。なら俺が教えてやろう。それは、残りのメンバーと、試合会場とグローブ、バット、ボールはあるからいいとして

結局残りのメンバーだよッ！！！」

「最初から残りのメンバーだけでよかったんじゃない？」とユイ。

「日向なりに意味があったんじゃないか？ さっしてやろうぜ」と音無。

「意味なんてねえよ！ ごめんなさいでしたー！！」

「アホですね」

「アホだな」

「浅はかなり」

「脳みそ足りてないんじゃないか？」

の、野田にアホって言われた……。

でもそれより音無の言葉がすげー痛い。

「の、脳みそ……。」

俺は思わず膝をついて、顔を伏せた。

やべ、泣きそう……。。

すると、ユイが近付いてきてしゃがむと、俺の頭を撫で始めた。

「親友の言葉が胸にグサァー！　っと突き刺さったんですね。私が慰めてあげます！（…………先輩の髪やわらか〜）」

こ、コイツ俺を慰めてくれてる

ッ！！

違う意味で泣きそうになった。

今まで俺をこんなに心配してくれるヤツはいなかった……。

「お前……いいヤツだな」

「そうですよ！ 私は先輩の味方ですから！（ちゃんす）」

顔を上げると、笑顔で俺を見つめるユイ。

その笑顔を見ると、少しだけ……鼓動が速くなった気がした。

「やっぱり仲いいな、お前ら」

呆れながら俺達を見ている音無に、俺は気付かなかった。

学習棟C棟 廊下

ユイの友達だという三人のもとに行った俺達を持っていたのはミイハー女だけだった。

やべーよ。これはもう負けるかもしれねえ・・・。

「どうする日向。それでも八人だぞ？」

「・・・・・・・・一般生徒でまかなうか」

俺は音無に答えるが、同時にため息をついた。

もう戦線メンバーは無理だ。入れるとしても一般生徒しかない。

・・・・・・罰ゲーム決定か？

身体がブルリと震える。

一瞬笑顔で刀を向けるゆりっぺを思い出してしまった。

「ひなっち先輩」

顔を上げると、ユイがこちらを見ていた。

「ん？　なんだ？」

「もう一人だけ、お願いすれば入ってくれそうな人がいるんですけど・・・・・・・・」

「何！？ いるのか!？」

「ま、まあ、友達なんで・・・・・・・・頼めば入ってくれると思うんですけど」

そう言いながら俺から目を反らして頬をかくユイ。

若干汗を流している気がするが、この際入ってくれるヤツがいるなら誰でもいい！

「じゃあそいつのところに連れてってくれ!」

「えーと、ちょっと待ってください（んー、大丈夫かな？）」

ユイはスカートのポケットから携帯電話を取り出すと、その友達にメールを送ったようだ。

その数分後、ユイの携帯からガルデモの歌が流れる。

ユイは携帯を開くと、画面を見つめる。

「学習棟B棟の屋上にいるらしいです」

「おし、じゃあ行くか！」

俺達は最後の一人に会いに行くために、B棟の屋上へと向かった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第11話 俺って仲間集める才能ねえのかな・・・。（後書き）

どう、酷かったでしょ？

自分でも読んでみたけど、酷いカオス。

イチャイチャとか難しくてわかんねえや。

それでも読んでくれた人、ありがとうございます！

次回はもちろん奏ちゃんが動きます。

更新頑張ります。感想とかもらえると、もっと努力するかも？

では、これにて。

第12話 二人の世界に、私置いてきぼり……………（前書き）

小説を書く暇がない……。

待っていてくれた人達にはもうしわけない。

駄文です。すいません。

キャラ崩壊は、この小説に常備です。

そしてサブタイトルに意味はありません。

それでは、12話はじまり。

第12話 二人の世界に、私置いてきぼり……

学習棟 B棟 屋上

太陽がキラキラと照りつけるなか、屋上には一人の少女がいた。

真っ白な野球帽からは銀色の髪が流れ、ブレザーの上から羽織ったエンジ色のジャージの袖が風に旗めいている。

少女は胸の前で腕を組み、その感情の见えない金色の瞳で眼下に広がる球技大会会場を見下ろしていた。

立華 奏

それが少女の名前だった

「……………暑い」

……………あ、どうも。生徒会長権限をほぼ剥奪された立華 奏です。

あれ？　なんでだろ。　目から水が溢れ出るよ……………。

涙じゃないよ？。汗だから…。

やっぱり、ブレザーの上からジャージを着るのは自殺行為だったか
もしれない……………。

ものすごく暑い……。汗が頬を伝ってくる。

本当は、野球帽もジャージも着るつもりはなかったのだけど……。

開会式を行うというときに、直井君が『こっちの方がカッコいいで
すよ会長！』と言うから着てみたのだった。

着た直後、『腕を組んでこっちを見てください』と直井君が言うのでいつも通り見上げると、鼻血を噴き出しながら倒れてしまったが……。

彼は、疲れているのかもしれない……………。

仕事量を減らしてあげた方がいいと思う。

鼻血を噴くほど頑張っているのだから……………。

というわけで、直井君を保健室に運んでから開会式を行ったが、特に言うこともなかったの一言『頑張っ……………』と言った。

直井君と同じように鼻血を噴出しながら倒れる男子生徒が続出した
.....。

みんな“日射病”には気を付けないと.....。

半数の男子生徒が“日射病”で倒れた以外は予定通りに開会式も終わり、参加チームを作って登録が完了したら試合開始となる。

先にチームを作った方がいい気もするんだけど、それがこの方針らしい.....。

開会式が終わると、私はすることがなくなってしまったので屋上まで来て試合会場を眺めていようと思った。

太陽に近くとても暑いところは誤算だったけど……………。

それから30分後ぐらい……………。

突如スカートのポケットに入れていた携帯電話が震え始めた。

いきなり震えるとびっくりするよね……………。

携帯を開くと、メールが一件。

誰だろうと思ってメールを見るとユイちゃんだった。

内容は、

『今どこにいますか？』

という一文。

私は、屋上にいるとメールを送り、再びポケットの中に携帯を閉めた。

どうしたのかな？ ユイちゃん。

私はそう思いながら、フェンス越しから試合会場を眺めた。

「頼む立華！ チームに入ってくれ！！」

「お願いします！」

目の前には、頭を下げる日向君と、両手を合わせて同じように頭を下げるユイちゃんがいた。

……どうしてこうなったんだっけ？

数分前

試合会場を眺めていた私は、突如蹴破られた屋上の扉の方へ視線を向けた。

そこには、ユイちゃんに「何やってんじゃゴラァ!」と言われながら背中を蹴られた野田君が屋上の床に転がっていた。

そこから音無君、日向君、椎名さんが後から出てきた。

……あれ？ 戦闘勃発？

先頭にいた日向君が、私を見ると大袈裟に驚いたが、すぐに思案げな表情になった。

音無君は私を見た瞬間硬直して、汗をだらだらと流している。

椎名さんは……なぜか竹箒を指で支えて構えていた。

なーんか椎名さんを見ると、いつもしゅーるな気がする。

私は一応すぐに“がーどすぎる”を使えるようにしながら身体をSSの皆に向けた。

すると、野田君の背中を踏みつけていたユイちゃんが、私を見つけると笑顔で寄ってきた。

……………わんこみたいで和む。

「奏さん奏さん、こんにちは！」

「こんにちは、ユイちゃん」

笑顔で悪魔の尻尾千切れんばかりに振るユイちゃんは、やはりわんこのように見える。

「じ、実は、お願いがあつて来たんです！」

急に真剣になったユイちゃんは私の手を掴んで握る。

ん？ なんだろ……………。

ユイちゃんは私の手を引いて、離れていた皆のところへと向かう。

椎名さんが今にも飛び掛かってきそうですごく怖い……………。

「ユイ……………」

先頭にいる日向君がいつもより声を低くしてユイちゃんを見る。

いつになく真剣な表情だ。

「はい、先輩！」

ユイちゃんも“真剣に”敬礼して日向君の言葉を待った。

.....前も思ったけど、なぜ敬礼.....。

「お前が言ってた友達っていうのは“天使”か？」

「違いますっ！ 友達の“立華 奏”さんです！」

「.....」

ユイちゃんの言葉に目を閉じた日向君は、数秒後ガツと目を開けると、ユイちゃんの肩を掴んで叫んだ。

「よくやったユイ！」

「はい！」

二人とも笑顔で笑い合っている。

二人が仲が良さそうなのは、見ていて嬉しいけど……………。

あのさ、私を置いて話を進めないで……………。

は、

話が見えないよ……………。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第12話 二人の世界に、私置いてきぼり……………（後書き）

意図せず直井が変態になってしまった……………。

というわけで、このデーゲームが終わったら外伝書きます。

直井の……………。

直井ファンはすんません。うちの直井は“変態”です。

ようやく夏休みが近付いてきました。更新頑張りますのでよろしく
お願いいたします。

お気に入り件数がいつのまにか50件になっていました。

ありがとう。神よ……………。

では、いかにして。

第13話 まーぼー>>>越えられない壁>こんにゃくにゃんこ>>生徒かい

夏休みになったというのに、追試やらなんやらでまた大学の方へと
いくはめにッ!!

そしてこの文章量と文才のなささ!!

すいません! 駄文です。

そして、キャラ崩壊。

それでは13話、始まり。

第13話 まーぼー>>>越えられない壁>こんにゃくにゃんこ>>生徒かい

学習棟 B棟 屋上

「立華には俺達のチームに入って欲しいんだ！」

二人だけの世界からようやく帰ってきた日向君とユイちゃん。

話によると、球技大会に出たいのだけど、一人足りなくて私に白羽の矢がたつたみたい……………。

ユイちゃんの推薦みただけど……………乗り気なのは日向君だけだ。

ユイちゃんが必死に説得しているようだが、あまりいい反応を得られていない。

椎名さんは、箒を支えながら首を縦には振らず、野田君は未だに地面にうつ伏せで倒れていた。

ユイちゃんのキックがピンポイントで決まったらしく、気絶しているようだ。

音無君は、ユイちゃんの話聞きながらチラチラと私の方を見て、私と目が合うとすぐに視線を反らせた。

やっぱり嫌われてるみたい……………。

……………というか、入るの前提で話が進んでいるんだけど、まだ入るとは一言も言っていないよ？

「……………日向君」

「おう。なんだ？」

「チーム登録は？」

「……………」

私に向けた笑顔のまま固まり、そのまま汗をダラダラと流しながら
目を反らす日向君。

……やっぱり登録しないで参加するつもりなんだ。

前にもSSSの人達が登録をしないで参加するということがあった。

……演劇に。

劇は、『ヘンゼルとグレーテル』だった。

………なのに、気付いたら兄妹でお菓子の家を賭けての戦争にな
ってた。

そのせいで本来の劇がメチャクチャになってしまったりした。

「私、生徒かいちよーなんだけど……………」

「そこをなんとか！ 哀れな俺を助けると思ってた！」

手を合わせて頭を下げる日向君。

自分で衰れって……………。

「ホントこの衰れなひなっち先輩にご慈悲をつ！」

「うーっ！？」

いつのまにか日向君の隣に来たユイちゃんが、日向君の頭をガシガシと抑えつける。

日向君の首がゴキツと音を鳴らす、ユイちゃんはそれを無視した。

そのユイちゃんの隣には頭をかきながら私を見る音無君。

「あ、あのさ……………立華、でいいんだよね？」

音無君は少しどもりながら私を見る。

「うん……………」

「ご、ごめんな。こんな時だけ頼って……………。俺達いつもお前のこと銃で撃ったりしてるのに……………」

……………おおー。すごい、初めてそのことに触れられたよ。

「……………いいの。あなた達の理由も判ってるから」

自分なりに笑顔を作って音無君を見た。いつも無表情でいるからちやんと出来ているかは判らないけど……………。

「……………ッ!？」

音無君は何かに驚いたように片手で口を押さえたと思ったら、急に顔が真っ赤になって私から顔を背けた。

あれ？……………怒った？

音無君は顔を赤くしたまま背を向けて私から離れる。

「い、いまの不意討ちはヤバい……」と音無君が呟いているが、私にはよく判らなかつた。

「にぎや あああッ！ 折れる折れる折れるうううううううう……！」

今度は何事、かと思つたら日向君が凄みのある表情でユイちゃんに間接技を極めていた。

「俺は先輩なんだよおおおおッ！！ もうちょい加減しやがれエえええええッ……！」

「そついうあんたも加減しろやアああああッ！！ あああ、ホ

ントに痛い痛い痛い！！」

ユイちゃんの瞳が痛みで潤んできたのを見て、すぐに解放する日向君。

そしてその隙をついてユイちゃんが日向君の後頭部に飛び回し蹴りを放った。

「うはっ！？」

「あっはっはー！ このユイにゃんに勝とうなんて一万年早い！」

「それは距離だバカ！」

「バカって言うなアああッ！」

周りを置いてきぼりにして、二人は取っ組み合いを始める。

音無君は未だブツブツと言っているし、野田君は気絶中。

椎名さんはいつの間にか日陰で箒を指で支えながら目を閉じている。

……もう帰ってもいいかな、私。

ユイちゃんと日向君は取っ組み合いから頼っぺたを引っ張る戦いになっていた。

これは……………うん、アレだ。

「ケンカするほど仲が」

「「良くないッ!」」

……………まだ言っていないよ。

「ハモったし、やっぱり仲が」

「だから良くないッ!!」

そんな二人して顔を真っ赤にしながらかわられても反応に困るよ……。

「ゴホンッ！ ユ、ユイ、今は勧誘だ」

「そ、そうですね！ 奏さんをチームに入れなくては！」

二人は仕切り直そうとするが、顔から朱が抜けていないから何とも言い難い空気になっている。

そこに空気を変えるように音無君が近寄ってくる。

「日向。立華に早く許可取らないと試合始まるぞ?」

「お、おう。立華頼む、チームに入ってくれ!」

三再び頭を下げる日向君。

でも、私まだ生徒かいちよーの権限はあるからルール違反は

「学食の麻婆豆腐奢っから！」

「やるわ」

「「即答!?!」」

音無君とユイちゃんが驚愕の表情で私を凝視する。

………なけなしの生徒かいちよー権限より、まーぼーの方が大事なの。

「た、立華は麻婆豆腐……好きなのか？」

音無君は恐る恐る私に尋ねる。

んー、好き？

「うん………大好き」

「　　ッ！？　そ、そうか。麻婆豆腐好きなのか（ま、麻婆豆腐か…………俺作れるな）」

音無君は何故か顔を赤くしながら、カッコいい笑顔で私を見た。

きゅん

..... お腹減った。

「じゃあ立華！ 俺のチームに入ってくれるんだな！？」

日向君が最終確認を私に取る。

まあ、いいよね。もうすぐ生徒がいちよーじゃなくなっちゃうし.....。

「うん、入るわ」

私が答えると、日向君は感極まったのか、近くにいたユイちゃんを抱き締めて笑顔で叫ぶ。

「おっしやあああああッ！！　これなら勝てるかもしれない！！」

「……………（ぼふんっ）」

日向君の腕の中ではユイちゃんが身を締め込ませて頭から湯気を出していた。

顔が真っ赤つかだ……………。

それに日向君はまったく気付いてない。

音無君は日向君を呆れて見ていた。

私もちょっと呆れ気味だけど、日向君の腕の中にいるユイちゃんが
少し幸せそうだから……………まあ、いいや。

それにしても、このチームの協調性の無さ……………。

勝てる気がしない。

大丈夫なんだろうか……………。

まあ、今はとりあえず、

「お腹減ったなあ……………」

t o b e c o n t i n u e d

第13話 まーぼー>>>越えられない壁>こんじゃくじゃんこ>>生徒かい

読んでくれた方ありがとうございます。

皆さんは夏休み楽しんでますか？

自分は単位落としたので再試ですよこんちくしょう!!

今回は奏をチームに入れてしまいました。

原作崩壊にもほどがありますね。

まあ元からなんですけど。

今回は、音無に奏ちゃんの魅力に気付かせるのと、日向とユイの絡みがメインになっています。

何故だアああああッ！　なんか考えてたのと違う！！

では、また次回………と言いたいですが、予告でもしてみよう。

下手くそなんで見たくない方はここでバグ。

音無「この野郎ッ！」

野田「舐めるなアああ！」

ユイ「アホですね」

奏「この一球……」

直井「何をしてるの？ 会長」

日向「ひゃ、ひゃくじゅっきろ……。はは、漫画の世界だ」

ユイ「いつけー！ 奏さん！ー」

音無「おい日向ダメだ……。取るなアああああー！」

奏「これを取れば……。日向君が」

日向「超いらねええええええええええええええええッ！ー！」

あくまで予告は予定です。こうなるかは解りませんが、更新速く出来るように頑張ります！

では、これにて。

第14話 遊佐ちゃんはきっと私が嫌いなんだ……。好かれる理由もない

レモン

「せっかくこの前の後書きに予告書いたっていうのに、話が長くなつたせいで纏めきれなくて無理だった!」

奏ちゃん

「……………駄作者」

レモン

「ぐはっ!てかなんでここに」

奏ちゃん

「作者がダメすぎるから私も出ることにします」

レモン

「……………」

奏ちゃん

「こほん。この小説には“キャラ崩壊”が常備です。よく確認してね?」

レモン

「あ、つと、後書きにちつとアンケートがあります。出来れば見てください」

奏ちゃん

「それでは、14話始まり……………」

第14話 遊佐ちゃんはきっと私が嫌いなんだ……。好かれる理由もない

「それで、何故“天使”がチームにいるんですか？」

「う、いやーなんというか……」

私達の目の前には、サラサラと流れる金髪をツインテールにしている女の子。

「何故ですか？」

じとーっとした目で日向君を見る、SSSのオペレーターである遊佐ちゃんがそこにいた……。

試合会場 前

先に日向君にまーばーを驕ってもらった私は、満腹感に満たされながら会場の前にやってきた。

「ぐうつうつ、金が、金があああああ」

「御愁傷様ですひなっち先輩。制限付けなかったのが間違いでしたね……………」

私の後ろでは財布を上下に振っては落ち込む日向君と、それを慰めるユイちゃんがいた。

さすがに10皿は食べ過ぎたかな……………。

「すごいな立華。辛くなかったのか？」

私の隣では、一緒にまーぼーを食べた音無君が、あとから買った冷たいお茶を飲んでいる（三本目）

未だに舌がヒリヒリするらしい……………。

そんなに辛かったかな？

「別に辛くはないわ」

「やっぱりすごえ……………」

その声は、感心八割・呆れ二割な感じで聞こえた。

……………やっぱり食べ過ぎたかも。

少しだけまーぼーの食べ過ぎを止める決意を心に決めた私。

「そういえば、日向。ポジションとか打席は？」

歩きながら音無君が振り向く。

その声で我に返った日向君がユイちゃんを連れて近寄ってきた。

「そうだったぜ！ ポジションとか決めねえとな！ もうすぐ試合
」

「確かに試合間近ですが、その前に確認があります」

「「「
ツ!?!」「」」

突如鈴の音のような女の子の音が、日向君の言葉を遮った。

みんなで辺りを見回すが、チームのメンバー以外はこの場所にはいなかった。

だが、声はチームのメンバーのものではない。

すると、近くの生け垣がガサゴソと音を立て、みんなの視線が生け垣へと集中した。

そこから出てきたのは、金髪のツインテール。

次にじとーっとした目。明らかに日向君を見ている。

遊佐ちゃんだった。

「なんてそこから出てきてんですか……………」

ユイちゃんが呆れて遊佐ちゃんを見る。

「調査とは誰にも見られずに隠れて行っただと、
“ゆりっぺさんが”言っていました」

変なところで真面目な遊佐ちゃんだった。

そして、強調する“ゆりっぺさん”の部分。まるで自分の意志でやっている訳じゃないと言わんばかりに……………。

同じ無表情だから、ちよつと判る。

……………実は楽しんでるよね、遊佐ちゃん。

遊佐ちゃんは頭やセーラー服に着いた葉っぱを手で払いながら生け垣から出てくる。

「私はチームの確認、そしてゆりっぺさんに報告する役になります。
が」

そこで一度言葉を切った遊佐ちゃんは、私に視線を向け、再び日向君へと向ける。

「日向さん。何故チームに“天使”が？」

そして、前へと戻ります……………。

「とりあえず……………理由が無いということは判りました」

遊佐ちゃんはそういつと日向君から離れる。

日向君はというと、遊佐ちゃんの無言の追及で真っ白に燃え尽きてしまった。

「うわー、真っ白だ」

真っ白になっている日向君をユイちゃんが木の棒で突っついて遊んでいる。

ちよつと可哀想だけど、七割は自業自得な気がしなくもない……。
…。

「こちら遊佐。日向チームに接触。一部疑問点が浮上しましたが、確認は完了しました」

何故か私の隣に来た遊佐ちゃんは、インカムのマイクに向かって話す。

きつとゆりっぺさんと連絡を取っているんだろう。その証拠にインカムから『何よ疑問点って?』というゆりっぺさんの声が聞こえてきた。

「チームに“天使”が入っています」

瞬間遊佐ちゃんがインカムを外して私の方へ放り投げてきた。

慌てて私がそれを取るが、遊佐ちゃんは手で耳を閉じて私の隣から急に離れた。

いつたいなに

『はアあああああああああああああああああああああああ
あッ!?!』

ッ!?! み、耳が……。耳キーンって、い、痛い。

インカムからゆりっぺさんの声が超大音量で放たれた。

耳がおかしくなったように、キーンとして何も聞こえなくなる。

思わず涙が出そうになる……………。

そして、遊佐ちゃんがまるで何事もなかったかのように私の手にあったインカムを装備し直した。

……………ひ、酷すぎる。

泣きそうになったが、誰かの手が私の頭に置かれた。

見上げると音無君が遊佐ちゃんの方を見て苦笑していた。そして視線を私の方へと向ける。

「……………災難だったな、立華。わ、悪気は……………あつたかもしれないが」

……………そこは嘘でもいいからなかったって言って欲しかったよ。

さらに落ち込んだ私を気遣うように頭を撫でる音無君。

お？　こゝこれはなかなか……。

この世界に来てから、頭を撫でられることなんてなかった。

頭を撃ち抜かれたことはあったけど……。

生前から頭を撫でられるのが好きだった私にはこの気持ち良さは癖になりそうだ。

「……………（何も言わないな。撫で続けていいのか？　にしても……………髪がサラサラだ）」

音無君は無言で撫で続けてくれている。表情を見ても嫌そうではないので、このまま撫でてもらう。

ほんわか。

いっぱい音無君に頭を撫でてもらった私。

気が付いたら日向君が、インカムに向かって“土下座”している光景が目に入った。

………なんで？

『日向君。アンタは問答無用で実験台よ！』

「勘弁してくれよオオオオオオオオオオ！！」

………実験台？

地面に置いたインカムを遊佐ちゃんが装備する。

日向君は土下座したまま泣いていた………。

「ちなみに、負けたら実験台＋罰ゲームだそうです」

遊佐ちゃんは追い討ちをかけると私達から背を向けた。

「まあ、負けないよう頑張ってください」

そう呟くと、先ほど出てきた生け垣の中に戻っていった。

「なんで生け垣に戻るんですか……………」

ユイちゃんの呆れた眩きに応えるものはいなかった。

「うぉおおおおおお」

「ええい！　いつまで泣いてんですか、ひなっち先輩ッ！！」

ユイちゃんは、土下座状態で泣いていた日向君の脇腹を蹴りあげて地面に転がす。

「ぐほおおおお！？」

脇腹を押さえて、痛みで地面をのたうち回る日向君。

……ちよつと可哀想。

「シャキつとしてくださいよ！　きつと優勝すればゆりっぺさんなら赦してくれますよ！-！」

「そ、そうか？」

「はい！　豪華商品ですよ？　きつと赦してくれます！」

「そ、そつだよな！？　豪華商品だもんな？　オツシヤアあああああッ！　やるか！」

「おーっ-！」

立ち直った日向君と笑顔のユイちゃんが両手を上げて叫ぶ。

………豪華商品そんなに嬉しいんだ。吟味して選んだかいがあったー。

復活した日向君とユイちゃんを先頭に、私達は試合会場へと向かった。

「とりあえず、打席とポジションを決めるぜ！」

手のひらに拳を打ち付けて張り切る日向君。

「まず、一番・音無！」

「俺が一番かよ……………」

音無君は肩を落として呟く。

「ポジションは交代でピッチャーとサードな」

「ピッチャーッ!？」

音無君は勢いよく日向君の方を向いた。その顔は驚愕という文字を張り付けたような表情だった。

「俺ピッチャーなんかしたことないぞ!？」

「大丈夫だって音無! 今聞いたろ? 交代でだって」

……………返答が間違ってる気がする。

「サードだつて難しい気がするの俺だけか?」と、何とも言えない表情で頭をかきながら元の位置に戻る音無君。

私も難しいと思います……。

「俺はッ!？」

今まで沈黙を保ち、私を睨み続けてきた野田君が音無君を押し退ける。

鬼気迫る表情とは、こんな感じ？

そして、日向君は野田君の殺気を軽く流して、彼の肩を叩く。

「まあ待て、野田。お前にはちゃんとした位置がある。………
番目立つ、立ち位置がな」

「……………ふんッ」

日向君の言葉に納得いったのか、野田君は満足げに鼻を鳴らすと、ハルバートで地面に何か絵を描き始めた。

………恐竜の絵？　野田君もまだまだ子供っぽいところもあるみたい。

「二番は椎名！　思いっきり墨に出てくれ！　ポジションはショートなっ。」

「……………私か」

日向君の言葉に小さく応える椎名さん。

未だに箒を指で支え続けている。

……支えたまま、試合やるのかな？

「無論だ」

「……………ッ!？」

な、直井君に続いて椎名さんまで心を読めるなんて……………。

……………どこかで読心術を教えている所があるのかな？

「インターネット講座だ」

「……………」

も、もう驚かないもん。

あとでそのサイトに爆発するウイルス送っちゃえ……………。

「んで、三番が俺。セカンド」

日向君が親指で自分を指す。

「それで四番が野田……………お前だっ！全員ホームに帰してくれよ！」

「フッ……………やってやろう!」

野田君は不敵に口角を上げると、片手でハルバートを振り回し始める。

……………つてふええ!?! は、鼻先を掠めてきたよっ!?!

「おい野田! 危ないからハルバート振り回すな!」

音無君の方も危なかったらしく、ハルバートを避けるために上体を後ろに反らした状態で野田君を睨み付けていた。

「ポジションはキャッチャーな」

「俺がコイツの球を受けなくてはいけないのか!？」

野田君はハルバートの切っ先を音無君へと向け殺気立つ。

「しょうがねえだろ？ 受けられるのお前しかいないんだよ」

「だからってなァ！」

「勝たなきゃゆりっぺは振り向いてくれないんだぜ？」

「……………チッ！」

盛大に舌打ちして、野田君は渋々引き下がった。

……………野田君ってゆりっぺさんのこと好きなのかな？

「んで、五番がユイ。その足で一人で塁回っちゃってもいいぜ？
ポジションはファーストだ」

「私の俊足が火を吹きますよ！」

準備運動をするように高くジャンプするユイちゃん。

確かに足が速そうだ。

「で立華。お前が六番だ。ユイをホームに返してやってくれ」

「うん……………」

六番か……………。大丈夫かな。

「ポジションは音無と交代でやってくれ」

「……………」

び、ピッチャーとサード……………。私に出来るかなあ？

「あのゆりつぺとタイマン張れるもんな！ 頼むぜ立華！！」

日向君は笑顔で私の肩を叩く。

……あれは能力使ってるから出来るんだけど。

……がんばろ。

ユイちゃんのファン(?)の三人が外野に決まって、これでポジションも打席も決まった。

「おし！ 目指すは優勝ただ一つだ！！ 気張ってこっぜッー！！」

「応ー！！ ユイにゃん頑張るぞー！！」

「まあ、やるからにはやれるところまでな」

「フッ……………粉微塵にしてやる」

「浅はか……………では無いか」

「おー」

上から、拳を振り上げて宣言する日向君。

その背後から日向君に抱き着くように背に乗るユイちゃん。

手にしたボールを天高く放り投げて横から弾くようにキャッチする
音無君。

肩に乗せたハルバートを片手で垂直に地面に振り下ろして突き刺す
野田君。

支える筈を揺らすことなく、首に巻いた漆黒の襟巻きで口元を覆う
椎名さん。

最後に私……。風に吹かれるジャージをはためかせながら、帽
子を小さく被り直す。

なんだか……………勝てる気がした。

外野が少しがら空きな気もするが、このメンバーだったら内野を抜かれることすら少ないだろう。

ゲリラ参加なのが、少し気がかりだけど……………それでも優勝目指して頑張ることは、いいことだと思う。

なにより……………楽しそうだ。

SSSの人と一緒に何かをすることなんて、今までなかった。

そして、多分……………これからも。

今日の1日だけ……………私も仲間なんだ。

「奏さん！　行きましょう！！」

ユイちゃんが私の手を取る。綺麗な笑顔が、私の心を暖める。

「……………うん！」

ユイちゃんと一緒に歩き出す。

今の私は、“生徒かいちよー”の“天使”なわけじゃない。

“日向チーム”の……………“立華 奏”なんだ
つ！

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第14話 遊佐ちゃんはきっと私が嫌いなんだ……。好かれる理由もない

奏ちゃん

「よんでくれた皆……ありがとう」

レモン

「なんかポイント入れてくれる人がいっぱいいる？みたいなんで嬉しいっす」

奏ちゃん

「確認してなかったせいか、PV70000突破。ユニーク数10000越えになってた……」

レモン

「読んでくれた方々、ありがとうございます！！それでちょっと記念に外伝じゃないオリジナルを書くと思ったんですが、アイデアがなっしんぐ!!」

奏ちゃん

「入院すれば………?」

レモン

「ナイナイじゃないから、自分」

奏ちゃん

「それでアンケート？」

レモン

「そう！ この小説のキャラでオリジナルなコメディでも恋愛系でもいいからアイデアを募集しようと思ったんす！」

奏ちゃん

「……………書けるの？」

レモン

「いや、これ読んでる人ならもうオレが文才無いの判ってるしょ？」

奏ちゃん

「そうね」

レモン

「ちつとはフォローが欲しかった……………。というわけでアンケートです。“感想”の方に“アイデア”と“動かして欲しいキャラ”と“誰の視点で書くか”をいただけると嬉しいです」

奏ちゃん

「中身は期待するとひどい目に合います」

レモン

「アンケートしますが、来なかったら書きません。俺の頭じゃオリジナル想像とか無理なんで」

奏ちゃん

「ただ単に感想が欲しいだけじゃ？」

レモン

「……………」

奏ちゃん

「……………凶星」

レモン

「次回はこの前の予告通りで頑張ります！さいならー！」

奏ちゃん

「逃げた……………。それでは次回にてお会い出来れば……………。では、これにて」

奏ちゃん

「はんどそにつく」

レモン

「ああああ痛い痛い痛い！」

第15話 突き抜ける白球を追い続けた日々は

(前書き)

グローブの中に収まる一つの白球。

そのボールの感触を指先で確かめて、握り込む。

両腕を振り上げ、身体を弓なりに反らし、前方を睨む。

その片足を、ゆっくりと上げる。

そして、身体が前に倒れる力を利用して、上げた足で大地を踏み抜く
ッ！

腰の回転でグローブを脇に引き、反った腕をあとにする……………。

全身をバネのように、指先に全ての力を集中させる。

そして、地面を削る感覚で、ボールを叩きつけるようにその腕を降り下ろす
ッ！！

直後に、風切り音。

刹那に轟音。

その白球は、白煙を噴き出しながらあるべき場所へと収まる。

その後の静寂……………。

威風堂々と立っているのはただ一人……………。

第15話 突き抜ける白球を追い続けた日々は

試合会場

「初戦は一般生徒だ。一般生徒になんて負けたらゆりっぺがマジでキレル……。俺はぶっちゃけ実験台も罰ゲームも嫌だっ！ てなわけで行くぜー！」

拳を振り上げて張り切る日向君だが、途中から願望が入ってる……。

日向君の言う通り、相手は一般生徒。

戦争のような戦闘を毎回繰り広げている私達の身体能力なら、コールド勝ちも出来そうだ。

先に七点取ってしまったえば勝ちになる。この先、一試合ほどあるので、コールド勝ちを狙って体力を温存するのもいい。

「先攻は俺達だ！ 張り切っていこうぜ！！」

見ると、手をパーにしたまま項垂れる一般生徒と、笑顔でチヨキを天高く上げるユイちゃんがいた。

……………いつの間に。

「音無頼むぜ！」

「とりあえず罫には出るわ」

音無君は立て掛けてあった金属バットを手に取ると、ヘルメットを被ってバッターボックスへと立つ。

私達はベンチへと向かい、音無君を見る。

「プレイボールッ!!」

審判の掛け声により、第一試合が始まった。

音無君はバットを緩く振って構える。

相手ピッチャーが振りかぶり、第一球を投げる。

音無君はそれに合わせるようにバットを振り抜いた。

カキン ツ！ と軽快な打球音がグラウンドに響いた。

「ナイスだ音無ッ！！」

「やるう！音無先輩！」

ベンチから立ち上がって声援を送る日向君とユイちゃん。

他にはユイちゃんのファンの子が応援しているが、椎名さんはただ静かに試合を見ている。

……… っ てあれ？ 野田君がいない。

辺りを見回すが野田君の姿はな

「お前の力はア！ こんなものかアあああああッ！！」

「………は？」「」

その声は声援を送った表情のまま固まった日向君とユイちゃんの口から出たものだった。

ズザザアアアア！ とグラウンドに現れた野田君はショートを抜

いた打球を横薙ぎに振るったハルバードで音無君に打ち返した。

……………うわー。

「い、この野郎ッ!」

ムキになった音無君は返された打球をさらに打ち返す。

「フン　　ッ!」

そして野田君は打ち返された打球をさらにハルバードで打ち返す。

……何このえんどねす。

「野球はそんな競技じゃねエええええええええええええええええ
えッ！！！」

日向君は頭を抱えながら絶叫した。

「……ドアホですね」

とうとう“ド”を付けたユイちゃんはその光景を呆れて見ていた。

結局音無君はアウトになり、椎名さんが打席へと立った。

「……………」

無言で箒を指で支えたままバットを構える椎名さん。

片手で打てるのか、とも思ったが投げられた白球を悠々と打ち返して塁を回った。

椎名さん……………二塁打。

「さすが椎名っち！俺も続かねえと！」

日向君はバットを二回振り回すしてバッターボックスへと向かう。

「頑張れーっ！ ひなっち先輩！」

「がんばれー」

私とユイちゃんの声援を背に、日向君は流すように白球を前に飛ばす。

一塁へと進んだ日向君。そして椎名さんは二塁を踏む。

「次……ハルバード先輩だけど、大丈夫ですかね……」

ユイちゃんはじとーとした目でバットを引きずってバッターボックスへと向かう野田君を見ていた。

にしても、ハルバード先輩……………そのまんまだ。

「……………くだらん」

バッターボックスにてバットを構えずに、逆手に握ったまま野田君が呟く。

その呟きに腹をたてた相手キャッチャーが怒鳴るようにピッチャーを急かす。

そして、ピッチャーから放たれた白球を、

「オラア ああああああああッ!！」

野田君は気合いと共に振り抜いたバットで弾き飛ばした。

その打球は斜め上空へと勢いよく飛んでいき、フェンスの向こう側へと飛んでいった。

……ほーむらん。

「ふんッ！」

野田君満足そうに鼻を鳴らして一塁へと歩いていく。

「よおおおおおし！ ナイバッチ野田！！」

「……………」

スキップしながら日向君は塁を回り、椎名さんは無言のままホーム踏んだ。

初回から三点を先制。まだワンアウトだから点を取れそうだ。

「次はユイちゃんね。頑張って……………」

「頑張りますよ奏さん！ ガッシガッシかつ飛ばしますよ！！」

ユイちゃんは金属バットを片手で振り回しながら私に笑顔で応える。

バットを振り回しているが、ユイちゃんは私を見ていたために……
……バットがどの方向へと動いているか判ってなかった。

「あ……………」

ユイちゃんの手が滑ったらしく、バットが振り回された力の影響で
勢いよく飛んでいって、

「次はユイだな！ 頑張れげえつ a m g t d m t p g a ! ?」

ベンチへと戻ってきた日向君の……………え、えーと、そ、そう！
“下腹部”に当たった。

「 ツ!？」

声にならない悲鳴をあげながら下腹部を両手で押さえてグライウンドを駆け回る日向君。

通った場所は、地面の色が変わっていた。

どうやら涙で地面が濡れているようだ。

……… そんなに痛いんだ。

隣を見ると、その惨状を目の前で見っていた音無君は、眉間に皺を寄せながら日向君に黙祷していた。

後ろから見ていた野田君は、一見気にしていないように見えるが、よく見ると頬が引き吊っている。

「す……………すみません。ひなつち先輩」

ユイちゃんは汗をだらだらと流しながら、その惨状から目を反らす。

「お……………おま、お前は、……………おれ、俺を、女に……………する気が
ッ!？」

「いやーそんな気は微塵もなかったんですけど。あ、あはは。あは
……。……………ごめんちゃい!!」

「赦すかアあああああああああああああああッ！！！」

「うぎゃあああああああッ！！　痛い痛い痛い！！」

「俺はこの千倍痛かったわアあああああああッ！！」

きやるゝん、と擬音が付きそうな笑顔で手を合わせて謝ったユイチ
やんにキレた日向君は、顔を青くしたまま関節技をかける。

「……………いいの？　このままで」

「……………しょうがないだろ。こればかりは」

隣にいる音無君に訊いてみるが、音無君はその光景を見て溜め息を

つくだけで、止めさせようとはしなかった。

どうやら、男の子にあの攻撃は生死が懸かるらしい。

……………結局、関節技を喰らったままのユイちゃんが打席に立てるわけがなく、アウト扱いになってしまった。

……………ツアウトにて。私のターン。

「あー。頑張つてな、立華」

「……………うん」

バットを握り締めた私に声援を送ってくれたのは、音無君だけだった。

日向君とユイちゃんは私の打席とすら気付いていない。

他の二人は興味がないようで……………。

……………まあ、いつか。

ヘルメットを被ると前が見えなくなるので、野球帽のつばを少し下げながら、私はバッターボックスへと立つ。

前方を見つめて、バットを構える。

このピッチャーの球種は三種類。

ストレート、スライダー、フォーク。

私はストレート一本に的を絞り、投球を待つ。

ピッチャーの足が振り上がり、ボールが放たれた。

どんぴしゃりのストレート。私はバットを思いっきり振り抜いた。

金属音が響くと同時に白球が前へと飛んでいく。

それと同時に私は一塁へと走る。

打球はピッチャーとセカンドの頭上を越え、センター前へと落ちた。

センターが打球をグローブで取ったときには、私はもう一塁のベースを踏んでいた。

私……………ヒット。一塁へ。

次は、ユイちゃんのファンの子。ようするに普通の女の子なので、私は盗塁でも狙おうかと思ったが、する暇すらなく、一瞬で三振になりチェンジとなった。

「……………浅はかなり」

椎名さんの言葉が少し痛かった……………。

私達は守備位置につく。

今回は私がサードで、音無君がピッチャーに。

「音無！　後ろは俺達に任せて、気楽に投げろ！」

復活した日向君が、音無君の背に声をかける。

音無君は背を向けたまま頷き、投球フォームに入る。

アンダーロー。サブマリンだね……………。

まるで浮き上がるように見える鋭いストレートは、バッターから見たら本来の速度よりも速く見えているはず……………。

振り遅れたバッターは虚しく空振りし、野田君が構えたミットに白球が吸い込まれた。

「ストライク!!」

審判のコールがグラウンドに響く。

そのまま試合が続くと思ったが、急に野田君が立ち上がる。

「この程度しか投げられんの……………かッ!」

野田君はミットに収まっていた白球を握り締めると、勢いよく音無君へと投げつける。

バシンッ!! という音を発てて音無君のグローブに白球が収まるが、あまりの衝撃に彼の顔が歪む。

「ッ ! この野郎!」

またしても堪忍袋の緒がキレた音無君がアンダースローで野田君へ

と投げ返す。

「舐めるなアあああああああッ!」

そして、それをまたしても返す野田君。

………
またしても、えんどれす。

「だからそんな競技は存在しねえんだよおおおおおおおお
おおおッ!」

「はあ。アホは死んでも直らないんですね………」

日向君は争ったままの二人に怒声を浴びせ、ユイちゃんは頭を抱えて溜め息をついた。

その後、音無君の力が入ったままのピッチングで三者三振に抑えた。

また、私達の攻撃になったが、いきなり二人が三振になりツーアウト。

だが、その後音無君・椎名さん・日向君が打ってすべての塁が埋まり、野田君の無茶苦茶な打ち方で満塁ホームランとなった。

七点先制により、私達は一回戦を勝ち抜いた……………。

……一瞬で終わっちゃったような気がする。私一回しか打席に
立ってないし、守備じゃ何もしてない。

……楽だけど。

二回戦も同じような試合運びになった。

私達は後攻で試合が展開する。

今回は音無君も野田君も真面目にやり、ユイちゃんも打席にたったので、初回で6点を取り、ピッチャーの音無君がほとんど三振に打ち取った。

なのでコールド勝ち、100で私達が勝った。

試合が終わった直後のことだった。

野球部のユニフォームを着た生徒達が突如グラウンドに入ってきた。

その先頭には、太陽に照りつけられるなか学生服をきっちりと着込

み、被った学生帽のつばを手で押さえながら歩く男の子。

……な、直井君だ。

私は誰にもバレないように、静かに音無君の背後へと隠れる。

な、内緒でチームに入っただから………不味いなあ。

日向チームの前に来た直井君達はそこで立ち止まる。

そして、直井君は指でつばを上げ、覗いた黄色の瞳で日向君達を射抜いた。

「生徒会副会長の直井です。あなた方はチーム申請をせずに参加している。これを見過ごすわけにはいきません」

直井君の眼が鋭くなり、チームのみんなは眉間に皺を寄せる。

一発触発……。辺りに緊張感が漂い始めた。

「なので、僕は生徒会チームを結成しました。真正面からあなた達を悉く叩き落とします」

「生徒会チームだと？ 全員野球部のレギュラーじゃねえか……」

日向君は眉間に寄せた皺をさらに深くする。

野球のレギュラー……………それは素人な私達とは違い、野球をずっとやってきた人達だ。

これで、勝つのが難しくなっちゃった……………。

直井君はチームのみんなを見渡すように視線を動かす。

そして、その視線を音無君の前で止める。

……………明らかに後ろにいる私に気付いてるよ。

「会長。隠れてないで出てきてください」

あー。やっぱりバレてた……………。

私はすごすごと音無君の背から姿を見せる。

みんなの視線が集まってつらい……………。

「それで？ 何をしているので 会長？」

「……………野球」

「見れば判るッー!!」

直井君は完璧に怒っているようで、私に大きな声で応える。

「なら訊くなよ……………」

音無君が呆れたように呟くが、直井君に聞こえないはずがなく、

「その貴様、揚げ足を取るな!!」

音無君を指差し、怒鳴り付ける。

……………よく見ると、その指がぶるぶると震えていた。

「はい。メツチャ怒鳴ってますけど……………暑くないんですか？」

ユイちゃんが授業のように挙手しながら直井君に尋ねる。

「暑い、暑いさ。貴様らのせいでこの僕が現場に駆り出されることになったんだからな。普通ならクーラーのかかった生徒会室に居られたというのに ッ!！」

直井君は太陽を睨み付け、その後私達を睨み付ける。

見ると、大量の汗を流していた。前髪も汗で額に張り付いている。

……制服脱げばいいのに。

そう思ったのは私以外にいたようで、ユイちゃんが不思議そうな顔をしたまま言う。

「暑いなら制服脱げばいいんじゃないですか？ そんなきつちり制服着なくたって……」

直井君は、その言葉にバカにしたように鼻を鳴らす。

「僕は生徒会副会長だ。いくら暑かろうが寒かろうが、雷が落ちようが雨が降ろうが槍が降ろうが竜巻に襲われようが弾丸が飛んでこようが剣で斬られそうになろうが、僕はこのスタイルを貫くッ……」

言い切った彼の表情はどこか清々しそうで、払った襟足から汗が散

り、地面に落ちてすぐに蒸発する。

………すぐに蒸発する時点でもの凄く暑いのは判るので、直井君が変なテンションなのにも説明がつく。

直井君は、暑いのが苦手だから……。舌もにゃんこ舌だし。

「………うわー。途中からもう意味わかんねー。こいつもアホだ………」

満足そうな直井君を見て小さな声で呟くユイちゃんは、呆れたように視線を直井君から反らした。

………こっちは聞こえなかったみたい。

「それでは、精々足掻くといい」

直井君は最後に一言いって踵を返した。

それに生徒会チームが続き、グラウンドから去っていく。

「はんッ！ 頭洗って待ってるよ ツ！！」

バットを振り回して直井君の背に大声を浴びせるユイちゃん。

「頭洗わせてどうすんだよ……。首だ首。ほら行くぜ」

日向君は呆れたような表情で言うと、ユイちゃんの腕を掴んで引き

摺って皆を促し、歩き始める。

「……………にしても、野球部レギュラーを引っ張ってくるとはな……
……勝ちが薄くなっちまった」

誰に言うわけでもなく、日向君は小さく口を動かす。

「NPCのくせに……………大した行動力だなあ」

NPCって……………なんのことだろ？

私は日向君のその言葉に首を傾げながらも、みんなの後を追った。

・ ・ ・ ・

「あああああ！ 会長を連れ戻すの忘れていた
ッ！！」

やはり野球部のレギュラーは強い。

一般生徒相手では言わずとも、他の戦線チームですらコールド勝ちを決めた。

私達もほぼコールド勝ちで勝ち抜き、決勝に進んだ。

相手はもちろん“生徒会チーム”

はてさて……………どうなるのかな？

・ ・ ・ ・

「……………お、お前大丈夫かよ？」

「はあ、はあ、はあ。き、貴様に心配される、お、覚えはないっ」

グラウンドに整列した私達の前には直井君率いる“生徒会チーム”がいる。

そして、日向君の目の前にいる直井君は、日向君が心配するほどの酷い状態だった。

直井君は、身体をふらふらとさせ、瞳が三重にぶれている。大量の汗を流しているため、直井君の立っている地面だけ濡れていた。

……今にも倒れそうで、危ないなあ。

「……………脱水症状で死にますよ？」

「ふ、ふん、問題ない。水分補給は万全だ」

ユイちゃんの言葉に応えた直井君は制服のポケットからスポーツ飲料の入ったペットボトルを取り出す。

「……………もうほとんど無いじゃないか」

音無君が呆れたように指摘したので私も見ると、確かにほとんど入っていないかった。

.....

直井君はぶれる瞳だけを動かして中身を見ると、スポーツ飲料の少し入ったペットボトルを無言で握り潰した。

「……………保健室行ったほうがいいんじゃないか？」

音無君が心配そうに言ったが、直井君はそれに肩を震わせ、

「くく。あっはっはっはっはっは！」

いきなり笑い始めた……。

「あ…………壊れた」

ユイちゃんの声がやけにグラウンドに響く。

「あっはっはっはっはアあああああああああああ！！ 暑くてやっていられるかアあああああああッ！！ 速攻で貴様らを叩き落として室内に戻ってやる ツー！！」

直井君はそういうと私達に背を向け、ふらふらになりながらもベンチへと向かった。

……大丈夫かな？　ちょっと心配だなあ。

「……………ちょっと行ってくるわ」

「あ、ああ。俺達は先にベンチのほうに行ってるから」

音無君に断りを入れ、私は直井君の後を追った。

試合は私達が先攻なので、私に打席が回ってくるのは結構後になる。

なので、直井君のところに行く前に、自動販売機でスポーツ飲料を買い、タオルを濡らす。

それを持って、直井君の元へと向かった。

“生徒会チーム”のベンチで、直井君は横になった状態で浅く呼吸を繰り返していた。

顔色もさきほどより青い。

「……………直井君」

「……………？ ああ、会長ですか」

私の声に鈍い反応を見せる直井君。

現状から言って脱水症状の一手前なのが判った。

私は直井君の近くで膝を付き、直井君の背に手を入れて上体を起こさせる。

持ってきたスポーツ飲料の口を開け、直井君の口元へ持つていく。

「飲んで」

「……………すみません、会長」

スポーツ飲料を少し傾け、直井君の口へ流し込む。

直井君は瞳を閉じたまま、喉を鳴らして飲み続けた。

半分ほど飲むと、直井君の顔色も少しだけ良くなった。

直井君をまた横に寝かせ、濡れたタオルを額に置いた。

「……………会長、試合状況は？」

瞳を閉じたまま、直井君は小さく声を出す。

グラウンドのほうへ目を向けると、ちょうど野田君がスタンドに打球を叩き込んでいた。

音無君と椎名さんがアウトだったようで、一塁にいた日向君と野田君で二点を先制していた。

ツィアウトで打席に立つのはユイちゃん。

そろそろ準備しないとイケないかな……………。

「今、私のチームが二点取ったわ」

「そうですか……………。会長……………いや、今は、立華さん」

「……………?」

直井君は上体を起こして、黄色の瞳で私を見つめる。

彼に“会長”以外で呼ばれたのは、初めてだった。

私が内心驚いていると、直井君はフツと表情を緩める。

「今日の貴方は、ただの生徒です。貴方は精一杯、“今”を楽しんでください」

……………初めて見た、直井君の笑顔。

それが、私に向けられている……………。

「……………ありがとう」

「……………こちらこそ」

直井君は小さくそういうと身体を横にして、濡れたタオルを目まで被せた。

やはりまだ暑いのか、彼は耳まで赤くなってしまった。

私は立ち上がって、野球帽を深く被ってグラウンドへと出る。

………少しだけ、瞳が潤んだ。

ユイちゃんはアウトになったようで、攻守が切り替わる。

………私は“今”を楽しもう。

私はサードにつく。

音無君がピッチャーのままだが、疲れてきたようで、球威が落ちてきているし、球がぶれる。

息も切れ始めているので、交代の可能性がありそうだ。

それに加えて相手は野球部。

一番目の打者から打たれてしまった。

一度バウンドした打球を椎名さんが取ったが、すでに一塁を踏まれていた。

二番目の打者はバントの構え。

打者が転がしたのはサードの方に来たので、私が処理をして一度セカンドに視線を飛ばしてからファーストに投げる。

「おっ？ よつと！」

ユイちゃんが開いたグローブで球を受ける。

「アウト！」

審判の声がグラウンドに響く。

ワンアウト・二塁。

次の打者は身体が大きい。下手するとホームランの可能性もある。

音無君は肩で息をして、グローブの中にあるボールを手で弄ぶ。

構え、投球フォームに入ったとき、

「
ッ!？」

音無君は前に出した足が滑り、不自然な格好でボールを投げてしまった。

そのボールは当然のように球威がなく、緩い球がど真ん中に投げられた。

それを見逃す打者じゃない……………。

完全に合わせられたバットはボールを弾き飛ばし、上空へと巻き上げる。

打球は外野の頭上を越え、フェンスの外へと落ちた。

ホームランだ。これで相手も二点で同点になった。

「タイムッ!!」

日向君がタイムを取り、マウンドで息を荒くしている音無君へと近づく。

私とユイちゃんもマウンドへと近づいた。

「大丈夫か？ 音無」

「はあ、はあ。い、今ので無理に投げて手がイッた。体力ももう持たない……………」

先に話をしていた二人。音無君の右手は痙攣したように震え、内出血で色が青くなっていた。

……………私の出番かな。

そう思ったところで、日向君が私へと顔を向ける。

「立華。やつてもらえねえか？」

「……………うん、判ったわ」

「はあ、はあ。すまない立華。頼む」

音無君からボールを渡され、それを握り締める。

「それじゃ音無。サード……………守れるか？」

日向君が音無君の右手を心配そうに見る。

「なんとかするさ。ファーストに投げる時は立華を中継する」

袖で汗を拭い、音無君はサードへと向かう。

「頑張ってください！ こっちに飛んできたらず必ずアウトにしますから！」

ユイちゃんのはめたグローブを拳で叩きながらファーストへと戻る。

最後に日向君は無言で私の肩を叩くと、セカンドへと戻った。

……………頑張らなきゃ。

握ったボールをグローブに収め、マウンドの白線を踏む。

視線を前に向けると、野田君が構えるミットしか見えなくなる。

きっとそこに打者がいる。それでもミットしか見えない。

タイムが終わり、試合が再開する。

……いくよ。

ボールを握り締め、構える。

私には球種が二種類しかない。それも見よう見まね。“漫画”の受け売りだ。

……………それでも、このチームで勝ちたい。

その思いを胸に抱き、片足を振り上げる。

グローブを胸に引き、両腕を振り上げ、身体を弓なりに反らし、前方を睨む。

そして、振り下ろした足を始点に腰を回転させ、ボールを地面に叩きつけるようにその腕を降り下ろす

ッ！！

「 疾ッ! 」

白球が砂ぼこりを巻き込みながら、ミットに収まり轟音を放つッ!

ズドン ツ! ! !

「ぐううううううう!! チ ツッッ」

野田君の表情が歪み、先程まで片手で掴んでいたミットをもう一方の手で押さえた。

摩擦熱で白煙を出しながら、ようやく回転が収まり、ミットから白球が零れ、野田君の前に落ちた。

風が吹き、誰も動かない。

バッターはバットを振ることすらしなかった。

「「「.....は?」」」

背後から三人の声が聞こえた。

私は正面を向いたまま、投げた右手を二、三回振る。

「「「はアああああああああああッ!?!」」」

びくっ!! え? 何?

「ちょ! タイムタイムッ!」

日向君が急にタイムを取ると、走って私のところに向かってくる。

他にも音無君とユイちゃん。今度は野田君もマウンドの方に来た。

「ちょ奏さん!? なに? 今の何!? 球見えなかったんですけど!?!」

「お、俺も見えなかった……」

ユイちゃんが驚きの表情のまま私に迫ってくる。

……く、首絞まる。

「おい、野田。お前手え大丈夫か？」

日向君が野田君の前に立つ。

野田君ははめていたミットを取ると、その手は真っ赤になってしまっていた。

ちよつと強く投げすぎたかな……………。

「なんとか取れるが、痛いな。手が粉碎されるかと思った。さすがは“ゆりっぺ”とタイマン張れる奴だッ！」

何故か野田君がちよつと嬉しそつだ……………。

「立華。今のつてアレだよな？」

日向君が野田君の持ってきたボールをある形で握る。

その握り方は私がさつき投げた球の握り方だった。

それに私は頷く。

「うん。……………“ジャイロボール”」

「じゃ、じゃいろ？ 何ですかそれ？」

ユイちゃんが小首を傾げる。

「“ジャイロボール”……………なんつかストレートの上位版みたいなヤツつつか、“ライフルの弾”みたいな回転するボールなんだよ」

「……………ほへー」

ユイちゃん絶対判ってない……………。

ジャイロボール

ボールの進行方向に対して、回転軸が垂直になるため、空気抵抗が変わってくるので、ストレートより“伸び”、ストレートより“落ちない”球となる。

日向君の言う通り、ライフルの弾のように、ボールの回転の軌跡が螺旋状になっている。

……… って“漫画”に描いてあった。

私としては、“ストレートのすごい版”としか判らないけど………。

これを投げれる練習をしたせいか、ストレートは投げられなくなっちゃったしね………。

「立華。他に球種は？」

「あと“チェンジアップ”」

「……………速度の緩急が凄まじいな。こりゃいけんじゃねえか？」

日向君が興奮気味に言うと、さっきの球のスピードが出るカウンタ―に目を向け、固まった。

そのカウンターに表示された速度は、

150 km/h

ひゃくじゅっきろ。

……また速度上がったかな？

「は、はは。その身体でひゃくじゅっきろ……ま、漫画だ。
漫画の世界だ……」

日向君の目が虚ろになっている……。そのままセカンドの方へ
戻っていつてしまった。

「でも、私スタミナが無いから……………途中からいっぱい打たれると思う」

「そこは俺達がなんとかするから、頑張れ」

音無君は私の頭をぽんぽんと撫でるとサイドに向かい、

「いやー規格外にもほどがあるな」

ユイちゃんが眩きながらファーストへ向かう。

「貴様ツ！ 手加減なんかするなよ！！」

野田君がそう言って走って戻り、ミットを構えて座る。

……よし。体力が切れるまで、思い切り投げよう。

二球目と三球目も“ジャイロ”を放ち、三振に抑えた。

これでツーアウト。

私は次の打者も“ジャイロ”だけで三振に抑え、攻守交代となった。

打席は私から……………。

バッターボックスでバットを構える。

一球目で見極める。

この速度なら打てそうだ。二球目はボール。

そして三球目。内角を挟るように飛んできたストレートを引っ張るようにバットで振り抜く。

三塁線に飛んだ打球は外野の頭上を越えフェンスに激突した。

私は外野が球を取る前に三塁まで走り抜けた。

次はユイちゃんのファンの子が思い切り振ったバットが球に当たり、一塁の方へと転がった。

それを見た瞬間に地面を弾く。

一塁から球を受け取った捕手を避けるように、私はホームを踏んだ。

これで一点差・3　2だ。

それからファンの子はバットに掠りもせず、アウトになった。

ちょっと休みたかったけど……………頑張らないと。

手にグローブをはめ、野球帽を被り直してマウンドへ向かった。

グラウンドに打球音が響いた。

肩で息をしながら振り返ると、白球がフェンスを越えていた。

二人の男の子が塁を回っている。

.....一点取られた。

あれから“ジャイロ”をファールされた私は“チェンジアップ”を混ぜながら投球した。

私達の攻撃のときに3点取り、相手の攻撃のときは打たれながらも0点に抑えたが、私の体力が切れてきた。

その次の攻撃では、ユイちゃんも私も打てなかったので、休む暇もなくマウンドに上がった。

そして今二点取られた。6 4でまだ二点の開きがあるが、今の私では打たれる可能性の方が高い。

それでも今は外野が頼れる存在なので、打たれてもまだ大丈夫。

後ろを振り向くと、柔道着姿で何故かグローブを頭に乗つけて“肉うどん”を啜る松下君がいる。

……………音無君が“肉うどん”を奢ったら来てくれたらしい。

球威も下がってきて、外野に飛ばされ始めたので助かっている。

視線を前に向け、投げる。

今では130kmしか出ていない。それでも打てない人はいるが、慣れてしまった人には効かなくなってきた。

……う、また打たれた。

ようやくツーアウトにしたというのに、ホームランを打たれてしまった……。

次の打者を“ジャイロ”で打ち取ったが、疲れが酷い。

あと、一回を抑えければ私達の勝ちになる。

……頑張れ、頑張らないと。

私は息を大きく吸って、息を整えることに全神経を集中させた。

ようやく、ここまで来た。

相手の攻撃。ツアアウト・一・三塁。

汗が大量に吹き出て、息が酷く荒れる。

汗ばむ手をジャージで拭いてボールを握り直す。

「……………タイム！」

そこで音無君が唐突にタイムを取った。

そっちを見ると、音無君が日向君へと駆け寄っていた。

よく見ると、日向君の様子がどこかおかしい……………。

私も気になってしまい、日向君の方へと向かった。

「どうしたんだよ？ 日向」

「いや、昔を……………思い出しちゃってさ」

日向君のその微笑は、まるで自分をバカにしているようだった。

「前も同じ状況だった。ツーアウトで一・二塁、そこにセカンドフライが来るんだ」

「……………日向」

「それで俺は……………取れなかったんだろうな、今ここにいるんだし」

そういうと、彼は太陽を見上げる。

「それで、俺は堕ちた。ゆりっぺや岩沢みたいな人生に比べたら、は、はは。ゴミみたいなもんだ……………」

「ゴミなんて言つなよ日向！ それでもお前が歩んだ軌跡だろ！？」

音無君が日向君の腕を掴んで叫ぶ。その表情はまるで自分の方が痛がつてるようで……………。

それを見た日向君は驚いたように目を見開き、その後頬を緩めた。

「そう、だな。もしかしたらあんな人生にも意味が合ったのかもしれない……………。お前みたいないいヤツに会えたからな」

「日向……………」

私は口を閉ざす。

まるで自分が場違いなところにいるような気がしてならない。

判り合える二人と、この後は敵になってしまう私。

同じ場所に……………いちゃいけない気がする。

それに、私なんかが日向君の過去を聞いてもよかったのか？

「よかったの？……私なんかが聞いて」

「いいさ。今日は俺が無理いって手伝ってもらってるんだ。報酬がこんなバカの過去話なんかで悪いんだけどな……」

それでも、嬉しい。

誰かに信用されて、生前の話を聞いたのは初めてだった。

「そんなことない……ありがとう」

「…………お前が“天使”なんかじゃなかったら、よかったのに……」

「私は“天使”なわけじゃない……………」

「……………そうだったな」

日向君は小さく笑うと、私の頭に手を乗せた。

「ここまで来たんだ。勝とうぜ……………音無、立華」

「……………ああ！」

「……………うん」

私と音無君は力強く頷き、守備位置へ戻った。

勝つ。

絶対に勝つんだ……………。

日向君の過去を聞いて、よりいっそう勝ちを求めたい。

そして、セカンドフライを、日向君に取ってもらって、

この世界から……………“卒業”させてあげたい。

ボールを強く握り締め、振りかぶり投げる。

球威が上がリ、ミットから轟音が鳴り響き、審判のストライクコールがグラウンドに響いた。

あと、二球……………。

野田君から投げ返されたボールをグローブで取り、同じ球を投げる。

また球威が上がる。

バットに掠らせず、ストライクを取る。

あと、一球

ッ！

最後に、振りかぶり、投げた球は、

チェンジアップ

先程までの速球の反動で、バットがぶれ、打球は大きく天へと舞い上がった。

そして、日向君のいる、セカンドへと落ちていく。

セカンドフライ

まるで、スローモーションのような感覚。

日向君がグローブを上げ、落ちてくる白球を見上げる。

初めてみる……………日向君の穏やかな表情。

今にも……………消えてしまいそうな希薄な存在感。

それに気が付いた音無君が、グローブを投げ棄てて走り出す。

「おい待て取るな日向……………取るなアあああああああああ
あああああッ!!」

日向君には、音無君の声が聞こえていない。

ただ……………取ることだけを。

そして、ようやく……………スローモーションが、途切れ、

日向君のグローブに、

ずっと追いつけた、白球が、

今……………

「どおりやあああああッ!！」

「ぐほオooooooooッ!？」

.....はい？

「取ったアあああああッ!！」

そこには、ユイちゃんに蹴り飛ばされ、グラウンドを転がった日向君と、笑顔で“自分のグローブ”に入った白球を掲げるユイちゃん

がいた。

……………あれ？どこで間違えたんだろ。

「な、なぜ飛び蹴り……………」

「私が最後に輝くために！」

「納得いかねエええええええええええええええええええええええッ！！」

グラウンドのど真ん中で頭を抱えたまま絶叫する日向君の聲が、この世界に響いた。

走り出した格好のまま固まる音無君。

それから少しすると、笑顔で笑い出した。

……………これはこれで、ハッピーエンドなのかな？

私は大空を仰ぐ。

中心で燦々と煌めく太陽が、私達をより照らし出した。

6

5

日向チームの……勝ちだ。

「納得いかねえけど……まあ優勝は優勝だよな」

日向君は苦笑しながら頭をかいて視線をずらす。

その隣には最後にとった白球に笑顔で頬擦りしているユイちゃん。

「これで罰ゲームはなくなったんじゃないか？」

「そ、そうか！ そうだよな！ 優勝したんだからな！ いやー豪華商品っていったいなんなんだろうな！？」

音無君の言葉に、日向君が急に元気になる。

回りをキョロキョロと見渡して、豪華商品を探す。

その後閉会式を行って、とうとう豪華商品の入った箱が日向君へと手渡された。

「いったい何が入ってるんですかね!？」

「まあ待てユイ。今開けるぜ!！」

興奮気味の日向君が勢いよく、その箱を開けた。

入っていたのは、

小さな紙の束と、一枚の色紙。

「……………は？」

日向君とユイちゃんの目が点になった。

固まった二人の背後から箱の中を覗いた音無君は、その紙の束から一枚を手に取り、読み上げる。

「えーと、“麻婆豆腐一年分1095枚”……………ぜ、全部食券みたいだな（よりにもよってあの激辛のやつか……………しかも1日三食麻婆豆腐って）」

読み上げると音無君は顔を青くする。

……あれ嬉しくないのかな？

「え、えーとこっちは何かなー……ふ、
“副会長サイン色紙”
……さ、最悪だ」

ユイちゃんは直井君の色紙を握り締めて歪める。

「ちょ
」

日向君が顔を伏せたまま、肩を揺らす。

.....あんまり気に入らなかったみたい。

[illegible]

……ちようだいって言えばくれるかな？

to be continued

第15話 突き抜ける白球を追い続けた日々は

(後書き)

奏

「なあにこれえ」

ユイ

「いくらなんでも長すぎじゃボケエえええええ！」

音無

「長かったな……………今回が一番長いだろ」

日向

「……………俺の扱い酷くなかったか？」

音無

「男として一回死んでたな」

日向

「何故あそこであのシーンを入れたのか判らん！！」

奏

「ともかく、これでようやく原作4話が終わったわ」

ユイ

「書くの遅すぎですよ作者！」

奏

「まあ、元からだから……………」

音無

「次はテストだったか？」

日向

「いや、なんか外伝書くらいしいぜ？」

ユイ

「ああ、変態の話ですか」

直井

「誰が変態だ！ 僕は神だぞ

ッ！？」

ユイ

「いきなり出てくんやゴラアあああああッ！！」

日向

「外伝もあるけど、他にもキャラコメやるみてえだぞ？」

奏

「なにそれ？」

日向

「さあな。俺にもわかんねえ」

音無

「……………いつ終わるんだろうなコレ」

奏

「これからも頑張るので……………よろしく」

レモン

「では、これにて」

皆

「……………早く書け作者！」「……………」

レモン

「……………努力します」

外話 夢中の偽キャラコメンタリー 1（前書き）

これは、本編とはなんら関係ありません。

この本文は酒：7 眠：2 夢：1で構成されています。

はつきり言って、読んだら読まない方がよかった！！ というものです。

キャラ崩壊？ そんなもんじゃない！！

キャラ爆碎！！ となっております。

読む人は、気を付けてください。

ほんとに読むの？

知らないからねー

外話 夢中の偽キャラコメンタリー 1

奏^{てんし}

「さあ、駄作者がハマったAngel Beats!のキャラコメンタリーのパクリが始まるわ」

日向

「イキナリパクリ宣言かよ!? そこはボカセよ! 霧で見えなくなるみてえにさ!」

ユイ

「そこ突っ込んじゃ駄目でしょうひなっち先輩。そしてつまんない」

日向

「……………すみません」

ゆり

「アンタら勝手に喋り過ぎよ！ このあたしが喋れないじゃない！
」

音無

「なんか久しぶりだなゆり。いつ以来だ？ 出たの」

ゆり

「えーと確か11話の最初のほうに出てから出てない……………っ
てこらアあああッ！ 声だけだけど13話も出てたわよ！！ 日
向君土下座させたじゃない！！」

音無

「三言だけな」

ゆり

「……………黒いわコイツ」

ユイ

「というかい加減始めませんか？ キャラ………なんとか」

奏^{てんし}

「キャラコメンタリー」

ユイ

「そうそうキャラコメンタリー………ていうかなんで奏さんだけ横に役名っぽいの付いてんですか？ ズルい！」

奏^{てんし}

「主人公ですから」

ユイ

「ズルいぞ主人公特典！！ 私だってこの小説じゃ結構セリフ多いもんね！ 横に《ユイにゃん》って書いてやる！」

日向^{アホ}

「んなのどうでもいいじゃねえか……………って誰だよ!? 俺の横に《アホ》って書いたヤツ!!」

音無（偽称・日向の親友）

「俺」

日向^{アホ}

「音無いいいいいいいい!! ……………ん? 偽称!? 偽称ってなに!? 俺達親友じゃねえのか!?」

ゆり（人類最強）

「そう思ってるのは、アンタと音無君と日向君のカップリングを考える腐〇子だけよ」

日向^{アホ}

「……………○の位置おかしくね？」

奏&ゆり（ほぼ無敵の組合せ）「はんどそにつく」「《霸斬》」

日向（最高のアホ）

「ひでぶっ!？」

ゆり

「そこに突っ込むからアホだアホだと言われるのよ」

日向（アホ死亡中）

「……………」

ユイ（にゃん）

「ひなつち先輩が死にましたねー。……………今のうちに《既成事実》でも作っときますか」

ずるずる（ユイが日向の死体を引き摺ってどこかへ行く）

ゆり（アタイったらさいきょーね）

「このユイはアプローチが凄まじいわね。選択肢間違えたらヤンデレに一直線だわ」

音無（なんか黒くね？）

「いいんじゃないか？ 日向はドMだろ」

奏^{てんし}

「初めて知った真実ね。それよりもう始めましょう。作者の腕が潰れるわ」

ゆり（9）

「そうね。始めましょうか！」

音無^{もとなし}

「日向とユイはいいのか？」

奏（Angel）

「〇〇〇な声聞こえてくるから放置」

ゆり（チ○ノLv5）

「ユイ凄いわねー。これが若さってやつか……………」

音無（原作主人公）

「お前いくつだよ……………」

ゆり（そして時は動き出さない）

「永遠の16歳………てかこの世界じゃみんな永遠の〇〇歳よ」

えんじえる
奏

「いい加減ストップ。本気で始まるから」

ユイ（お肌つるつる）

「ほらひなっち先輩、始まるみたいですよ？」

なんかゲッソリ

日向

「あ、ああ。そうみたいだな（何故だ？ 死んでいただけのはずなのに、何かあったような気がしてならねえ）」

てんし
奏

「それでは、キャラコメンタリーを始めましょう」

第1話を見ながら

ゆり

「あたし奏ちゃんから見た印象最悪ね」

奏

「そうだね」

ゆり

「否定して欲しかった!!」

日向

「俺原作ならちょっと出てたのに……………」

ユイ

「私なんか設定があつたかすら疑問ですよ……………」

音無

「俺は原作通りかな。普通に死んだし」

ゆり

「というか一話の見処なんて奏ちゃんの頭がお花畑ぐらいじゃない」

音無

「お、お花畑って……………他に言い方無いのか？」

ユイ

「ど天然」

日向

「ど”付けんの好きだなあお前」

ユイ

「ひなっち先輩の方がもつと好きですよ？」

日向

「……………は？」

ゆり

「おいこらアああああああッ！！ ユイ、てめえまだこの小説だってそこまでやってないだろうがッ！！ やるんなら原作1

0話終わってからにしろ！」

ユイ

「ちえ」

奏

「あ、一話終わった」

第2話を見ながら

ゆり

「……………おい」

直井

「なんだ？ 静かに見れんのか貴様は」

日向

「どっから沸いてきたんだ？ こいつ」

ゆり

「なんで原作じゃメインキャラの一人の私より先にこの変態がガッツリ出てんのよ！！」

奏

「だって私ときちんと会話するの直井君ぐらいしかいなかったから」

ゆり

「くっそー！ どうせ原作崩壊起こしてんなら奏ちゃんと先に友達

になつときゃよかつたアあああああッ！！」

音無

「それじゃ矛盾するだろ。戦線出来ないし……………誰と戦う気だよ」

直井

「ええい！！ 貴様ら静かにしろ！ 僕の出番だぞ今！ あ、もちろん音無さんと立華さんはいいですよ？」

ゆり

「私なんか？話しかまともな出番無いのにッ！！」

直井

「フッ。それは僕が神だからさ！！」

ユイ

「私も8話からの出だし………つつかあなた原作だと私より出るの遅いじゃないですか」

直井

「だから僕が神だ

」

ユイ

「へー。神（笑）ですか」

直井

「おい！　なんだ（笑）って！　そんなもの付けるな！！」

ゆり

「いい加減黙りなさい変態！」

直井（神《爆》）

「貴様誰が変態だ！……………誰だ僕の横に変なものを書いたのは！！《爆》ってなんだ！？」

音無

「俺」

直井

「……………さすが音無さん！いいネーミングセンスです！」

ゆり

「そんなんだから変態言われるのよ。世の中にはきつと音無×直井で溢れかえってるわ」

皆と離れて

日向

「…………お茶うめえな」

奏

「いちご大福もあるわよ？」

日向

「おお。食べる食べる」

奏

「でもいいの？ 私とお茶なんて飲んでて……………ずずず（お茶する）」

日向

「~~ずずず~~……いいよ、めんどくせえし。立華と一緒にいるほうが楽でいいな」

奏

「そう……」

ユイ

「……………」

第3話を見ながら

ゆり

「……………あれ？ ユイと日向君は？」

直井

「ああ。あのチビ女なら、僕から催眠術の極意を訊いたら、アホに催眠術かけてどっかに行ったぞ」

音無

「そんな簡単に催眠術って使えるのか？」

直井

「音無さん！　実はこれを使えば誰にでも出来ますよ！」

ごそごそ（直井が自分の被った帽子を漁る）

奏

「なんで帽子の中………」

どん！（直井が机の上に何かを置く）

音無

「なにになに……………《クラゲにも出来る超簡単！ 相手の目を見れば出来る催眠術！！》……………まずクラゲに目はあったか？ どうやってクラゲは相手の目を見るんだ？」

直井

「さっきのチビ女の瞳から《ハイライト》が消えてたんで、催眠術かけるのは簡単だったと思いますよ」

ゆり

「あー、とうとうヤンデレフラグ立っちゃったわね。日向君どうなるのかしら？」

奏

「……………私のせい？」

「というか話読まなくていいのか？」

ゆり

「見処は音無君のヘタレっぷりぐらいじゃない」

奏

「ヘタレ……」

音無

「……言わないでくれ」

ゆり

「あとは奏ちゃんの天使っぷりが披露される場面ね」

直井

「作者は原作1話を見て、この小説の題名をすぐに思い付いたらしいな」

奏

「お腹痛かったなあ……………」

音無

「……………すまん」

第4話見ながら

ユイ

「今回は奏さんしか出てませんね！」

ゆり

「あ、戻ってきた」

音無

「……………大丈夫か？ 日向」

日向

「あ？ 何がだ？」

音無

「……………なんでもない」

日向

「いやーにしてもユイはやっぱ可愛いなあ。他の女より輝いて見えるぜ！（瞳のハイライトが消えている）」

直井

「完全に催眠術にかかってるな」

日向（ハイライト無し）

「あははー。ユイ」

ユイ

「もうひなっち先輩ったら甘えん坊さんですね！」

ゆり

「その二人はほっとしましょ。……………今回は奏ちゃんが新しい《スキル》を作る話ね」

音無

「作者の趣味が丸出したな……………」

奏

「ゆりの趣味もバレたよね」

ゆり

「私は基本的に面白いものが好きなのよ」

音無

「……………だからあの二人を放置するのか」

ゆり

「いや、あれに関わると命の危険が降りかかりそうだから放置してるだけよ!」

直井

「この世界じゃ死んでも生き返るじゃないか」

ゆり

「……………（目を反らす）」

音無

「……………とりあえず、先に進むか」

第5話見ながら

日向

「あん！？ いつの間に5話になってんだ！？ 3話と4話は！？」

直井

「催眠術が切れたようだな」

ユイ

「……………ちつ。」

何言ってるんですかひなつち先輩！

ひなつち先輩さっきまで寝てたんですよ！ お茶飲んでたら眠くなったって言って私に膝枕させてたじゃないですか」

ゆり

「……………さすがに日向君でもそこまでは引つ掛からないんじゃないや

」

日向

「なにぃ！？ そうだったのか……………。悪いなユイ、膝貸してもらっちまって」

ゆり

「軽く引っ掛かった!？」

ユイ

「いいんですよひなっち先輩！ 先輩のためなら喜んで貸しますよ！」

日向（顔が真っ赤）

「そ、そうか？ へへ、ありがとな、ユイ」

ユイ

「またいつでも言ってくださいね!（……………計画通り）」

音無

「……………女って怖いな、奏」

奏

「……………私も女だけど」

音無

「……………お願いだからああいう風にはならないでくれ」

ゆり

「奏ちゃんは天使よ？　なるわけないじゃない！」

直井

「ならばあのチビ女は小悪魔のアクセサリを付けていたからああなったのか？　さしずめ、死神に魂を売った悪魔と言ったところか……………」

日向

「直井！ ユイのこと悪魔とか言ってるんじゃないよ！！」

直井

「……………哀れなアホだな」

日向

「誰がアホだ変態がア ああああああッ！！」

直井

「ホモホモ言われてる貴様に変態と言われたくないわア ああああああッ！！」

ユイ

「さあて、あつちはほつといてキャラコメやりますか！」

ゆり

「何気に元に戻ったわね……………日向君はもういいの？」

ユイ

「あとはじっくり私しか見えないように墮とせばいいだけですから！
時間はいっぱいありますし！！！」

音無

「……………怖え」

ユイ

「いざとなったら《既成事実》もありますから」

ゆり

「はアああああッ！？　嘘っもう出来たの！？」

奏

「何が？」

ゆり

「何がって……奏ちゃん！ 赤ちゃんよ赤ちゃん！..」

奏

「？ 赤ちゃんってコウノトリが運んでくるんじゃないの？」

ゆり

「..... ユイが黒くてドロドロに見えるわ」

ユイ

「まぶしっ！？ 奏さんが眩し過ぎて溶けそう！.. 私溶けそう！..」

直井

「音無さん、もう立華さんが扉を見つける場面になりましたよ」

音無

「そうだな。原作だと先に奏の方が入っていたから罫が作動してたけど………こっちはなんで作動してたんだ？ 野田潰れてたし」

日向

「ああ、それならただの解除ミスだ。チャーが解除間違えたらしいぜ？」

音無

「へー」

ユイ

「いいですか奏さん。赤ちゃんというのはですね……………」

奏

「……………（じくじく）」

ゆり

「ハートブレイク

ッ！！！」

ユイ

「ふおおおおおおッ！！」

ゆり

「私達のまっしろ天使ちゃんに変なこと教えんなやアあああああ

ああああああッ！！」

ユイ

「だ、だからって心臓に拳突き刺すとかやめい……………ッ！」

奏

「……………結局どういうことなの？」

直井

「いいんです立華さん。あなたは知らなくていいことです」

音無

「……………」

奏

「よく判らないけど、判ったわ」

日向

「……………というわけだ、音無」

音無

「つ、次行くぞ次!!」

第6話を見ながら

日向

「……………松下五段の扱いがひでえな」

音無

「ひき肉か……ハンバーグが食べなくなりそうだ」

直井

「や、ヤバい。吐きそうだ……ッ!」

日向

「うおい!? 吐くなよ! こんなところで吐くんじゃねえぞ!」

直井

「ふ、ふふ。貴様にぶっかけてやろうか……」

ゆり

「下ネタ言っなッ!」

直井

「勝手に下ネタにするなバカ女！」

ユイ

「でも字面だけ見るとそれっぽいですよね」

奏

「何が？」

ゆり

「ユイ言ったらぶつたk i l l ツ!!」

ユイ

「まだ何も言っ
てねエ
えええええええええええッ！！」

音無

「にしても、TKが先に奏と話すとは思わなかったな」

日向

「だよな！俺なんかゆりっぺに突き落とされたから影すら出てねえよ！！」

直井

「あと長ドスもったヤンキーの名前を完璧に間違ってますね」

日向

「巻貝だってよ！影薄いから名前覚えてもらえてねえんだな」

音無

「次ってなんだっけ？」

日向

「ゆりっぺのチートっぷりが明らかになる回だな！」

第7話を見ながら

直井

「なんだこの女！？ 化け物かッ！？」

ゆり

「こんな《美少女》捕まえて化け物とはなんだ化け物とはッ！？」

ユイ

「美少女？ 『微』少女の間違いじゃないですか？」

ゆり

「ユイぶっ殺す

ッ！！」

日向

「ってどっから刀持ってきたんだよ！？ あぶねっ！？ 振り回すんじゃない！！」

奏

「『微』少女？」

ぽよん（奏がゆりの胸に手を当てる）

ゆり

「ひゃうっ！？（顔が真っ赤）」

音無

「ぶふう！？（飲んでいた麦茶を噴き出す）」

直井

「ぬオおおおおッ！？（もろに顔にかかる）」

奏

「……………ゆり結構大きいよ？」

ユイ

「なあにiiiiiiiiiiiiiiii！？」

日向

「というか立華の行動に驚くわ!」

ゆり（どんどん赤く）

「な、ななななな、な、何をしてるの奏ちゃん!？」

奏

「……Cはあると見た」

ユイ

「ちくしょうオoooooooooooooo
おッ！！　これが死んだ時の体格の差かアあああああ
あッ！！！」

日向

「うお!? どんだけ泣いてんだよユイ!？」

ユイ

「ひなっち先輩ッ!!」

日向

「え！？ 何ッ！？」

ユイ

「私胸ちっちゃいんですけどいいですか!？」

日向

「ええええええええええ！？いきなり暴露！？別にいいけど！？」

最初から判ってたから！！」

音無

「お前ら何の話してるんだ!？」

奏

「いいなあ……………ゆり（未だ手を離さず）」

ゆり

「う、うう……………（頭から煙が）」

直井（麦茶滴るいいウツホ）

「立華さん。止めてあげた方がいいのでは？」

音無

「お前はその前に顔を拭け！ 悪かったから！」

奏

「……………私もおつきくなりたい（もみもみ）」

・ ・ ・ ・

奏

「という夢を見た」

ゆり

「まさかの夢オチ!？」

ユイ

「ちょ! 奏さんの夢の中の私どうなってますか!? 私あんなんじゃないですよ!! その男ども引いてんじゃないええええええええええッ!!」

日向

「……………ユイはピュアだよな？」

直井

「言葉が古いぞアホ。そしてチビ女が泣きながら走ってったぞ」

日向

「すまんユイ待ってくれエえええええええッ！！」

音無

「なんというかりアルな夢だったな。その光景が普通に目に浮かんだ……………」

奏

「あとで、続きも見てみる」

ゆり&音無

「「続くのッ!?!」」

t o b e c o n t i n u e d ?

外話 夢中の偽キャラコメンタリー 1（後書き）

読んでくれる人はいるみたいだけど、感想があまり来ないから正直不安です。

アンケートも今んとこ一人しか来てないし……………。

まあ、いつか。

てなわけで、次回は外伝。

では、これにて。

外伝2 今までの直井君 〱天使観察日記〱（前書き）

直井

「遅いわ貴様アアあああああッ!！」

レモン

「俺の中の直井変態像をうまく文章に出来なくな……………」

直井

「ちっ、結局公認変態になってしまった!」

レモン

「出来には納得いかないんだけどさ……………これ以上無理」

直井

「ふん! 貴様に最初から文才など期待してない。……………（かんぺ）ん? なんだこれ読むのか? ……………えーと、この小説は《キャラ崩壊》が常備だ。解ったうえで読んでくれ」

レモン
「では、
外伝2始まり」

外伝2 今までの直井君 へ天使観察日記へ

僕が神になる。

この世界に来てからそう思ったのは……………いつ頃からだったか。

ただ漠然と、この世界は神を選別するために存在しているのではないか……………。

そう、思った。

障害は多い。

神に抗おうとしているバカ共。

そして、《天使》

障害は大きい。

ならば、その障害を消すために行動しなくては…………。

そう考えた僕は…………一冊のマニュアルを見付け出した。

《Angel Breaker》

安直だが今の僕に相応しいものだと思った。

その古ぼけた本はページが破けていたり、文字が滲んでいたりして読めるページがほとんどなかった。

期待外れか……。そう思った僕だったが最後のページだけ読むことが可能だった。

《催眠術》

それも……高度なものだった。

一度かけてしまえば、外部からの強い刺激か、自分自身が解かなくてはかけられたままというもの。

この世界では、強い武器となる。

僕は、文字通り血を吐くほどの訓練を数年の時をかけて習得することが出来た。

神への第一歩といったところか……………。

これからのために僕は、《天使》の影へと隠れた。

催眠術を使つて一般生徒に《ある部屋》を作らせながら、そして自ら一般生徒に見せ掛ける。

バカ共は僕が一般生徒と思って干渉してこない。

《天使》を見定めるため……………生徒会副会長となった僕は、計画のため、今日も《天使観察》を続けていく。

○月×日

この時が止まったような世界に月日など関係あるのか、甚だ疑問だが、取り敢えず記しておく。

副会長になって、3週間程か……………。

観察だが、今のところ《天使》は生徒会長としての仕事しかしていないような気がする。

《天使》とはこんなものなのか？

そう、屋上でNPCの一人を蹴りつけながら、これからの計画の動きについて考えた……。

屋上から生徒会室へ向かう。

生徒会室といっても《天使》と自分しかない部屋だ。

NPC？ そんなの邪魔だから催眠術かけて来なくさせたさ。

観察の邪魔になつては意味がないからな。

……他に意味はない。

そして僕は生徒会室の扉を開けた。

「せいかいをしっこうする！」

開けた倍のスピードで扉を閉めた。

思わず眉間に寄ったシワを揉む。

……なんだ今のは？

いや、言葉にするのは簡単だ。

ただ単に、《天使》が生徒会室のど真ん中で《漫画》片手に《イナバウワー》しながら叫んでいただけだ。

……ダメだ。まったく意味が判らん！！

どうする……。普通に入っているのか？ それとも何か言った方がいいのか？

いい角度のイナバウワーでしたね！ とか……………。

……言えるかそんなん！

「直井君……」

「……ッ！？」

ハッと意識を浮上させると、扉の隙間からこちらを覗く《天使》の姿。

よく見ると瞳が潤んでいる。いつも無表情だが、ちゃんと感情があるらしい。

………といつかこの状況をどう切り抜ける

ツ！？

「……………見た？」

「……………見ました」

普通に答えてしまった……………。

僕が答えた瞬間《天使》はピシャリと扉を閉めてしまった。

……僕を閉め出す気か？

はっきり言つと、このまま帰りたいのだが、そのままでは神の名が
廃る。

覚悟を決めた僕はもう一度生徒会室の扉を開けた。

いつの間にか会長席に戻った《天使》は、腕を枕に顔を伏せていた。

やっぱり《天使》でも恥ずかしいのだろう。耳が赤く、頭から湯気
が出ていた。

……何故僕は《天使》には感情がないと思っていたのだろうか？
無表情だったからか？

かける言葉はいくら神の僕でも見つからず、無言のまま自分の席につく。

「……………」

「……………」

……………沈黙が痛い。

「……………会長？」

「……………」

僕が声をかけても、返事をせずに机に突っ伏したままの《天使》

だが、急にガバツと起き上がる。

そして、ゆつくりと僕に顔を向け、指を差してきた。

む、いったいなんだ？

「見なかったことにしよう……………」

「……………は？」

「おっけー？」

……………どうやら《天使》は今までのやりとりを無かったことにしたいらしい。

それは僕にとっても渡りに船だ。

「……………おっけーです、会長」

僕の返事を聞いた《天使》は大きく頷く。そして、何故か僕に向けた指を自分に向けた。

「見られなかったことにしよう……………おっけー」

何故自分まで……………。よく判らないが《天使》は満足いったらしくまた大きく頷いた。

その後は普通に生徒会としての仕事をして、その場で解散となった。

先に帰った《天使》を追うように僕も帰ろうとしたが、生徒会長の机の上の一冊の本が目についた。

それはさっきまで《天使》が持っていた漫画だった。

……《天使》も漫画って読むんだな。

そのままパラパラとページをめくり続けると、《天使》がやっていたポーズが載っていた。

どうやら、これを真似していたらしい。

ちょうどポーズをとっているキャラクターも生徒会長であった。

……無理だな。

《天使》とこの漫画の無敵超人と比べると、同じ生徒会長にはなれないことが十二分に解る。

よくて生徒かいちよーが限界だ。

それに僕としてもこんな超人じゃ困る。計画が刹那に露呈して逆に矯正されそうだ。

僕はこの漫画の生徒会長が《天使》だったら？ という想像をしてゲンナリしながら寮へと戻った。

《今日の天使》……………天使は意外とミ―ハー、なのか？

月○日

放課後になってから生徒会室に向かった僕を待っていたのは、生徒会室で無表情のまませつせと何かを作っている《天使》だった。

僕が生徒会室に入ったことすら気付いていないようで、一生懸命『箱型』の何かを製作し続けている。

「あ、……………直井君」

扉を閉めた音で僕に気付いた《天使》は、いつもの無表情で出迎える。

「こんにちは会長。……………いったい何を作っているんですか？」

自分の席に何も入っていないカモフラージュで持っているカバンを置いて、会長席に近づく。

《天使》はゴソゴソとその『箱』を僕に見えるように机の上に置いた。

かなでボックス

僕は目を閉じ、コメカミを押さえる。

「？……………どうしたの？」

「……………いえ、なんでもありません」

そのまま僕は自分の席に戻り、パソコンを開いた。

《天使》は不思議そうに僕を見ていたが、すぐにまた製作に取り掛かる。

……………ホントにこんなのが《天使》なのだろうか、あのバカ共が間違えてるだけなんじゃないだろうか？

「……………出来た」

《天使》の声に意識を戻した僕は、視線を声の方へと向ける。

完成した『かなでボックス』を少し嬉しそうに眺めている《天使》は、普通の女の子にしか見えなかった。

……………可愛いと思ってしまったのは……………錯覚だろう、きっと。

《今日の天使》……………本当に天使なのか、実は頭が春なだけの女の子の可能性があるという点。確率は30%ほどか……………判断は難しい。

○月 日

今回から《天使》から《会長》に変えて書くことにする。

まさか生徒会室にまで侵入してくるとは……………あのバカ共め。

このノートがあのだバカ共にバレてしまつては、僕がNPCでないことが露呈してしまう。それでは計画が成り立たなくなる可能性がある。

僕は会長の影に隠れるNPC……………あのバカ共にはそう認識して
いてもらわなくては……………。

今日はこれといってする仕事は別にない。

……………影で会長の観察でもしていよう。

昨日の夜に会長はあのバカ共と戦闘したらしく、ボロボロのブレザー
には所々血痕が残っており、顔は煤だらけだ。

ふらふらと生徒会室に入った会長は、いつも置いたままにしている

替えの制服を手に取り、着替え始めた。

.....

着替え終わった会長は
くそ、滲む。

まずい。鼻血がノートに落ち

落ちな

き

綺麗ではあった。

《今日

使》

.....天使と

言われるこ

ある。

月○日

会長可憐 って何を書いているんだ僕は。 くっ、何故僕は
ボールペンで書いてしまったんだ……。

気を取り直して続きを書こう……………。

早朝、NPCを催眠術で利用しながらあるモノを作らせていた僕は、
仕事をさせたまま生徒会室へと向かった。

かなでボックス

生徒会室前の廊下に鎮座された物体を見て、思わず頭を抱えてしまう。

まさか本当に使うとは……………。

近寄った僕は中身の取り出し口を開けて中を見るが、何も入ってはいなかった。

……………まあ、当たり前だろう。NPCにはまず認識出来ないだろうし、この世界にいる人間のほとんどがバカ共の仲間入りだ。まず誰も入れない。

それどころか、あのバカ共が見たら破壊するんじゃないか？

.....
脳裏に会長がこれを作っていた時の顔が浮かぶ。

.....

.....
くっ、今回かぎりだからな！

僕は『かなでボックス』を抱え、廊下を歩いていく。

NPC共が奇異な目で見てくるが、僕はそれを無視して寮へと向かった。

……自分の部屋に『かなでボックス』というのも、変な光景だ。

その後、会長には撤去したと伝え、僕が実際思ったことを書いた紙を渡した。

見るからに落胆していたが、これでまた作るとは言わないはずだ。

《今日の天使》……かなでボックス 見ていると笑みが溢れるのは何故だ？ ……どうしたんだ僕は。

月
日

最近……………会長を目で追ってしまう。

なんだなんだ何故だ何故だ……………。

「……………直井君」

おかしい。観察をしているはずなのに考察より仕草とかを書いてい
るのは何故だ？

「……………直井君？」

だいたい何が天使なんだ。会長が天使なのは外見だけじゃないか。中身なんて春うつらうな感じじゃないか。それがまたいい……………
まただ。何を考えているんだ僕は。

「……………ずるずる」

ん？ うおっ！？ 僕の頼んだ味噌ラーメンが消えていくだと！？

麺が消えていく方にバツと顔を上げると、器用にれんげで人の麺を啜る会長がいた。

「ちょ、会長！ 人が頼んだの食べないでください！」

会長は自分が頼んだ麻婆豆腐が目の前にあるというのに、人の麵をもぐもぐと咀嚼していた。

「……………返事しないから」

「ん？　僕に話し掛けてたんですか？」

「うん……………」

「そうでしたか、すいません。……………ってそれ食べる理由じゃないですよー！」

「……………美味しそうだったから、思わず……………ずるずる」

「いつまで食べる気ですか！」

人の麺を食べ続ける会長にツツコミを入れて、器を自分の方へと引く。

残った麺を器用に啜る会長。すべて口に含むと、小さな舌唇を舐めた。

思わず目が唇に な、何を考えているんだ僕はッ！

残りのラーメンを掻き込むように食べる。

顔を集まる熱を紛らわすようにスープを飲み込んでいく。

勢いよく完食した僕は、テーブルに器をたたきつけるように置いて、水を一気飲みした。

「……………そんなにお腹減ってたの？」

授業と授業の間の時間。それが今だ。

僕は空いた腹を押さえて着いた食堂には麻婆豆腐をすでに三皿食べていた会長がいたのだ。

「ええ、まあ」

「……………これも食べる？」

会長はそついうと啜えていたれんげで麻婆豆腐を掬い、僕に向ける。

……………「っ、こっこっこっこれは、まさか…………ッ!？」

「あーん」

ぶはっ！！ は、鼻の奥があ、熱いッ！ とうか本気が会長ッ！
？

「あーん」

会長はいつも通りの無表情のまま、自分も口を開けながら差し出してる。

こ、この人に羞恥心というものがないのか！？

……いや、あるにはあったか。

だが、こういう行為には羞恥心は反応しないらしい。

「あ、あのですね会長。 いりませんからホントに」

「あーん」

「いや、あの」

「あーん」

どつちから引く気はないらしい。

ええい、ままよっ!!

れんげにかぶり付くように麻婆豆腐を食べる僕。

………ってあれ？ これって間接キ

「からアアあああああああああああああああッ!!--!!」

なんだこれはアアあああああああッ!!--!! つあ、辛すぎるうう
うううう!!

み、みずはどこだ!!--!!

一気飲みしたんだったアアあああああああああああああ
ああッ！！

「……………はい、お水」

「すみません会長！」

会長の差し出したコップを引つたくるように取り、水を飲む。

少量だが、焼けるような辛さを抑えることは出来た。

ようやく思考能力が戻った。だが、よく見ると僕が飲んだのは会長

のもの……………。

「……………」

「……………おー、直井君の鼻から血が水のように」

その後、出血多量で文字通り死んだ僕は、保健室で目を覚ました。

そして、会長が凄く心配していた……………。

《今日の天使》……………仕事以外では名前で呼んでほしいと言われた。……………立華さんと呼ぶことになった。

……呼んだときの笑顔が忘れられなくなってしまった。

月 日

立華さんはよく転ぶ。

何かに躓いて転ぶのは解るが、立華さんの場合は何も無いところで転んでしまう。

そこで普通なら手を付くなりして顔を打ったりするのを防ぐのだが、立華さんはそのまま転ぶ。

効果音で言つと、べちゃ……という感じで。

そして鼻をぶつけて涙目になる。

それがなんとも萌 げふんげふん、痛そうだ。

現に、今転んだ。

「大丈夫ですか？ 会長」

万歳するように地面に潰れる立華さんは、そのままぶるぶると震えていた。

「……………会長？」

「い、いふあい……………」

ぶつけて赤くなった鼻を押さえながら立ち上がる立華さんは、涙目になりながらも僕の方を向いた。

くっ……………僕を萌え殺す気かつ！？　萌えてなるものかアアあああああああッ！！

「なふおい君。保健ひついつふえくる……………」

無理だアアあああああああああああああッ！！

立華さんが僕の横をトコトコと通り過ぎるのを確認すると、自分の鼻の奥が熱くなるのを感じる。

……いい加減慣れんと貧血になってしまふ。

僕は流れ出る鼻血をティッシュで押さえ、立華さんのぶちまけた書類を手に生徒会室へと向かった。

《今日の立華さん》……………何故あのバカ共は立華さんに攻撃できるのか疑問だ。男共は目が腐っているのか？

月 日

計画が実行可能段階までやってきた。

長かった……………ここまで来るのに。

あとは、立華さんが生徒会長から失脚することで成立する。

もう僕は立華さんを《天使》とは見ない。

やはりあの人はずただの女の子だ。近くで見えてきたから解る。

あの人は感情を他人に示すのが苦手なだけなんだ……………。

N P C じゃない、本物の人間だ。

あのバカ共は未だにそれをわかっていない。

いや、解るのは僕だけでいい。

もうすでに立華さんはあのバカ共のように《消す》ようなことはしないと決めた。

僕は神になる。

立華さんは……………女神か？

まあ、それは僕が神になったときに考えればいいさ。

月
日

その日が来るのは早いものだ……………。

僕は単身体育館へと向かっていた。

例の如く、あのバカ共が動きを見せた。

立華さんは今回の件では何もしないらしい……。

直接言われたわけではないが、立華さんとパンクちび女の会話を聴いていた。

そのとき立華さんは確かに「止めない」と言っていたので、僕自身は動く気はない。

ライブ？ 勝手にやっている。

あのバカ共の動きも僕の計画のうちに入っている。

そして……立華さんの動きも。

体育館には大勢の生徒がいた。

ちょうど曲が終わったらしく、熱狂は凄まじい。

扉の近くで辺りを見渡し、真っ白のニット帽をかぶった立華さんを見つけた。

たまにライブを聴きにくる時はいつもあの格好をしているが、気づいてるのは僕だけらしい。

僕は体育館の角に背を預ける。

僕はあまり音楽に興味がないため、こういう空気は好きじゃない。

……早く終わらせてほしいものだ。

その思いが伝わったかどうか知らないが、教師共が体育館に押し入って来た。

もちろん……情報を流したのは僕だ。

僕自身は動かない。なら、背景を動かすだけだ。

そして、立華さんがどう動くか予想がつく。

立華さんは僕の予想通り教師を止めに入った。

僕はそこで体育館をあとにする。

これで立華さんの立場が危うくなったはずだ。

僕の計画では、どうにかして立華さんを生徒会長から引き摺り落とすことが重要になってくる。

今回の件で落ちるかどうかは判らないが……………布石にはなったはずだ。

僕は寮へと戻る。このさきを見るのは不要だからな。

《今日の立華さん》……………止めるところを思わず写真に残してしまった。……………美しいだけでなくカッコいいとは、さすが立華さん！！

月 日

立華さんの寝顔は凄まじい破壊力がある。

言っている意味……………解るだろう？

思わず百枚ほど写真におさめてしまっただ。

……………とりあえず写真たてを買わなくては。

《今日の立華さん》……………天使の寝顔とはまさにこのこと。可憐過ぎて困る。

月 日

立華さんの写真が多くなってきた。

この前体育で体操服姿の立華さんを軽く二百枚ほど撮ってしまった。

N P Cの一人が売ってくれと抜かしたから消してやった。

《今日の立華さん》……………ブルマが残っているこの世界グッジョブ！！

月 日

引っ込みがつかなくなってきた。

立華さんばかり目で追っている。

これからのことを考えると……………鬱だ。

ノートがきれるのでこれで日記をつけるのはやめにする。

つけるとしたら………計画が完了してからだ。

ちっ、

立華さんの写真でも整理しよう。

t o b e c o n t i n u e d ?

外伝2 今までの直井君 〱天使観察日記〱（後書き）

奏

「直井君……………」

直井

「ち、違いますよ！ あくまで演技！ 演技ですよ！..」

日向

「素だろ？ これ」

ユイ

「もちろん！ てか誰がパンクちび女じゃアアああッ！..」

音無

「……………（寝顔の写真は欲しいな……………）」

ゆり

「鼻の下伸びてるわよ」

音無

「と、というか書くの遅すぎじゃないか!?!」

レモン

「うまく書けなかったんだ。短編も書きたくなくて」

ゆり

「短編? なんの?」

レモン

「今のうちに宣伝しとこうかな」

日向&ユイ

「やめる」

レモン

「はい……………」

奏

「次はもう少し早く更新します」

レモン

「では、これにて」

次回予告

「勉強教えてください!!」

「消えるかもしれねえんだぞ!？」

「お馬鹿」

「一点……………」

「頭いいんだね」

「これでテストは大丈夫!!」

第16話 お勉強しましょう。(前書き)

レモン

「クオリティがどんどんおちる」

遊佐

「というか結局更新遅くなってます」

レモン

「いや、書く暇なくてほんと……。つつか、なんで俺が書くと皆アホと変態になるんだろう」

関根

「私なんか本編出てないのに、キャラぶっ壊されたんだけど!？」

遊佐

「……………私もぶっ壊れてますね」

レモン

「なんか書いてたらそうになった……………」

遊佐

「まったく……。この小説には“キャラ崩壊”が常備です。それを考慮したうえで読んでいただけると幸いです」

レモン

「第16話……始まり」

関根

「……………って私のセリフそれだけ!？」

第16話 お勉強しましょう。

学習棟 C棟 廊下

「奏さん！ 勉強教えてください！！」

「……………」

学習棟C棟廊下にて、ピンク色の長い髪を持つ少女が、銀髪の長い髪を持つ少女へと抱きつくように胸に飛び込んだ。

銀髪の少女はよろけながらも彼女を受け止め、金色の瞳を彼女へと向ける。

その表情は無であるが、どこか驚いたようにも見える。

抱きついた少女…… ユイはアクセサリーであるはずの悪魔の尻尾をはち切れんばかりに左右に振りながら、涙目で銀髪の少女……立華 奏を見ていた。

「私に……？」

奏は驚きながらもユイに尋ねる。当然だ。ユイは戦線のメンバーで、奏は天使。友達ではあるが敵同士なのだ。

それも定期テストが近付いて戦線が影で活発に行動し始めるなかでの接触だったため、いつも以上に驚いていた。

「私全然勉強出来ないんです！　そこで生徒カイチョーである奏さんに勉強を教えてもらおうと思って……！」

「……………出来ないの？」

「出来ませんっ!!」

笑顔で宣言するユイに小さくチョップを喰らわせた奏は虚空を見上げ、浅くため息をつく、彼女の頭を撫でる。

「私に出来る範囲で教えるわ……………」

「ホントですか!? やったーッ!!」

ここで、天使と戦線メンバーのお勉強会という変な集まりが出来上がった。

女子寮 一室

「んで？　なんで俺はここにいるんだ？」

「それはひなつち先輩がアホだからですっ！！」

「アホで悪かったなアアああああああああッ！！」

私の部屋で言い合いをしているユイちゃんと日向君。

「……………なんで俺までいるんだろ」

そして、ここにいる意味すら解っていない音無君がいた。

自分の部屋にこんなに人がいることなどないので、新鮮な感じがする。

……でも、四人だと狭いかな。

私とユイちゃんで行うことになったお勉強会。

二人だけじゃつまらない……というユイちゃんの見により、仲間を集めるため奔走したユイちゃんは、屋上で昼寝していた日向君を叩き起こし、無理矢理連れてきた、らしい……。

音無君は廊下を歩いていたら、ユイちゃんに引き摺られる日向君に引っ張られた、らしい……。

「……………なあ、立華」

「……………座ったら？」

「……………あ、ああ」

私の隣に呆然と立っていた音無君に熊ちゃんクッションを渡す。

何故か熊ちゃんを受け取ったまま固まった音無君は、熊ちゃんを使わずに床に座った。

なんでだろ？　せつかく渡したのに……………。

「いつまでやってるんだアイツ等は……………」

座った音無君は、未だ立ったまま言い合っている二人を見てため息をついた。

私はそれを横目に急須にお湯を注ぎ、少し時間をおいてから、湯飲みに注ぐ。

「はい、お茶」

「あ、さんきゅ」

音無君は湯飲みを持つと、息を吹き掛けてそれを飲み始める。

「だいたいひなっち先輩がアホだからこうやって連れて来てあげたんじゃないですか！！　ちっとは勉強して頭良くしたらどうですか！？」

「アホなのは元からだ！……………つてちげエよ！？　つつか勉強な
んかしてどうすんだよ！　俺達死んでんだぞ！？」

「関係ありません！　そこにテストがあるから勉強するんです！！」

「山があるから登るみたいに言ってるじゃねえ！」

「いいからやれって言ってるんだコラアあああああッ！！」

「なんで命令形になってんだアアあああああああッ！？」

終わることのない低次元な戦い……………。話が逸れてるような気が
してならない。

ヒートアップしていく二人を呆れたように見ていた音無君は、視線

だけを私に向けた。

「なあ、立華。俺なんでここにいるのか判らないんだけど……………」

そういえば…………。よく見るとユイちゃん以外手ぶらだ。日向君はユイちゃんとの会話で何をするか判っているみたいだが、音無君は本当に何も知らないらしい。

「テスト勉強よ」

「……………は？」

音無君の目が点になった。

すぐさまハッと意識を取り戻すと、口元に手を当てたまま私に問い掛ける。

「テスト勉強って……………あのテスト勉強だよな？」

「……………うん」

いったいどのテスト勉強が解らない私はとりあえず頷いておいた。

「確かにゆりもテスト期間とか言って……………ん？ 日向、テストってちゃんと受けると消えるじゃなかったか？」

音無君は言い合ったままの日向君に問い掛ける。

……………消えるって、なんのことだろ？

私は隣で首を傾げる。

音無君の言葉を聞いた日向君は何かを思い出すようにハッとすると、ユイちゃんの肩を掴んだ。

「そうだよ、そうだった　　ッ！　おいユイ。テストを真面目に受けると消えちまうかもしれないんだ！　だからテスト勉強なんかするな、消えちまうぞ！？」

「そ、そそそうなんですか？　（近い近い先輩顔近いよー！）」

日向君は真っ赤になっているユイちゃんに気付かずに肩を掴んだまま前後に揺らし続ける。

……………ユイちゃんの顔が赤から青に変わっていく。

「……………い、いつまで揺らしてんじゃゴラァあああああああ
ああッ!?!」

「ぐはァああああああッ!?!」

……………飛んだ。

日向君が空を飛び、私のベッドへと落ちる。

日向君を吹っ飛ばしたユイちゃんは右足を振り上げた状態で息を荒くしていた。

「アホ先輩め……………（なんでこんな人を……………）」

ユイちゃんは振り上げた足を下ろすと、大きく溜め息をついた。

「邪魔です日向さん」

.....え？

ベッドから聞き慣れない声が聴こえてきた。

隣の音無君は湯飲みを持ったまま固まり、ユイちゃんは目を見開く。

私は恐る恐るベッドの方を向いた。

日向君を床に突き落とすベッドの上の塊。

………塊？

布団にくるまるような塊から出てきたのは、金色のツインテール。

「……………ってなんでここにいますかアアあああああああ
ああッ！！」

ユイちゃんが布団の中からもぞもぞと出てきた遊佐ちゃんを指差し
叫ぶ。

ユイちゃんにセリフを取られた私は口をパクパクさせたまま遊佐ちゃんを指した指を下げる。

「ふう、布団の中は暑いです」

「ぐほっ!？」

床で倒れていた日向君の上に乗った遊佐ちゃん。

いつから布団の中にいたのか解らないが、少なくとも10分以上はいたのだろっ、その頬は上気している。

「……………なんであんなところにいたんだ？」

呆れ気味の音無君が湯飲みをテーブルに置く。

遊佐ちゃんは日向君の上で正座すると、音無君に手に持っていたものを渡した。

「読み終わったのでここに置くついでに前のをまた読みに来ました」

だから、なんでここに置きに来るの？

「いったいなんだ？ 本かこれ……ずずず。……ぶぶうううう
う！？」

遊佐ちゃんに渡された薄く表紙のない本のようなものを、お茶を飲みながら開いた音無君は1ページ目を見た瞬間に口に含んでいたお茶を吹き出した。

目の前にいた遊佐ちゃんは日向君でそれをガードする。

「あつつアアあああああああッ!? 目がアあああああッ! 目がアアアあああああッ!?」

お茶が直撃した日向君は目を押さえながら床をのたうち回る。

眼球に直で当たっていたのが見えたので、相当目が痛いと思う。

……遊佐ちゃんは容赦無さ過ぎる気がする。

「誰だこんなもん描いたヤツは!？」

音無君は床に本を叩きつけて怒鳴った。

その表情は、さきほどのユイちゃんより青かった。

私もその本の内容が気になり、それにゆっくりと手を伸ばす。

「見ちゃダメだっ!!」

手に取る前に横から音無君に掠め取られた。

.....無念。

「それで？ ホントに描いたの誰だよ！？」

音無君は顔を真っ青にしながら怒るという凄いことになっている。

何が描いてあるのかな.....。

「ちょっと私にも見せてくださいよ」

「あ、おい！」

ユイちゃんが音無君から横取りすると、音無君が伸ばす手を避け、離れたところで本を開く。

瞬間、

「ぶふっ！？……………うわー」

見た瞬間に吹いたユイちゃんだったが、顔を赤くしながら高速で瞳を動かす。

次々とページがめくられていき、30秒もせずに読み終わってしまった。

「…………描いたのって誰なんですか？」

「関根さんです」

「…………関根っち」

ユイちゃんが死んだような目で虚空を見つめた。

何故か私にも何かが見えた。

虚空には、目が系線になりながら口角を吊り上げ、今にもस्पেশウム光線が出そうに腕をクロスさせる関根さんが見えた。

私も関根さんが描いた本見たいけど……………。

いくら手を伸ばしても、音無君もユイちゃんもいつこつに渡してくれない。

遊佐ちゃんはそのつと私に渡そうとしてくれているのに、他の二人が邪魔をする。

……………イジメ？

「……………涙目天使萌え」

バツと振り向くと、無表情の遊佐ちゃん。

……………遊佐ちゃんの声だった気がしたんだけど。

表情が変わってないので、勘違いみたいだ。

「……………というか誰か俺の心配してくれよ!？」

「あ、おはようございます」

「その返答おかしいッ!」

ようやく起き上がった日向君。少し目が充血していた。

「……………勉強しなくていいの?」

「忘れてました……………。とうかさっきの話はどうなったんですよ?」

私が話を戻そうとしたのだが、その話すら忘れられていた。

……………もう私帰っていいかな。

ここ私の部屋だった……。

にしても、さっきの話ってことは………音無君が言ったことかな？

「消える………って話？」

「そうです奏さん。それって本当なんですか？」

「テスト受けるだけで消えるなんてことは、絶対にないわ」

その瞬間、何故かこの部屋から音が消えた。

……あれ？ 私なんかマズいこと言った？

「……………マジか？」

日向君が真剣な表情で私を見た。

私はそれに大きく頷く。

この世界で消えるための条件は、《後悔》が消えたか……………また
は《生きた意味》が見つかった人だけ。

テストを受けるだけで、消えるなんてことは絶対にないのだ。

「テストはちゃんと受けても……………消えないんだな？」

「うん。まず消えない」

音無君の最終確認に、私は頷いた。

日向君は床にどかと座ると頭をかき、その手で膝を叩く。

「こりゃゆりっぺに報告入れるか……」

「そう、だな。新しい情報になる」

日向君に音無君が同意する。二人とも真剣な表情だ。

真剣な表情の日向君を頬を朱に染めながらボーツと見ていたユイちゃんは、ハッとすると頭を何度も振った。

「じゃ、じゃあ大丈夫ってことも判ったんでテスト勉強しましょう
！」

「……………やりたくねえなあ」

日向君はふっと表情を緩めると、いつものように戻る。

それにユイちゃんが突っ掛かり、そんな二人を見て音無君が肩の力を抜く。

ゆったりとした空気が戻ってきた。

「ほらひなっち先輩っ！ 勉強するんですからもっとこっち来てく
ださい！」

「へーいへい」

「俺って勉強出来たのか？ 遊佐はどうする？」

「暇ですし..... やります」

私はみんなにお茶を渡し、大きいテーブルを《とうえい》した。

「……………便利だな、おい」

日向君が呆れたように言うが、出来るものは活用しないと……………。

「……………じゃあ、始めようか」

テスト勉強……………開始。

といつても、ユイちゃん以外勉強道具は持ってきていなかったのだから、あらかじめ私が作っておいたミニテストを皆にやってもらった。

ある小説を参考に見てみた……………。

実際のテストもこんな内容になるのでちょうどよかったからだ。

比較的音無君と遊佐ちゃんはスラスラ解いている。

音無君がたまに首を傾げているのは、多分記憶が無いからなんで解けているのか判らないからだろう……………。

音無君は……………大学生、だったかな？

視線を変えると、頭をかきながら唸っている日向君と、頭からぷすぷすと煙が出ているユイちゃんが映る。

二人はやっぱり勉強は苦手のようだ。

あと、30分。

私は赤ペンを用意して、度の入っていない眼鏡をかける。

さてさて……………。

赤ペン先生奏で皆のテストを見ていこう……………。

えーと……………。テストが終わって採点した私ですが。

……うん、酷いや。

答えがどうこうじゃない。

うん、なんかもう終わってる気がする……。

とりあえず、一部見てみようか……。。

奏のミニテスト

(1) 簡単国語

問題

《十六夜》の読みと意味を答えなさい。

普通高校生ならまず解けると思っけど……………。

《音無君の答え》

読み 《いざよい》

意味 陰暦の16日

まあ、解るよね。音無君正解。

《日向君の答え》

読み 《いざよい》

意味 十五夜より遅い月のこと

うん、確かに《十六夜の月》とも言っね。ギリギリ正解かな？

《ユイちゃんの答え》

読み 《じゅうろくのよる》

意味 盗んだバイクで走り出すこと。（若さゆえの過ち）

あー、そのまま読んだんだ。

しかもそれ《十五の夜》だから。というかよく知ってるね。年齢的に知らないと思ってた。あとカッコはいらない。

《遊佐ちゃんの答え》

読み メイド

意味 忠誠心を鼻から垂れ流すこと。パット長でも可。

うん。とりあえず東に向かって走っていけばいいと思うよ。

「ねえ、本気でやった？」

「本気ですが何か？」

遊佐ちゃんは無表情すぎてネタでやっているのか判らないよ………
…。

化学は苦手だから、とりあえず小説を出してみただけど……
…前提が間違っている気がしなくもない。

問題

調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。

《音無君の答え》

問題点……まず、マグネシウムで鍋を作ろうとした時点で間違っているが……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン

正解。まあ、テストの問題だからね。

《日向君の答え》

問題点……………換気をしていなかったこと。

合金の例……………鉄

換気って言われても……………。その場の設定までは私には判らないよ。

あと、鉄は合金じゃないよね。

《ユイちゃんの答え》

問題点……食材がなかったこと。

合金の例……ダイヤモンド

食材あっても困るよ。

ダイヤモンドで鍋作ってどつするのね……………。

《遊佐ちゃんの答え》

問題点……………とーちゃんが火を使わせないこと。

合金の例……………熊

どこの五歳の女の子なの？ 小岩井さん家に帰ってほしい……………。

名前がそれだからって合金のところに熊って書かないでよ……………。

心が折れそう……………。

(3) 英語

問題 英文を訳しなさい。

This is the bookshelf
that my grandmother had
used regularly.

《音無君の答え》

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

うん、正解。音無君には簡単だったね。

《日向君の答え》

「これは私の本棚が愛用していた祖母です」

……………うん。まずは自分が書いた文を見直すようにね。

《ユイちゃんの答え》

「私……………おばあちゃん、いないんだ」

え……………？

……………なんかごめんなさい。

《遊佐ちゃんの答え》

「この本棚には漫画がたくさん詰まっています（主に
（以下略）」

……………もつやる気ないよね。

もう何も言えないよ。

心が折れました……………。

「……………ネタだよな。コレ」

「もちろんです」

「……………真面目にやってやれよ」

「とりあえず涙目の天使が見たかったんで……………萌えます」

「……………（もう何も言わない）」

そんな会話があったとは知らずに、落ち込みながら採点を続けた。

テストを皆に返した。

音無君は満点だった。

「頭いいんだね、音無君」

「そう………みたいだ」

音無君は頭をかきながら自分の答案を見ていた。

次に日向君は………六割の正解。

「ふう………赤点じゃなくてよかったぜ」

日向君は答案を見て肩を下ろした。

隣では、ぷるぷると答案を握り締めるユイちゃんがいた。

「おうユイ何点だったんだ？」

「あ、ちょー!？」

日向君はユイちゃん的答案を引つたみると、目を通して固まった。

.....まあ、固まるよね。

「.....一点」

「しょうがないじゃないですかアアあああああああッ！
！ 解んなかっただもオオオオオオオオオんっ!!」

「…………俺にアホって言えねえじゃん」

…………確かに。

顔を赤くしながら日向君をぽこぽこ殴るユイちゃん。若干涙目だ。

「……………そっぴや遊佐は？」

その光景を呆れて見ていた音無君だが、会話に入ってこない遊佐ちゃんに振り向く。

遊佐ちゃんはというと、すでに答案を折り畳んで私の本棚を物色している。

……自由すぎるよ遊佐ちゃん。

「……ああ、はい。どうぞ」

遊佐ちゃんは音無君に答案を放り投げる。

それを受け取った音無君は、答案を広げると、すぐに折り畳んだ。

……だって零点だもん。

真面目にやらないんだもん、遊佐ちゃん。

「まあ、これでとりあえずテストは大丈夫ですね!!」

どい見て言ってるのさユイちゃん。

「……………ユイちゃんは居残り」

「……………はい」

ユイちゃんは小さく答えると、両膝をついて頭垂れた。

「……………頼むわ、立華」

日向君が苦笑してユイちゃんの頭に手を乗せる。

「とりあえず赤点にはなんねえように頼む」

……………頑張ります。

今日は徹夜になりそうだ……………。

とほほ……………。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第16話 お勉強しましょう。(後書き)

レモン

「……………」

音無

「……………なんか、作者が死んでるんだが」

奏

「昨日大学でプレゼン発表があつて大勢の前で一人で説明して疲れ
たんだって」

日向

「読んでるヤツで同じ大学のヤツはいねえだろ？」

ゆり

「……………いないんじゃない？」

奏

「赤Tシャツ着た眼鏡で発表してたのが作者だって……………もしも
判ったときは、合言葉《天使ちゃんマジ天使》っていつてくれば
反応するって」

日向

「いねえよ、そんな奇特的なヤツ」

ゆり

「次回はようやく私の出番ね！」

奏

「そして私が零点になる話」

奏以外

「「「ごめんなさい！」「」「」

レモン

「……………早く、更新、出来るよう、頑張る、す。では、これにて」

次回予告

「あー、いて」

「こんなことしなきゃいけないのか!」

「こうでもしなきゃ、神の足下さえ見えないのよ……」

「好きです! 付き合ってください!」

「……私は」

「僕が 神だッ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095/>

私は天使なわけじゃない

2010年10月17日01時17分発行